なんちゃらプラネット

Crystal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんちゃらプラネット

【Ｎコード】

Ｎ８５３５Ｄ

【作者名】

Ｃｒｙｓｔａｌ

【あらすじ】

疑似惑星を創造し、その美しさを競うプラネットコンテスト。真菜たち白鳳学園なんちゃらプラネット部は、八月末に開催されるプラネットコンテスト出場を目指していた。

第一話　なんちゃらプラネット（前書き）

２００４／０６／２９～２００４／１０／２８　連載作品
ショウとアリスの壮絶な闘いから２０年後の世界
Ｃｒｙｓｔａｌ　Ｌｅｇｅｎｄ　シリーズからは、優子、リウム、飛鳥がゲスト出演します

同一作者小説紹介
★Ｃｒｙｓｔａｌ　Ｌｅｇｅｎｄ　シリーズ★　「Ｃｒｙｓｔａｌ　Ｌｅｇｅｎｄ　７｜２　～トルマリンの胎動～」、「Ｃｒｙｓｔａｌ　Ｌｅｇｅｎｄ　７｜３　～はじまりの時代～」、「Ｃｒｙｓｔａｌ　Ｌｅｇｅｎｄ　７｜４　～もしかして怪談？～」
★超獣神グランゾル　シリーズ★　「超獣神グランゾル」、「鳳凰編」
★なんちゃらプラネット　シリーズ★　「なんちゃらプラネット」
★美咲ちゃん　シリーズ★　「～もしかして怪談？～」
★４コマ劇場　シリーズ★　「桜のひみつ」、「ラズベリル☆ショート劇場」

第一話　なんちゃらプラネット

夏休みも間近となった七月中旬…。朝だというのに、陽射しは容赦なく地面を熱している。

茹だるような暑さの中、わたし野乃原真菜は、幼馴染みで同級生の遠野健介ちゃんと一緒に、早足で学園へと向かっていた。

「はぁ～…」

健介ちゃんが見せつけるようなため息をつく。

「真菜さんは、もう少し早く起きれないもんですかね～…？」

健介ちゃんは、やや呆れ口調で呟いた。

「そ、そんなこと言ったって～…」

わたしは、苦笑気味に呟く。というのも、わたしは朝が苦手で、健介ちゃんに起こされることが多かった。いや…、毎朝のように起こしてもらっているといったほうが正しいかもしれない。

「普通は逆だろ！　オレが寝過ごしていたら、幼馴染みの女の子が優しく起こしに来てくれるってパターン！」

健介ちゃんは、なぜか泣きそうな顔をする。そんな大声で叫ばれても、わたしにはどうすることも出来ない問題であった。

もちろん、わたしも早起きの努力はしている。目覚まし時計は三分刻みで五つほどセットしているし、ステレオの自動再生も活用していた。それでも起きられないのだから、仕方のないことだと諦めてもらうしかない。

「ほら健介ちゃん。早く行かないと遅刻になっちゃうよ！」

わたしは、話を切り上げるようにして、歩くスピードを速める。

後方では、健介ちゃんが“いったい誰の所為だ！”と叫んでいた。

『健介ちゃん…、ごめんなさ～い…』

これ以上話し込んでいると本当に遅刻してしまう。わたしは、心の中でそっと謝っておくことにした。

十五分ほど歩くと、いくつもの立派な校舎が見えてくる。初等から高等までの総合学園、人間神飛鳥さまが通っていたことでも有名な、私立白鳳学園である。わたしと健介ちゃんは、この春から白鳳学園の高等部に通っていた。

…といっても、白鳳学園はエスカレータ式の学校なので、簡単なテストを受けるだけで進学することができる。ただし、受験入学や年度途中での転入には、よほどの成績を収めないといけないらしい。それを考えると、“地元で良かったな～”と、あらためて思ってしまうのだった。

わたしが何気なく学園を眺めていると、突然、背中から誰かが抱きついてくる。驚いて振り向くと、わたしたちの後輩である鷲崎瑞希がにっこりと微笑んでいた。

「マナ先輩、おはようございます～♪」

瑞希は、元気良く挨拶をする。

「マナ先輩は、今日もかわいいですね～～～♪」

そう言って、瑞希はわたしに頬擦りをしてきた。わたしは、その攻撃におもわず苦笑してしまう。

「あははっ、瑞希は今日も元気だね～」

瑞希のハイテンションには、時々ついていけないところがある。いったい、どこからそんな元気が湧き出てくるのだろう。

「おい瑞希…。オレには挨拶なしかよ？」

完全に無視されていた健介ちゃんが、ムッとした表情で呟く。すると、瑞希は健介ちゃんに視線を向け、無表情に挨拶をした。

「あ…、健介…。おはよう…」

瑞希の態度に、健介ちゃんが怒りだす。

「って、オレは呼び捨てかーーー！」

かなり怒っているように見えるが、健介ちゃんも本気ではない。軽いノリのコミュニケーションといえるだろう。

「健介は、健介で充分でしょ！」

瑞希は、歯を剥き出しにして、健介ちゃんを睨みつける。明るく

て誰にでも優しい瑞希だったが、なぜか健介ちゃんには敵対心を持っているようだ。そのわけを聞いてみたこともあるが、瑞希は教えてくれなかった。
「だいたい、ただの幼馴染みってだけで、毎日毎日マナ先輩と登下校しちゃったりなんかして～…」
瑞希は、何をそんなに怒っているのだろう…。
「いい気になってるんじゃないわよ！　ええぇ、マナ先輩に近づくなーーー！」
わたしには、瑞希が怒っている理由を、まったく想像することができなかった。
そんな感じでしばらくじゃれ合っていたのだが、予鈴が聞こえてきたため教室へ向かうことにする。瑞希も、慌てて隣接している中等部の校舎へと駆け込むのだった。

教室に入り、わたしは自分の席に着いた。内ポケットから個人情報が記録されているパーソナルカードを取り出し、学園のシステム端末でもある机に差し込む。すると、半透明なモニターが浮かび上がり、わたし専用の画面が起ち上がった。
途端に、小さなモニターが出現し、さきほどまで一緒だった瑞希の顔が浮かび上がる。
『マ～ナ先輩♪』
瑞希は、ニコニコ顔で喋りかけてきた。そこに、もう一つのモニターが出現する。
『おまえら…、もうすぐホームルームだろうが…』
モニターには、健介ちゃんの呆れた顔が浮かんでいる。健介ちゃんの席を見てみると、小さなモニターにわたしと瑞希の顔が映っていた。
『女の子の会話に割り込んでくるなんて…、健介のスケベ！　最低ねっ！』
瑞希が激しく健介ちゃんを罵り始める。二人ともわたしの大切な

“お友達”なのだから、仲良くしてほしいものであった。
そのとき、わたし宛てのメールが届いていることに気づいた。二人の言い合いを聞きながらアイコンに触れてみると、届いていた映像メールの再生が始まった。
『え～…。部長の神倉です…』
再生されたメールを見て、わたしは飛び上がるほど驚いた。
「か、神倉先輩！」
わたしは、おもわず大きな声で叫んでしまう。それは、わたしが所属するクラブの部長、神倉昴先輩からのメールだったからだ。わたしの大声に、クラス中の注目が集まる。わたしは、顔を真っ赤にさせながら、食い入るように神倉先輩のメールを見つめた。
メールの内容は、本日の部活が中止になったという連絡であった。部員全員に送られたものなのだが、憧れの神倉先輩からのメールである。再生が終ったメールは、パーソナルカードの最重要フォルダに保存しておくことにしよう。
おもわぬお宝映像を手に入れて喜んでいると、いつの間にか健介ちゃんと瑞希の罵り合いは終っていたようだ。それどころか、二人とも同じようなジト目で、わたしを睨んでいる。
「え～っと…、なにかな～？」
わたしが苦笑気味に問いかけると、瑞希はムッとした表情で問いかけてきた。
『マナ先輩…。やっぱり部長のこと、好きなんですか～？』
その問いかけに、わたしの顔はさらに赤くなってしまう。
「ななな、なに…を！」
ずばりな質問にわたしがあたふたしていると、なぜか健介ちゃんたちは、落ち込んだように項垂れる。学園でも一二を争うほどかっこいい神倉先輩は、わたしだけではなく、女子生徒たちの憧れでもあるからだ。
そうこうしていると、ホームルームの時間となった。

担任教師がやってきて、教壇のシステムを立ち上げる。当然、授業中は通信が禁止されているため、個人回線は一斉に遮断された。
生徒たちは、起立して礼をする。担任が手元のシステムで出欠を確認し、簡単なホームルームがはじまった。
連絡事項のアイコンが次々と個人端末に送られてくる。それらの一つに触れてみると、拡大されて読みやすくなった。だが、たいした内容でもないため、軽く目を通しただけでアイコンに戻す。
わたしは、担任の説明を聞きながら、次々と連絡事項を確認した。その中にあった小さな募集通知に、わたしの興味は向けられた。
「第十五回、プラネットコンテスト開催…か～」
わたしは、何度も目にしてきた通知を読み返してみる。それは、毎年夏休みに開催されている、プラネットコンテストの参加募集通知であった。
プラネットコンテストとは、プラネットメーカーと呼ばれる装置で疑似惑星を創り、その美しさを競い合う大会のことである。
何を隠そう、わたしの所属するなんちゃらプラネットは、惑星を創ってプラネットコンテストで入賞することを目指していた。いや…、惑星を創ろうとしているといった方が正しいだろう。なにしろ、なんちゃらプラネットが創設されてから十二年間、いまだに惑星を完成させたことがないのだから。
現在、プラネットメーカーは、全世界で約一千万台も稼動しているという。その中で、実際に惑星を誕生させることが出来るのは、年間を通してみても三十台ほどだといわれていた。プラネットメーカーとはそれほどデリケートなシステムであり、惑星を創造することはとても難しいことであった。
「放課後…、行ってみようかな…」
コンテストの募集通知を見た所為か、わたしは部室にあるプラネットメーカーの様子が気になってしまう。わたしたちの気づかない間に、星が誕生しているかもしれない。そんなことを考えはじめると、いてもたってもいられなくなってしまった。

『ま～…、覗くだけなら問題ないよね…』
わたしは、放課後になったら部室へ行ってみようと心を決める。
それが…、これから体験することになる、不思議な出来事の始まりでもあった。

古びた北校舎の地下に、わたしたちなんちゃらプラネットの部室がある。
階段を下って少し進むと、いかにも重々しそうな扉が見えてきた。わたしは、壁にある装置へ自分のパーソナルカードを通し、扉のロックを解除する。
パーソナルカードには、この学園の生徒であることを証明するデータが入っていた。
扉のロックを外すことはもちろん、学園の備品や教室を借りるためにもカードは必要である。パーソナルカードを持たずに学園内へ入れば、不審者として警備員に囲まれてしまうし、個人画面を上げられないので授業も受けられない。学園に通うための必需品であり、別名“生徒カード”とも呼ばれていた。
学園側は、パーソナルカードのデータによって、生徒の行動を監視している。だが逆に考えてみれば、禁止されていること以外は、全ての行動がカードを使うことで認められているといえた。
金属製の扉をゆっくり開き、わたしは薄暗い部室へと入る。机の位置を確認しながら慎重に奥へと進むと、淡い光を放つ円柱状のガラスケースが見えてきた。直径が三メートル、高さ四メートルほどの巨大なもので、一見すると水族館にある水槽のようであった。しかし、中に浮かぶのは魚ではない。そこには宇宙が広がっており、細かな塵やガス雲が渦を巻いていた。
これがプラネットメーカーの中核となる装置である。
装置の中には、宇宙空間が再現されており、様々な現象を起こすことができる。そして、何億年もかかるような星の誕生を、わずか

数ヶ月で再現してしまうもの凄い装置でもあった。
　プラネットメーカーは、いまから二十年ほど前に発売されたシミュレーションゲームである。装置をそのままに、ＯＳを乗せかえることで、バージョンアップも可能となっていた。部活で使っているプラネットメーカーは、装置こそ十二年前のものだが、ＯＳは三年前に発売された最新の四作目だった。
　実際の星を創るなど、当時では考えられない技術だったという。噂によれば、ここと違う世界の技術を使って開発されたそうだ。
　現在の最先端技術をもってしても、プラネットメーカーをゼロから再現することはできないといわれている。プラネットメーカーの装置を研究している技術者もいるぐらいなのだ。
　そんなことを考えると、異世界の技術を使っているというのも、デマではないかもしれない。ただ、わたしたちユーザーにしてみれば、どんな凄い技術で出来ていようが関係のないことでもあった。

「この調子なら、今年のコンテストも見送りかな～…」
　わたしは、昨日とまったく同じ光景に、大きなため息をつく。ガラスケースの中には、細かな塵やガス雲が漂っているだけで、大きめの岩石すら見当たらなかった。
　プラネットメーカーの最終目的は、直径一メートルほどの惑星を創り上げることである。それには、まず自ら光や熱を発する恒星を誕生させなくてはならない。惑星は、恒星が誕生するときに発するエネルギーによって出来るとされているからだ。
　ただし、それらの星を創るために正しい手順は無く、偶然に頼る部分が多いのも事実である。それでもプラネットメーカーに挑戦するユーザーが多いのは、平均月収の二か月分で装置が揃えられる手軽さや、自分たちの手で恒星や惑星を創ることができるという夢からなのだろう。
「数値的にも、変化なし…っと」
　わたしは、メインコンソールのモニターをチェックして落胆する。

八月末に開催されるコンテストを目指しているのならば、この段階で何らかの反応が欲しいところであった。
　このまま何の反応も無ければ、星の創造は失敗したことになる。そうなれば、現時点での環境を一度リセットして、候補地探索から始めなければならない。つまり、この数ヶ月で収集したデータは、まったくの無駄になってしまうわけだ。
　わたしがなんちゃらプラネットに参加したのは、いまから二年前のことである。それからは、失敗とリセットの繰り返しであった。プラネットメーカーとは、解説書通りに進めれば必ず星が創れるといったゲームではない。そんな難しさも面白いところであるのだが、ここまで無反応だと、本当に星が創れるのか心配になってきてしまう…。
「早く、星に育ってね…」
　わたしは、ガラスケースに手を添えて、祈るように呟く。そのとき、ケース内で起こっているある変化に気づいた。ガス雲の中心に、黒い点のようなものが浮かんでいたのだ。
「まさか、星の誕生！」
　わたしは、おもわず覗き込んでしまう。こんな変化は、いままでになかったことである。
　黒い点は、激しく回転しながら、周りの塵やガス雲を集めている。心なしか、黒い点は少しだけ大きくなったように思えた。
　まさに、話に聞くような星の誕生である。わたしは、黒い点を食い入るように見つめた。
「み、みんなに…、神倉先輩に知らせなきゃ！」
　わたしは、急いで学園から支給されている携帯端末を取り出す。携帯端末にパーソナルカードを差し込み、神倉先輩へ連絡するためにアドレス帳を呼び出した。
　プラネットメーカーの様子は常に記録されているため、明日になれば星の誕生を確認することができる。しかし、みんなが待ち焦がれていた星の誕生…。吉報は、早めに知らせたほうがいいだろう。

携帯端末を操作して、神倉先輩のアドレスを指定する。だが…、通話パネルを押そうとして、おもわず指が固まってしまった。
「え～っと…」
わたしの指は、緊張のためか、プルプルと震えてしまう。心臓が激しく鼓動し、身体も火照ってくる。こんなことがなければ、自分から先輩に通信を入れるなど、考えられなかったはずだ。
「すぅ、はぁ…、すぅ～、はぁ～～～…」
わたしは、顔を真っ赤にさせながら、無意味な深呼吸を繰り返す。パネルを押すだけなのに、これほど緊張してしまうとは、我ながら情けなく感じてしまう。
「よしっ！」
わたしは、覚悟を決めて、通話パネルを押すことにした。
コール音を聞きながら、わたしのドキドキはさらに増していく。着信履歴が残るため、いまさら後戻りもできない。あとは、神倉先輩が出てくれるのを待つだけである。
星の誕生…。わたしは、そう信じて疑わなかった。
そのことで、ある出来事に気づくのが遅れてしまう。プラネットメーカーに発生した黒い点が、激しく回転しながら、徐々に膨れ上がっていたことを…。

『もしもし、野乃原さん？　いったいどうしたの？』
携帯端末のモニターに、神倉先輩の顔が映し出される。その途端、口から心臓が飛び出してしまいそうなほど焦ってしまった。
「かかか、神倉先輩…ですか！」
わたしから連絡しているわけだし、映っているのも神倉先輩である。わたしは、頭の中が真っ白となり、自分で何を言っているのかわからなくなっていた。
神倉先輩は、わたしのそんな様子に気を悪くすることもなく、優しく微笑んでくれている。その笑顔こそ、わたしを慌てさせている原因だということに、神倉先輩はまったく気づいていないだろう。

『今日は、ゴメンね。部活、急に休みにしちゃって』
神倉先輩は、わたしがなかなか話し始めないことに気づかって、そんな話題をふってくる。
「そ、そう！　部活！」
その言葉を聞いて、わたしは、何のために通信したのかを思い出す。
「神倉先輩、じつは、いま部室に来てるんですけど…」
わたしは、神倉先輩が喜ぶ姿を想像しながら、ガラスケースに視線を向けてみる。
「…え？」
そのとき、わたしは初めてプラネットメーカーで起こっている異様な出来事に気づいてしまった。ガラスケース内には、さきほどとは比べものにならないほど大きな黒い塊が浮かんでいる。その塊は、時折放電を繰り返し、激しく回転しながらガラスケース一杯に膨れ上がっていた。
「な…、なに…これ？」
わたしは、驚きのあまり、手にした携帯端末を床に落としてしまう。
異様な状況を感じ取ったのか、神倉先輩がわたしの名前を大きく叫んでいた。でも、わたしには、それに答えている余裕はなかった。
わたしは、恐る恐るガラスケースに近づいてみる。ガラスケースは、触れなくてもわかるほど熱を持っていた。突然、ピシッといった音が聞こえ、ガラスケースにひびが入る。よほどの熱か力が加わらない限り、厚さ二十センチもある特殊ガラスがひび割れることはないだろう。
部室内に、危険を知らせるアラーム音が鳴り響く。わたしは、慌ててメインコンソールで、プラネットメーカーの状態を確認した。
「重力レベルが限界値を超えている…。これって…、ブラックホール！」
そんな仮説にたどり着き、わたしは愕然としてしまう。だが、い

つまでも呆然としているわけにはいかなかった。
「そ、そうだ！　座標軸の変更をすれば…」
わたしは、ブラックホールと思われる現象が発生している座標を、ずらしてしまおうと考えた。システムリセットをすれば簡単だが、その場合、全てのデータが失われてしまうことになる。予期せぬ事態とはいえ、プラネットメーカーに初めて変化が現れたのだ。貴重なデータだけは、なんとしても残さなければならない。
候補地を探すときのように、座標軸をずらすことができればこの現象も収まるはずである。わたしは、メインコンソールの操作パネルを起動させた。しかし、システムがフリーズしているのか、操作パネルはまったく反応しない。
ガラスケースは隙間もなく黒一色に染まっており、装置の外へも放電現象が始まっている。わたしは、事の重大性に改めて気づかされた。
慌ててメインコンソールの足元にある、アナログ式のリセットボタンに手をかける。もはや、データを残さなければならないと考えている余裕もなかった。
『野乃原さん、どうしたの！』
床に落とした携帯端末から、神倉先輩の声が聞こえてくる。その声を聞いたとき、わたしの胸は引き裂かれるほど痛んだ。システムリセットをすれば、全てのデータが初期化されてしまう。それは、これまでがんばってきた環境が、一瞬にして消えてしまうことを意味していた。
どががっ！　プラネットメーカーの一部から爆炎が噴き出す。どうやら、あまり悩んでいる暇はなさそうだ。
「神倉先輩…、みんな…。ごめんなさい！」
わたしは、祈るような気持ちで、リセットボタンを一気に押し込む。その瞬間、黒い塊が急激に小さくなり、ガラスケース全体にひびが入る。
そして、全ての光が失われるように、辺りは暗闇に包まれるのだ

った。

『いやぁああっ！』

意識を取り戻したわたしは、おもいっきり身体を起こした。

『って…、あれ？』

辺りを見回し、その光景に驚いてしまう。そこは、なんちゃらプラネットの部室ではなく、自分の部屋だったからだ。

いったい、いつのまに戻ってきたのだろう。また、プラネットメーカーのブラックホールは、どうなってしまったのだろうか…。しばらくそんなことを考えていたが、それで答えが見つかるはずもない。わたしは、身体をほぐすように、大きく伸びをした。

どうやら帰ってすぐに寝てしまったらしく、制服を着たままであった。わたしは、枕元の目覚まし時計を確認する。時刻は、ちょうど八時二十分になったところのようだ。

『ん～…？』

わたしは、僅かな違和感を覚えながら、窓の方に視線を向けてみた。

窓からは朝日が差し込み、雀のさえずりも聞こえてくる。そこから導き出される事実…。いまは、夜の八時二十分ではなく、朝の八時二十分のようである。

わたしは、再び考え込んでしまう。平日の朝、しかも八時二十分を過ぎている。いつもなら、学園へと向かっている時間帯であった。

サァーーーっという音と共に、わたしの顔から血の気が引いていく。

『ち…、遅刻ーーー！』

わたしは、慌てて飛び起き、そのままの姿で部屋を出た。いつもなら健介ちゃんが来てくれるはずなのに、今日はどうしたというのだろうか…。わたしは、階段を駆け下りて、リビングへと入った。

『ちょっとお母さん！　どうして起こしてくれなかったの…って、

あれ？』
文句を言おうとして飛び込んだのはよかったが、リビングにお母さんの姿は見当たらなかった。
こんなに朝早く、どこに出かけたのだろう。だが、いまはそれどころではない。わたしは、必要最低限の準備だけを整え、急いで家から飛び出した。

息を切らせながら、全力で学園へと向かう。学園近くまで来ると、登校中の生徒たちが多くなる。どうやら、遅刻は免れたようだ。
『ふぅ～…』
学園に着いたわたしは、大きく息をついて呼吸を整える。靴を履き替えて、早足で教室へと向かった。
『おはよ～♪』
わたしは、挨拶をしながら教室に入る。しかし、誰も返事をしてくれない。不思議に思いながら見回してみると、クラスメイトの姿は疎らで、ほとんどが席を空けていた。
『あれ？　もうすぐホームルームの時間だよね…』
わたしは、小首を傾げながら自分の席に着く。気のせいかもしれないが、教室全体が暗く沈んでいるように感じられた。
そんな様子を不思議に思っていると、健介ちゃんが教室に入ってくる。健介ちゃんは、機嫌でも悪いのか、ムッとしながら自分の席に着く。そのまま、居眠りでもするように、机へうつ伏せてしまった。
『健介ちゃん、いったいどうしたの？』
てっきり先に来ていたと思っていたが、そうではなかったらしい。
『健介ちゃんでも、朝寝坊することがあるんだね～』
軽い気持ちで言ったのだが、健介ちゃんには無視されてしまう。質問にも答えてくれないなんて、健介ちゃんはかなり不機嫌のようであった。そのとき、クラスメイトの女生徒たちが囁く会話が聞こえてきた。

「昨日、…プラネットの部室…」
ひそひそと話しているため完全には聞き取れないが、わたしたちなんちゃらプラネットに関係した内容のようである。
「…事故…、…野乃原さんが…」
女生徒たちは、哀しそうな表情で、わたしの机に視線を向けた。すると、突然健介ちゃんが顔を上げて、話していた女生徒を睨みつける。女生徒たちは、ばつが悪そうにして、自分の席へと戻っていった。
「くそっ！　どうして、真菜が…」
健介ちゃんは、泣きそうな顔をして、再びうつ伏せてしまう。何かがおかしい…。得体の知れない不安が、わたしに圧しかかってくる。健介ちゃんの様子が変なのは、昨日の出来事が関係しているのかもしれない。
わたしは、事実を確認するため、北校舎にある部室へと向かった。

北校舎に入ってみると、明らかに普通の様子ではなかった。いつもは、わたしたち以外の人がいること自体珍しいのに、今日に限って大勢押し寄せている。みんな、地下へと下りる階段の方を眺めて、なにやらひそひそと話していた。
わたしは、人集りを抜けるようにして、中央階段にたどり着く。地下への階段にはロープのようなものが張られており、通行が禁止されているようであった。
『な、なにがどうなって…』
わたしは、頭が真っ白となり、その場に立ち尽くしてしまう。そのとき、近くに瑞希がいることに気づいた。わたしは、何があったのかを聞こうと、瑞希に近づく。だが、瑞希の様子を見て、おもわず息を呑んでしまった。
『み…ずき？』
瑞希は、真っ青な顔で、友達の女生徒にしがみ付いている。ガタガタと身体を震わせながら、今にも崩れ落ちそうなのだ。

『ちょっと、瑞希！』
慌てて声をかけるが瑞希からの返事は戻ってこない。すると、瑞希の瞳から、大量の涙が溢れ出した。
「うっ…、ううっ…。マナ…せんぱーーーぃ！」
瑞希は、大きな声を上げて、泣き始めてしまう。
『……、えっ？』
わたしは、後頭部を鈍器で殴られたような衝撃を覚えた。
瑞希は、何をそんなに哀しんでいるのだろう。それに、瑞希にはわたしの声が聞こえていない…。いや、姿すら見えていないようである。おそらく、健介ちゃんにも、わたしの姿が見えていなかったのだろう。そう考えると、教室での態度も納得ができた。
しかし、本当にそんなことがあるのだろうか。まるで、この世界からわたしの存在が消えてしまったように思えてしまう。悪夢なら、早く覚めて欲しいものであった。
目を覚ますと、起こしに来てくれた健介ちゃんがいて、文句を言いながら…いつものように苦笑して…。
『わたし…。いつ、家に帰ったんだろう…』
そんな疑問が頭に浮かび、わたしはゾッと身震いをした。
昨日、部室へプラネットメーカーの様子を見に行って、ブラックホールとおもわれる現象に遭遇する。システムの異常から、リセットボタンを押すことになってしまう。気づけば今朝になっており、わたしは制服のまま寝ていた。
どうやら、リセットボタンを押してからの記憶が、すっぽりと抜け落ちてしまっているようである。わたしは、ふらふらと階段へ近づき、通行禁止のロープを跨ぐ。そして、地下への階段を下り、部室へ向かうことにした。
部室へ行くまでに、たくさんの人とすれ違った。白衣を纏った人や、警察官とおもわれる人である。やはり、他の人にはわたしの姿が見えないようで、誰にも注意されることはなかった。

部室の扉は開かれており、中では白衣の人や警察官が何かを調べているようである。
覚悟を決めたわたしは、ゆっくりと部室の中に入る。部室内の光景を見たとき、わたしの震えは止まらなくなってしまった。
プラネットメーカーを中心に、装置や備品類が外向きに倒れている。何かが爆発して、その爆風に吹き飛ばされたような状態だったのだ。
この状況から判断すると、昨日の出来事は、夢ではなかったようである。プラネットメーカーが暴走して、緊急リセットを押したことで大爆発を起こす。その爆発に、わたしは巻き込まれてしまったのだろう。そして、その事故が原因で、わたしの姿は見えなくなってしまった。そこから考えられることは、たった一つしかない。
『わたし…、死んじゃったの？』
考えたくはない内容に、わたしの身体が震え出す。昨日の事故で死んでしまい、幽霊になってしまったとしか思えなかったからだ。
もちろん、わたしの疑問に答えをくれる人はいない。わたしの姿は…、いや、声すら誰にも聞こえないのだから。
わたしは、どうすればいいのかわからず、途方に暮れてしまう。このまま何もせずに、ただ成仏するのを待つだけなのだろうか…。
そのとき、わたしは床に落ちているある物に気づいた。それは、学園から支給されている、わたしの携帯端末であった。わたしは、携帯端末を拾い上げて、壊れていないか確認する。ちゃんと電源も入るし、パーソナルカードの情報も失われていなかった。
『よかった～。神倉先輩のメール、ちゃんと残ってるよ～』
わたしは、昨日保存した神倉先輩のメールが消えていなかったことにホッとする。
『…って、あ…れ？』
わたしは、自分の行動に違和感を覚え、おもわず間抜けな声を上げてしまった。
『なぜ…、手に持てるの？』

その違和感が携帯端末であると気づくのに、数分を必要とした。わたしは、手にした携帯端末を、ジッと見つめる。

事故で死んでしまったのであれば、ここにいるわたしは、間違いなく幽霊である。幽霊とは、こうも簡単に物が持てるものなのだろうか…。

さらに、わたしの姿が見えないのであれば、他の人には携帯端末が宙に浮いているように見えるはずである。しかし、携帯端末を目の前で揺らしてみても、まったく驚いた様子はない。わたしが触ったことで、携帯端末の存在が消えてしまったかのようだった。

『う～ん…』

わたしは、さらに混乱してしまう。

よくよく考えてみれば、家の鍵をちゃんとかけることができたし、校舎に上がるときにも靴を履き替えている。どうやら、幽霊のように実体が無いわけではなさそうである。それなら、なぜ他の人にわたしの姿が見えないのだろう…。そんなことを考えていると、ホームルームを知らせるチャイムが聞こえてきた。

急いで教室に戻ろうとしたが、こんな状態で授業を受けても意味がないことに気づく。わたしは、教室には戻らず、そのまま北校舎の屋上へと向かうことにした。

第二話　プラネットメーカーの開発者（前書き）

２００４／０６／２９～２００４／１０／２８　連載作品

第二話　プラネットメーカーの開発者

屋上に出たわたしは、ベンチに座って空を見上げる。昨日と同じような真夏日だというのに、どういうわけか暑いと感じることはなかった。

わたしは、携帯端末を操作して、ニュース速報を受信してみる。事故の記事を検索しようとしたのだが、その必要はまったくなかった。

『プラネットメーカーの暴走…。女子高校生が爆発に巻き込まれて、意識不明の重体…』

わたしは、最前列にあった記事を選択し、記事内容を表示させてみる。

記事によると、プラネットメーカーが謎の大爆発を起こし、部活に出ていた女子高校生が巻き込まれてしまったという。名前は伏せられていたが、重体の女子高校生とは、間違いなくわたしのことだろう。

本当のわたしは、病院で入院しているらしい。意識不明の状態ではあるが、わたしはまだ生きているという。なら、いまのわたしは、生霊とでもいうのだろうか…。

何にしても、最悪の事態は免れているようで、わたしはほっと息をつくのだった。

わたしが屋上で佇んでいたころ、なんちゃらプラネットの部室に、やたら違和感のある人物が現れていた。白衣を纏ったわたしと同年代ほどの女の子で、顔の半分が隠れるほど大きなぐりぐりメガネをしている。少女が現れると、なぜか調査をしていた研究者たちの緊張が高まった。

「異常のあったシステムは、これ？」

少女は、爆発を起こしたプラネットメーカーを見上げる。すると、

一人の研究者が調査結果を報告した。
「システムリセットがされてるから、何があったのかわからないわけね～…」
少女は、メインコンソールのパネルに指を走らせる。パネルを軽やかに操作すると、意味不明な記号が羅列したモニターが浮かび上がった。その記号とは、どうやら異世界の言葉で書かれたシステムログのようである。
システムログは、もの凄い勢いで上へと流れていく。少女は、それをジッと見つめながら、しきりに頷きを繰り返していた。
「如月さん…。なにか、わかりましたか？」
研究者は、恐る恐る少女に声をかける。如月と呼ばれた少女は、唸り声を上げながら頭をかく。
「う～ん…。重力値が異様に高くなってるけど、何が起こったかまではわからないかな～…」
少女は、そっとグリグリメガネを外す。あらわとなったのは、信じられないほど可愛い少女の素顔だった。
「まぁ、このシステムを造った当人としては、事故の原因を意地でも見つけてみせるけどね～」
少女がにっこり微笑むと、途端に研究者たちの顔も緩んでしまう。
彼女の名前は、如月優子…。後に知ることとなるのだが、いまから二十年ほど前、プラネットメーカーを世に送り出した人物であるという。

学園内にチャイムが響き、一時間目の授業が始まった。といっても、予定されていた授業が行われるわけではない。昨日の事故について、学園長による説明がされたのだ。
わたしは、学園長の映像を、携帯端末で受信する。その説明によると、事故調査のため、プラネットメーカーを研究している研究員や、システム開発者が来ているという。おそらく、部室で見かけた白衣の人たちがそうだったのだろう。

学園長は、一人の女子生徒が意識不明の重体で入院していることを告げる。そして、事故原因がはっきりしてプラネットメーカーに何の異常も無いと判るまで、なんちゃらプラネットの活動が禁止されてしまった。

『そ、そんな！』

わたしは、自分のことより、部活が禁止されたことにショックを受ける。

プラネットコンテストの出場を目指しているなら、この時期の活動停止は致命的といえた。

もちろん、わたしが原因で事故が起こったわけではない。わたしがあの場にいなくても、ブラックホールは発生して、事故が起こったはずである。しかし、ただの事故と人身事故では、周りに及ぼす影響力が桁違いであるようだ。

『う～ん…、なんとかしないと…』

わたしは、両腕を組んで唸り声を上げる。そうは言っても、中途半端な幽霊状態では、どうすることもできないかもしれない。そんなことを考えながら何気なく地上を見てみると、通路を渡って北校舎にやってくる人影が目に入った。わたしは、屋上の金網にしがみ付き、その人影をジッと凝視する。

『神倉…先輩？』

それは、なんちゃらプラネットの部長、神倉昴先輩であった。すぐ隣には、神倉先輩の幼馴染みで副部長でもある、夏樹若葉先輩もいた。

授業中だというのに、いったいどうしたというのだろう。二人は、そのまま北校舎の中へ入ってしまった。わたしは、急いで二人の後を追うことにする。もしかすると、事故を調査している開発者に、呼び出されたかもしれないと思ったからだ。

わたしの予想通り、神倉先輩たちは、なんちゃらプラネットの部室へとやって来ていた。

部室に着くと、神倉先輩たちはその光景に愕然としてしまう。事故以来、立入禁止となっていたため、部室に入ったのもこれが始めてだったのだろう。
「真菜…ちゃん…」
若葉先輩は、おもわず涙ぐんでしまう。あまりにも酷い爆発の痕に、巻き込まれたわたしのことを心配してくれているようだ。
よろける若葉先輩を、神倉先輩が優しく支える。普段ではあまり見られない二人の様子に、わたしの胸はチクリと痛むのだった。
「あなたたちがこのクラブの生徒代表ね…」
そこに、わたしたちと同い年ほどの少女が現れる。
「はじめまして…。わたしがプラネットメーカーを開発した如月優子です♪」
優子さんは、にっこりと微笑んで、神倉先輩に握手を求めた。
「如月…、優子さん？」
神倉先輩は、小首を傾げながら握手を返す。それもそのはず。彼女は、いまから二十年ほど前に活躍していたアイドルグループ、ＳＰＩＮＥＬの優子とそっくりな顔をしていたからだ。
もちろん、二十年前のアイドルがそのままの姿で存在するはずもない。おそらく、ＳＰＩＮＥＬのファンだった親が、彼女と同じ名前を付けたのだろう。それにしても、本当に瓜二つであった。
「さっそくだけど…」
優子さんは、倒れていた椅子を起こして腰をかける。
「昨日、爆発が起こる直前に、巻き込まれた子から通信があったんだよね…」
優子さんは、まるで尋問をしているように問いかけた。
それを聞いた若葉先輩は、驚いたように神倉先輩を見つめる。わたしは、いまにも火が出てしまいそうなほど、顔が真っ赤になってしまった。
神倉先輩は、ゆっくりと頷いて、携帯端末を机に置く。
「昨日は部活を休みにしたんですが、なぜか野乃原さんは部室にい

たみたいで…」
そう言って、神倉先輩は通信履歴を再生した。
優子さんは、昨日の通信を食入るように見つめている。他の人に通信を見られるのは、とても恥かしいものである。しかも、その通信でのわたしは、もの凄く舞い上がっていた。わたしは、両手で頭を抱えるように悶えてしまった。
「なるほど…。プラネットメーカーに変化が現れて連絡をしてきた…。で～、異常に気づいて、何かをしようとしたわけね～…」
驚いたことに優子さんは、わたしの言葉と聞こえてくる周りの音だけで状況を判断する。そして、唸りながら、こちらの方をジッと見つめた。
『えっ？』
わたしは、優子さんの視線に焦ってしまう。いまのわたしは、似非幽霊状態で、他の人たちには姿すら見えないはずである。現に神倉先輩たちは、優子さんがどこを見ているのかを確認して、不思議そうにしていた。
「神倉くんに夏樹さん…だったわね。ありがとう。もう授業に戻っても構わないから♪」
優子さんは、神倉先輩に視線を戻して、にっこりと微笑む。
「あ、そうだ。さっきの通信履歴だけは、こちらで回収させてもらいますね…」
優子さんは、小型の端末から細いコードを伸ばし、神倉先輩の携帯端末に接続する。素早くパネルを操作して、昨日の通信だけを自分の端末に移動させた。
「はい♪」
優子さんは、携帯端末を神倉先輩に手渡す。受取った神倉先輩は、やや複雑な表情をして、優子さんにある質問をした。
「あの…。プラネットメーカーの爆発は、ボクたちの設定に問題があったのでしょうか？」
神倉先輩は、そんなことを呟く。一部のニュースでは、わたした

ちが無茶な設定をしたため、今回の事故が起こったと伝えられていたからだ。
「まぁ、わたしはそれを調べるために来てるんだけど…」
優子さんは、心配そうにしてる神倉先輩をチラリと見る。
「仮にそうだったとしても、それはあなたたちの所為じゃないわ♪」
プラネットメーカーが発売されて約二十年間、システムが不具合を起こしたという報告は一切されていない。プラネットメーカーとは、それほどまでに完成されたシステムであり、ユーザーが無茶な設定をした程度では、不具合など起こるはずもなかった。
このような事故が起こるなど、まさに天文学的確率といえる。そのため、システム開発者である優子さんが直々に調査に来たのだろう。
あまり納得した様子もないまま、神倉先輩たちは部室を出ようとする。わたしがその後をついて行こうとすると、誰かに襟元を掴まれて、仰け反るような体勢となってしまった。
驚いて振り向くと、優子さんがわたしの襟元をしっかりと握っている。
「あなたは残ってね♪」
優子さんは、見えないはずのわたしに向かって、にっこりと微笑む。神倉先輩たちは、自分たちに声をかけられたと思い、困ったような顔をして振り返った。
「あ～ぁ、あなたたちはいいのよ♪」
わたしの姿が見えない神倉先輩たちには、優子さんの行動がとても奇妙に映ったようである。神倉先輩たちは、頻りに小首を傾げながら、部室を後にするのだった。

「それで…、あなたが野乃原真菜さんね♪」
優子さんは、それが当然であるかのように声をかけてきた。突然、ひとりごとを始めた優子さんに、他の研究者たちは怪訝な顔をする。

「あぁ～、気にしないで調査を続けてね～…」
優子さんは、苦笑気味に呟いて、わたしを引きずるように部室の外へと向かった。
『あ、あの～…』
わたしたちは、誰もいない中庭までやって来る。そこで、いかにも間抜けな質問をしてしまった。
『わたしが見えるんですか？』
これまでの態度からすると、見えているに決まっている。しかし、どうしても聞かずにはいられなかった。
「変なことには慣れてる…っていうか、いまやわたしの存在も超常現象…？」
優子さんは、意味不明なことを呟いて、なぜか項垂れてしまった。
「ねぇ…。わたしって何歳ぐらいに見える？」
優子さんは、おかしな質問をしてくる。わたしが同い年ぐらいだと答えると、優子さんはさらに泣きそうな顔となった。
「今年、三十八歳になります…」
最初は何かの冗談かと思っていたが、パーソナルカードの生年月日データを見て、おもわずぶっ飛んでしまった。優子さんの説明通り、生まれた年は、いまから約三十八年前を証明している。信じられないことではあるが、優子さんは普通の人間ではないらしい。
『だから、幽霊になったわたしを、見ることができるんですね…』
わたしは、優子さんにそのような霊能力があるのかと思っていた。しかし、どうやらそうではないようである。
「あなた…、幽霊じゃないわよ…」
優子さんは、わたしの考えをずばり否定した。
「いまのあなたは、幽体でも霊体でもない…」
なぜか、優子さんは困った顔をする。
「なんていうか～…。あなたの魂は…、この次元に存在してないのよ～」
うまく説明できないのか、優子さんは奇妙な手振りを加えた。

『……。…はぁ？』
もちろん、わたしに理解できるはずもない。魂がこの次元に存在していないとは、いったいどういうことなのだろう。
「つまり～…。爆発があったときに何らかの力が働いて、肉体を離れた魂だけが、こことは少しだけ違う世界に飛ばされちゃったのよ」
優子さんの説明では、わたしの肉体と魂の間に、時空のズレのようなものが生じているらしい。そのズレを修復しない限り、わたしの肉体と魂は重なることがなく、一生このままの状態であるという。
『でも、わたしはここに存在してるし…。物だってちゃんと持つことができるんですよ！』
わたしは、自分の携帯端末を取り出す。他の人には見えなくなってしまったが、しっかりと手に持つことができるのだ。
「う～ん…、ごめんなさいね～。わたしもそっちの専門家じゃないから、よくわかんないのよ…」
優子さんは、困った顔で苦笑してしまう。
「お兄ちゃんが生きていたら、もっと詳しく話が聞けたはずなんだけど…」
途端に、優子さんが寂しそうな顔をする。そんな様子を見たわたしは、それ以上、何も聞くことができなくなってしまった。

なんにしても、わたしがこうなった原因を調べるためには、プラネットメーカーの異常を解明する必要があるようだ。わたしは、優子さんに事故の詳細を説明した。
ブラックホールと思われる謎の球体や、暴走を止めようとリセットボタンを押したこと…。優子さんは、わたしの話しを黙って聞いてくれていた。
『それで、気がつけば自分の部屋で寝ていたんです…』
よく考えてみれば、それもおかしな話しである。魂の状態で家に帰ったとしても、それまでの記憶がまったく無いのだから。
「事故による記憶の混乱は、よくあることだし…」

優子さんは、そのことにあまり関心がなさそうである。
「そんなことより～…。あなた、あの神倉くんって男の子、好きなんでしょ～♪」
最初、優子さんが何を言っているのかわからなかった。それを理解したとき、まるで漫画のように、顔から火が出てしまった。
「でも、神倉くんって鈍そうだから、もっと積極的に自分の気持ちを伝えないとダメだよ♪」
わたしがあたふたしている間も、優子さんの恋愛話は続いていた。
『ちょっ！　ななな、なんでそんな話になるんですかーーー！』
涙目で抗議すると、優子さんはにんまりと微笑む。わたしは、恥ずかしくなって、おもわず顔を伏せてしまった。
「あ…。まずは元の姿に戻らないと、告白もできないか～」
優子さんは、からかうように呟く。神倉先輩に告白をするなんて、考えただけでも胸が張り裂けてしまいそうだ。
「それに…。本当にあなたのことを想ってくれている人は、もっと身近にいるかもしれないしね♪」
そう言って、優子さんは、ベンチに置いてあったわたしの携帯端末を手にする。携帯端末には、メールの着信を知らせるアイコンが点滅していた。
いつのまに休憩時間となっていたのだろう。どうやら、時空のズレがあっても、メールは受信できるようであった。
『健介ちゃんからだ…』
わたしは、メールの差出人を確認して、驚きの声を上げてしまう。健介ちゃんからメールをもらうなんて、初めてのことであった。
『わざわざメールをくれなくても、通信してくれれば…』
そこまで口にして、わたしは自分がどんな状態なのかを思い出す。通信しようにも、わたしは意識不明の重体で、入院していることになっているからだ。
健介ちゃんは、いったいどんな想いで、このメールを送ってきたのか…。わたしは、モニターのアイコンに触れ、メールを再生させ

てみた。
　それは、十秒ほどの映像メールであった。モニターに映った健介ちゃんは、とても哀しそうな顔をしている。何をするでもなく、ただ視線を泳がせるようにしていた。そして、一言も喋ることなく、映像メールの再生は終了してしまう。わたしは、意味もわからず、小首を傾げてしまった。
「なるほどね～♪」
　映像メールを覗き込んでいた優子さんは、どういうわけか嬉しそうに微笑んでいる。
「この健介ちゃんとは、どういったご関係～？」
　わたしが健介ちゃんとの関係を説明すると、優子さんは真面目な表情で考え込んでしまう。
「幼馴染み…ねぇ～」
　優子さんは、突然、わたしから携帯端末を奪い取る。
「え～…。大事な話があります。急いで北校舎の屋上まで来てください…っと♪」
　目にも留まらぬスピードで文字入力を始め、なんの躊躇いもなく健介ちゃんへの送信ボタンを押してしまった。
『あの～…、優子さん？』
　あまりのことに呆然としていると、優子さんはわたしの手を取ってにっこりと微笑む。
「さぁ～て、屋上に行きましょうか～♪」
　優子さんは、わたしの意思を確認することもなく、問答無用に歩き始めるのだった。

　わたしは、優子さんに連れられて、再び北校舎の屋上へとやって来た。もちろん、わたしたち以外には、誰の姿も見当たらない。
　優子さんは、無言で校舎の端へと向かい、金網越しから街並みを眺めた。懐かしそうに…、そして、とても淋しそうにしている。そんな様子に、わたしは声をかけるのを躊躇ってしまった。

「意外に、早かったわね…」
そう呟いて、優子さんは振り返る。
鉄製の扉が大きく開き、息を切らせた健介ちゃんが現れた。健介ちゃんは、辺りを見回して、誰かを捜しはじめる。
「真菜！」
健介ちゃんは、わたしの名前を叫びながら屋上へと入ってくる。しかし、優子さんしかいないことがわかると、奥歯を噛み締めるような表情で、つかつかとこちらに向かってきた。
「あなたが健介ちゃんね～♪」
優子さんは、怒りの視線を軽やかに交わしながら、わたしの携帯端末を左右に振った。その瞬間、健介ちゃんの瞳がひときわ大きく開かれる。
『あ、あのね、健介ちゃん…』
慌てて理由を説明しようとしたのだが、やはりわたしの声は健介ちゃんに聞こえていないようである。
「てめぇ～…、いったいどういうつもりだ…」
突然、健介ちゃんは、優子さんの胸倉を掴む。完全にからかわれたと思ったのか、健介ちゃんは、いまにも殴りかかりそうな勢いであった。
「てめぇが真菜の携帯使って、メールを送ってきたのか！」
こんなに怒っている健介ちゃんは、これまで見たことがない。健介ちゃんは、優子さんを金網に押し付け、拳を大きく振り上げた。
『健介ちゃん！　やめてーーー！』
悲しいことに、わたしの叫びが健介ちゃんに届くことはない。健介ちゃんの拳が優子さんの顔に迫る。その衝撃的な光景は、スローモーションのように流れた。
だが、拳が顔に当たろうとした瞬間、優子さんの身体は陽炎のように消えてしまう。
呆然と立ち尽くすわたしと健介ちゃん…。
「やれやれ、いきなり殴りかかってくるなんて…」

どこからか、優子さんの呆れた声が聞こえてくる。
「ちっ！　どこに隠れやがった！」
優子さんの声を聞いた健介ちゃんは、辺りを見回して怒鳴り声を上げた。しかし、優子さんの姿は、どこにも見当たらない。
そのとき、わたしは地面に映る影の存在に気づく。どうやら健介ちゃんも気づいたようで、わたしたちは同時に空を見上げた。
「やっほ～♪」
屋上から十メートルほど離れた空…。優子さんは、そんな空中に浮かんでいた。しかも、優子さんの背中からは、鳥のような一対の翼が伸びている。純白の翼を持つその姿は、まるで、古い宗教画などに描かれている天使のようであった。

『て…、天使？』
唖然としているわたしたちの前に、天使の姿をした優子さんが舞い降りる。
「健介ちゃん。暴力はダメだよ♪」
優子さんは、顔を引きつらせている健介ちゃんに苦笑しながら、そう呟いた。
「いまから、野乃原真菜さんがどうなっているか、ちゃんと説明するから…」
それを聞いた健介ちゃんの顔色が急変する。
「なっ！　真菜がどうしたって！」
健介ちゃんは、翼の消えた優子さんに詰め寄った。優子さんは、そんな健介ちゃんを落ち着かせるように、にっこりと微笑む。そして、自分がプラネットメーカーの開発者であること、わたしが魂だけの状態で別の次元に飛ばされてしまったことを伝えた。
「信じられないかもしれないけど、真菜さんはいまもここにいるの…」
疑いの眼差しで見つめられ、優子さんは苦笑気味に頭をかく。

『あの～…。それを信じろっていう方が難しいのでは？』
わたしの姿は、健介ちゃんに見えていないはずである。もし、健介ちゃんと逆の立場だったら、わたしも信じることができなかっただろう。
「そうね～…。真菜ちゃん、あなたと健介ちゃんだけしか知らない、二人の秘密ってないの？」
優子さんは、困ったように問いかけてくる。わたしが過去の記憶を思い出そうとしていると、突然、健介ちゃんが怒り声を上げた。
「騙されないぞ！　そんなことを言って、事故の責任逃れをするつもりだろっ！」
健介ちゃんは、優子さんを指差して、吐き捨てるように叫んだ。すると、健介ちゃんの態度にカチンときた優子さんは、額に怒りマークを浮かべて不気味な笑みを浮かべる。何もない空間から、宝石のような美しい剣を取り出し、健介ちゃんの鼻先に突きつけた。
「あなたが死んで幽霊にでもなれば、わたしの言っていることが本当だって信じてもらえるかしら。それに、真菜ちゃんの姿も、はっきり見えるようになるかもしれないわね…」
優子さんの迫力に、健介ちゃんは真っ青となる。そのことに満足したのか、優子さんは剣を収め、にっこりと微笑んだ。
「とはいっても…、証拠がないと信じられないでしょうから…」
優子さんは、手に持っていた携帯端末を、こちらに投げてくる。
「別次元でもメールが届いたわけだから、通話もできるんじゃない？」
そういって、健介ちゃんと通信するように指示を出してきた。
『なるほど…』
わたしは、携帯端末のアドレス帳から健介ちゃんを呼び出してみる。しかし、携帯端末は、何の反応もしない。
『あ…。授業中だから、個人回線は使えないんだ』
いつのまにか、二時間目の授業がはじまっている。学園の備品で

ある携帯端末では、個人目的での通信が遮断されてしまうのだ。
「それじゃあね～」
優子さんは、懐のポケットをゴソゴソとしながら、二枚のカードを取り出す。
「これを使ってみて♪」
そのカードを、わたしと健介ちゃんに、それぞれ手渡してくれた。
「うおっ！　これって、もしかして！」
健介ちゃんが驚くのも無理はない。優子さんから渡されたカードは、数年後には実用化されると噂されている、次世代の情報端末であったからだ。
「最初にデータをセーブさせるから、携帯端末の拡張スロットにそのカードを差し込んでみて♪」
優子さんに言われたままカードを差し込むと、わずか数秒でセーブが完了する。
「個人情報もセーブされたから、これからはこのカード端末がパーソナルカードの代わりになるからね♪」
そして、優子さんは、簡単な操作説明をしてくれた。
わたしは、親指と人差し指の側面で、カードを挟み込むように持つ。すると、空中に半透明なモニターが浮かび上がった。だが、操作系のパネルは一切現れない。何をしたいかという意思を、親指で触れている端子が読み取る仕組みになっているようだ。
「慣れるまでは、頭の中で“なになに起動♪”とか、実際に考えるようにしてね」
優子さんは、追加の説明をする。慣れてしまえば、軽く思うだけでそれぞれの操作が出来てしまうらしい。
『え～っと…』
わたしは、苦労しながらアドレス帳を呼び出し、健介ちゃんに通信を試みる。すぐ近くで着信音が響くと、驚いた健介ちゃんが回線を開いた。
『あははっ…。健介ちゃん、おはよ～』

苦笑しながら挨拶をすると、健介ちゃんの瞳から大粒の涙が溢れ出す。
『えっ、ちょっ、健介ちゃん！　なに泣いてるのよ～！』
わたしは、健介ちゃんの涙に、あたふたしてしまう。健介ちゃんが泣いているところなんて、久しぶりに見た気がした。
「ねぇ～♪　真菜ちゃんは、ちゃんとここにいるでしょ～♪」
優子さんは、わたしの背後から、通信の映像に割り込む。わたしと同時に映っている優子さんを見て、健介ちゃんは愕然とする。手元の映像と、優子さんの立っている位置を交互に見て、口をパクパクさせていた。
「真菜…。おまえ、本当にいるのか？」
健介ちゃんは、信じられないといったふうに、目を丸くして驚いている。意識不明の重体で入院しているはずのわたしと会話しているのだから、当然の反応といえるかもしれない。
『うん…。目が覚めたらこんな状態になっていたけど、ちゃんと健介ちゃんの前にいるよ…』
わたしは、モニターに釘付けとなる健介ちゃんの姿を見る。すぐそばにいるのに、カード端末で通信しているなんて、なんだかとても間抜けな感じがするのだった。

「これで、わたしが怪しい電波を受信してないことがわかったわね♪」
優子さんは、にっこりと微笑む。ちなみに、カード型端末も、優子さんが開発しているものらしい。
『電波はいいんですが…、優子さんに生えていた翼の方は…？』
健介ちゃんとのやりとりで有耶無耶になってしまったが、わたしは優子さんに生えていた翼がかなり気になっていた。あのような立派な翼、服の中にも隠しておけないはずである。
「いや～…、その話は置いといて～」
優子さんは、大汗を流しながら、荷物を横にのける動作をする。

普通ではないと判っていたが、まさか天使だとは思わなかった。
「で～、健介ちゃん。真菜ちゃんが元に戻れるまで…、あなたが面倒を見てあげてね♪」
突然、優子さんの口からとんでもない言葉が聞こえてくる。その瞬間、周りの時間が止まったかのように、わたしと健介ちゃんは固まってしまった。
「……、はぁ？」
健介ちゃんが間抜けな声を上げる。
「ま、真菜を…、オレ…が…？」
健介ちゃんは、カクカクした動きで、優子さんを見つめた。
「こういった超常現象には、当事者のことをよく理解している協力者が必要なの。それに、こんな状態で自分の家に戻っても、ご家族が混乱して哀しむだけだから…」
優子さんは、真顔でもっともらしいことを呟く。
「真菜ちゃんも、しばらくは健介ちゃんの部屋で寝泊りしてね♪」
さきほどまでと違い、とても楽しそうにわたしの肩を叩いた。
「ちょっ…、部屋で一緒にーーー！　ままま、真菜はそれでいいのか！」
反応の少ないわたしに向かって、健介ちゃんが大きな声で叫ぶ。
確かに、こんな状態でお母さんに会えるはずもない。無事だと伝えたかったが、それも控えたほうがよさそうである。
『じゃあ、健介ちゃんのところでご厄介になろうかな～…』
わたしが答えると、なぜか健介ちゃんはずっこけてしまう。
『け…、健介ちゃん？』
いったい、どうしたというのだろうか…。健介ちゃんは、顔を真っ赤にさせて、プルプルと震えていた。
「決まりだね♪」
優子さんは、パチンと柏手を打つ。
「そうそう、真菜ちゃんが元の姿に戻るまで、健介ちゃんだけの秘密にしておくこと♪」

どういうわけか、お母さんだけでなく、神倉先輩や瑞希たちにも黙っておくことになった。
「あと～…」
優子さんは、健介ちゃんに近づいて、わたしには聞こえない小さな声で囁く。
「二人っきりになるからって、真菜ちゃんにいたずらしちゃダメだよぉ～♪」
その言葉に、健介ちゃんの頭が爆発した…ように見えた。優子さんは、健介ちゃんの反応を楽しむように、クスクスと笑っていた。
「はぁ～…」
からかわれて疲れたのか、健介ちゃんは大きなため息をつく。
「なんで、こんなことになったんだろう…」
健介ちゃんは、視線を泳がせて、どこか遠い方角を見つめていた。

『あ、優子さん…。学園のプラネットメーカーって、どれぐらいで使えるようになりますか？』
わたしは、なんちゃらプラネットの活動が禁止されてしまったことを思い出す。事故調査が終って安全と確認されないことには、部活を再開することができないからだ。
「あなたたち、プラネットコンテストに出るつもりなの？」
優子さんの問いかけに、わたしたちが頷く。
「でも、今回の事故は、簡単に原因がわかる問題じゃないと思うの…。少なくても、一ヶ月…いえ、二ヶ月はかかるんじゃないかな～」
それは、コンテストを目指すのに、絶望的な期間であった。
『そんな～…』
わたしは、ガックリと項垂れてしまう。状況は、どんどん悪い方へと向かっている気がした。
「まぁ～、プラネットメーカーが使えたって、部活が禁止されてるんじゃな～…」
健介ちゃんの言葉は、わたしをさらに落ち込ませた。

「あら、それなら学園の部活じゃなかったら良いんじゃない？」
突然、優子さんがそんなことを言い出す。
「個人的に集まって、別のプラネットメーカーを使えば、誰にも文句はいえないでしょ」
そう言って、優子さんは、紙の切れ端に何かを書き始める。
「ここにわたしの使っていたプラネットメーカーがあるから、コンテストに出場しようと考えてるなら挑戦してみることね♪」
渡された紙には、ある住所が書かれていた。
「なんだったら、夏休みに集まって合宿みたいなことをしてみる？けっこう大きな家だから、十数人程度なら問題ないと思うよ」
優子さんの提案は、いまのわたしたちにとって、とても魅力的なものだった。神倉先輩たちの都合がつくなら、それも楽しそうである。
この先、どうなるかはわからなかったが、一応お願いしておくことにする。そこで信じられない出会いがあろうとは、このときのわたしは夢にも思わなかった。

第三話　真菜と健介の関係（前書き）

２００４／０６／２９～２００４／１０／２８　連載作品

第三話　真菜と健介の関係

健介ちゃんは授業に戻り、優子さんは再びプラネットメーカーの調査に向かう。わたしは、特にすることもないため、北校舎の屋上でニュース速報をチェックしていた。

絶対安全と思われていたプラネットメーカーが暴走したことは、かなり衝撃的な出来事であった。そのため、テレビのニュース番組でも大きく取り上げられていた。

このままでは、プラネットコンテストも中止されてしまうかもしれない。だが、放課後になる頃には、どういうわけか騒ぎが下火になっていた。

普通なら、学園に報道関係者が押し寄せてきてもおかしくないはずである。しかし、校門前には、テレビ局どころか、事故を調べる記者すら見当たらない。まるで、何らかの圧力によって、報道規制がされてしまったかのようであった。

昨日の事故以降、なんちゃらプラネットの部室は、立入禁止となっている。そのため、なんちゃらプラネットの部員たちは、自然と北校舎の屋上に集まっていた。

高等部二年で部長の神倉昴先輩。同じく二年で副部長の夏樹若葉先輩。高等部一年の遠野健介ちゃん。唯一の中等部、三年の鷲崎瑞希。そして、高等部一年の野乃原真菜…。以上の五名がなんちゃらプラネットの部員であった。

「マナ先輩のお見舞いに行きましょう！」

突然、瑞希が大きな声で叫ぶ。しかし、それを聞いた神倉先輩は、瑞希の意見を制するように呟いた。

「いや…。事故が起きて間もないわけだし、少し期間を置いたほうがいいと思う…」

昨日の今日で病院に行っても、付き添っているであろう家族が迷

惑するだけである。お見舞いに行くのなら日を改めた方がいい…と、優しい神倉先輩は考えているのだろう。
「そうね…。確かに昴の言う通りかもしれないわ…」
若葉先輩は、神倉先輩の意見に同意する。
「いますぐに飛んで行きたい気持ちもわかるけど、落ち着いてからの方がいいかもね…」
若葉先輩は、瑞希をなだめるように微笑んだ。それに、病院には事故を取材する報道関係者が集まっているかもしれない。そんなところに、なんちゃらプラネットの部員が出向いたら、騒ぎが大きくなってしまうだけである。
「そ、そんな…」
瑞希は、否定的な意見に愕然とする。
「健介は…、健介はマナ先輩に会いたいよね！」
みんなの意見を黙って聞いている健介ちゃんに、瑞希は縋るような表情で問いかけた。
「まぁ～…、お見舞いに行ったからって、真菜が治るわけでもないし…」
健介ちゃんは、困ったように頭を掻く。その言葉を聞いた瑞希は、信じられないといった顔で絶句した。事情がわかっている健介ちゃんと違い、何も知らない瑞希にとって、かなりショックな言葉だったのだろう。
「健介！　あんた、それでもマナ先輩の…」
瑞希は、悔しそうに唇を噛み締め、とうとう泣き出してしまう。そんな瑞希を、若葉先輩があやすように抱きしめる。わたしは、そんな光景を、まるで他人事のように眺めていた。
瑞希がわたしのために泣いてくれているのはわかる。でも、こうして自由に動き回れることを考えると、本当のわたしが入院していることの方が信じられなかった。
思い切って、みんなにもわたしの存在を伝えてしまいたい。だが、事情を話したところで、みんなを巻き込んでしまうだけである。こ

こは、黙って成り行きに任せるしかなかった。

「それじゃあ、今度の土曜日に、野乃原さんのお見舞いへ行くことにしようか」

神倉先輩は、瑞希の涙に苦笑しながら、そう切り出した。

「用事のある人もいるだろうけど、なるべくこちらを優先させてほしい」

みんなが頷くのを見て、神倉先輩は満足そうに微笑む。

「じゃあこれからは、何かあればメールで連絡を取り合うことにしよう。部活が禁止されちゃったから、みんなで集まることも少なくなるだろうし…」

神倉先輩の言葉を聞いて、わたしはあることを思い出した。優子さんに提案された、夏合宿のことである。

わたしは、優子さんから渡されたカード端末を取り出す。頭の中で文章を組み立てると、モニターには考えた通りの文字が現れた。

『おぉ～♪』

わたしは、おもわず声を上げてしまう。次世代の情報端末がこれほど便利なものだとは驚きであった。

『っと、いけない…』

カード端末の便利さに感心している場合ではなかった。早くしないと、みんなが帰ってしまうかもしれない。わたしは、出来上がった文字メールを、健介ちゃんのカード端末に送信した。

「…ん？」

着信に気づいた健介ちゃんは、ポケットからカード端末を取り出す。他のみんなに気づかれないように、後ろ向きでメールを確認した。

「…、遠野くん？」

健介ちゃんの奇妙な行動に気づいたのか、若葉先輩が声をかける。

メール内容を確認した健介ちゃんは、大きなため息をついて、わたしの代わりに夏合宿の提案をしてくれた。

「あ～…、先輩…。今年のプラネットコンテストは、もう諦めるんですか？」
健介ちゃんの言葉に、神倉先輩たちは困った表情をする。部活を禁止されているのだから、それは当然の反応だといえた。
「じつは、ある場所のプラネットメーカーを借りることができたんですが…」
それを聞いた瞬間、神倉先輩の顔がパッと明るくなる。しかし、すぐにその感情を押し殺すように、目を伏せてしまった。
「たとえ使えるシステムがあったとしても、活動は自粛しなければならない…」
神倉先輩は、まるで自分に言い聞かせるように呟いた。
「開発の人は、ボクたちに責任は無いって言ってくれてたけど、野乃原さんの事故はなんちゃらプラネットに無関係なことじゃないんだから…」
そう言って、神倉先輩は、健介ちゃんをジッと見つめた。
その真剣な表情に、健介ちゃんは言葉を詰まらせる。意見の食い違いに、なんともいえない気まずい空気が流れた。
「でも…」
そんな沈黙を破ったのは、二人のやりとりを静かに聞いていた瑞希であった。
「コンテストを諦めたって聞いたら、マナ先輩、がっかりするんじゃないかな～」
しっかりとした視線でみんなを見回す瑞希。
「それに、自分が原因でコンテストがダメになったって知ったら、マナ先輩、絶対に悲しむよ！」
瑞希は、大きな声で、神倉先輩に訴えた。
すると、神倉先輩は、両腕を組むように考え込む。そして、意見を求めるように若葉先輩を見つめた。
「確かに、コンテスト出場を一番楽しみにしてたのは、真菜ちゃんだったわね…」

若葉先輩がそんなことを呟く。わたしにしてみれば、惑星を創ろうと一生懸命だった神倉先輩につられて、はしゃいでいただけなのだが…。

「それなら、真菜のためにも諦めちゃダメですよ！」

健介ちゃんは、ここぞとばかりに、神倉先輩を畳み掛けようとする。

「そこには、泊めてもらえる施設もあるらしいんです。だから、夏休みに泊り込んで、コンテストまでに星を創りましょう！」

乗り気ではなかった健介ちゃんも、勢いに任せて、そんなことを提案した。

「野乃原さんのためにか…」

神倉先輩は、再び考え込んでしまう。先輩の気持ちは、かなり揺れ動いているようであった。しばらくすると、神倉先輩がゆっくりと顔を上げる。健介ちゃんたちを見回すようにして、先輩なりの考えを伝えた。

「この問題は、簡単な内容ではない…。結論を出すには、もう少し時間が必要だと思う…」

続いて、神倉先輩の言葉を補うように、若葉先輩が発言する。

「幸い、夏休みまであと一週間もあります。この話は、真菜ちゃんのお見舞いに行ってから、決めることにしましょう♪」

若葉先輩の意見に、神倉先輩は力強く頷くのだった。

夏合宿の話もなんとか纏まり、なんちゃらプラネットの臨時会議はお開きとなる。先輩たちは一足先に帰ってしまい、屋上には健介ちゃんと瑞希だけが残された。

瑞希は、なぜか健介ちゃんを睨みつけている。健介ちゃんは、大きなため息をついて、瑞希と向かい合った。

「…なんだ？　何か言いたいことでもあるのか？」

瑞希が健介ちゃんに突っかかってくるのは、今に始まったことではない。健介ちゃんも、瑞希が自分を嫌っているのだと、なんとな

く気づいているのだろう。健介ちゃんは、威嚇する瑞希を見て、うんざりしたようにため息をついた。
「……」
健介ちゃんの問いかけにも、瑞希はまったく答えようとしない。それどころか、目を吊り上げるように、健介ちゃんを睨みつけていた。
「何もないんなら、帰るからな！」
そんな雰囲気にイラついたのか、健介ちゃんは、吐き捨てるような言葉を残して階段へ向かおうとする。
「あっ、待って！」
驚いたことに、瑞希が慌てて健介ちゃんを呼び止める。その行動が予想外だったのか、健介ちゃんも、目を丸くして振り返った。健介ちゃんにジッと見つめられ、どういうわけか、瑞希は頬を赤くする。
「あの～、その…、え～っと…」
言いにくいことなのか、瑞希は口篭るように下を向く。健介ちゃんが唖然としていると、覚悟を決めた瑞希が顔を上げて大きく叫んだ。
「合宿の話…、ありがとう！」
その途端、瑞希の顔が真っ赤に染まる。そして、逃げるように階段を駆け下りて行ってしまった。
わけもわからず、呆然と立ち尽くしてしまう健介ちゃん…。いままでの瑞希には、あまり見られないような反応であった。

「なぁ、真菜…。本当～に、オレの…部屋で…、その…、泊まる気なのか～？」
モニターに映ったわたしに向かって、健介ちゃんがそんなことを確認する。実際には隣を歩いているわけだが、健介ちゃんにわたしの姿は見えない。そのため、会話するのも端末越しとなっていた。

『うん…。他の人ならともかく、健介ちゃんには気を使わないですみそうだし♪』
わたしがそう答えると、健介ちゃんは複雑そうな表情で項垂れてしまう。健介ちゃんは、なにをそんなに落ち込んでいるのだろうか…。しばらくそんな感じで喋っていたのだが、いつのまにかわたしの家が近づいていたことに気づく。
『あ…、着替えとか持っていきたいから、ちょっと待っててね～♪』
わたしは、健介ちゃんの返事も聞かずに、玄関へと走り出した。健介ちゃんの部屋に泊めてもらうにしても、最低限の準備は必要になるからだ。
扉には、しっかりと鍵がかかっていた。どうやら、お母さんは、まだ病院から帰っていないようである。いや、入院したわたしに付き添っているのだから、今日も戻ってこないかもしれない。わたしは、カード端末で扉を開き、家の中へと入っていった。
自分の部屋で、着替えなどを大きめのショルダーバッグに入れる。そして、何気なく部屋の中を見回してみた。
慣れ親しんだ自分の部屋…。特別な理由があるとはいえ、この部屋から出ていくことになろうとは夢にも思わなかった。
このまま元に戻れず、二度とここには帰って来られないのではないか…。そんな考えが浮かび、身体がガタガタと震えてくる。優子さんが時空のズレを修復する方法を見つけてくれない限り、そうなる可能性も捨てきれなかった。
『ダメダメ！』
わたしは、不安を拭い去るように頭を振る。この先どうなるかはわからないし、いま考えても仕方のないことだ。
『さて…と、健介ちゃんも待っていることだし、急がなくっちゃ…』
わたしは、そっと部屋を出ることにする。家の中の光景を脳裏に焼きつけながら、健介ちゃんが待っている玄関へと向かった。
玄関まで来ると、健介ちゃんが立ち尽くしていた。わたしは、カード端末を取り出し、目の前の健介ちゃんに通信を入れる。モニタ

ーに映る健介ちゃんは、どこか複雑そうな顔をしていた。通信越しでしか会話ができないわたしを、哀れんでいるのかもしれない。わたしは、どう反応していいのかわからず、苦笑するしかなかった。

プラネットメーカーの暴走という信じられない事故が起こったにも関わらず、夜のニュースでは詳細など一切報道されることがなかった。

学園でニュースをチェックしていたときからおかしいと感じていたが、ここまで何もないことを考えると本当に報道規制がかけられているのかもしれない。普通なら、予定されていた番組がキャンセルになって、特別報道番組が放送されていたとしてもおかしくないからだ。

もしかすると、優子さんが何らかの根回しをしてくれているのかもしれない。なんにしても、事故のニュースを見ずに済むのはありがたいことである。悲惨な状況を聞かされたりしていたら、いまごろ気分が滅入ってしまっていたはずだから。

そのとき、部屋の扉が開いて、健介ちゃんが入ってくる。健介ちゃんは、二人分の食事を載せたお盆を持っていた。

「うぅ～…。部屋で二人分食べるって言ったら、変な顔をされた…」

健介ちゃんが言っているのは、おそらく遠野のおばさんと妹の七海ちゃんのことだろう。健介ちゃんは、お盆をテーブルに置き、急いで部屋の鍵を閉めた。

突然部屋で…、しかも二人分を食べるというのだから、怪しまれない方がおかしい。さらに、わたしの姿や声は、普通の人には判別できない。端末越しとはいえ、側からみれば健介ちゃんがひとりで喋っているようにしか思えなかった。

『健介ちゃん、ごめんね～。幽霊でも、おなかが減っちゃうみたいだから…』

わたしは、苦笑しながらお腹をさする。ちなみに、いまは学校支給の携帯端末へ、優子さんから渡されたカード端末を差し込んで通

信していた。これなら、テーブルに置いた状態で会話ができるからだ。
「協力者が必要って意味…、はじめてわかったよ…」
健介ちゃんは、大きなため息をつく。
魂の状態といっても、肉体が無いだけで、普通の人間と変わりないようである。お腹も減るし、おそらくは睡眠も必要となるはずだ。お母さんはしばらく家に戻ってこないだろうし、優子さんの言うように、協力者がいなければ途方に暮れていたことだろう。
『健介ちゃん…。ありがとね…』
わたしは、健介ちゃんをジッと見つめ、あらためて感謝の言葉を伝えた。すると、健介ちゃんは、照れたようにそっぽを向く。
「ま～、なんだ…。冷めないうちに、食っちまおうぜ！」
クッションに腰を下ろした健介ちゃんは、黙々と食べ始める。
わたしは、作ってくれた遠野のおばさんに感謝しながら、美味しそうな夕食をいただくことにした。

夕食後…。わたしたちは、特に何をするわけでもなく、点けっぱなしのテレビを眺めていた。
この時間になると、事故のニュースが放送されることもなくなっていた。これほどまでに無反応だと、昨日の事故自体が夢だったような気さえしてくる。もちろん、自分に起こっている現象を考えると、夢であるはずもないのだが…。
「ん～…、ごほごほっ！」
突然、健介ちゃんが空咳をする。健介ちゃんは、どこか落ち着かない様子で、ソワソワしていた。なんともいえない空気が漂うと、健介ちゃんはゆっくりと立ち上がった。
「あ～…、ちょっとトイレ！」
健介ちゃんは、そう言い残して、部屋を出て行ってしまう。この一時間で、いったい何回トイレに行くのだろう…。
『あ…、そうだ♪』

わたしは、ショルダーバッグを開けて、替えの下着やバスタオルを取り出す。そして、健介ちゃん宛ての映像メールを録画した。
『先にお風呂を使わせてもらうからね♪』
映像メールが送信されたのを確認して、わたしはお風呂場へと向かうことにした。
健介ちゃん家のお風呂は、階段を降りた一階の奥にある。わたしは、誰も入っていないことを確認し、脱衣場で服を脱ぎ、急いで浴室へと入った。
シャワーで汗を流し、少し熱めの湯船に浸かる。
『う～～～ん♪』
湯船で手足を伸ばすと、心地良い温かさが全身に伝わった。これで、魂だけの存在だというのだから信じられないものがある。そんなことを考えていると、脱衣場に誰かが入ってきたのを感じた。
『まずっ！』
わたしは、顎までお湯に浸かり込む。当然、そんなことをしても姿が隠せるはずもない。焦りながら曇りガラスに視線を向けると、何者かは鼻歌交じりに服を脱いでいるところだった。
「おっふろ～♪」
扉を開けて入ってきたのは、わたしより二歳年下で健介ちゃんの妹、遠野七海ちゃんであった。七海ちゃんは、イスに腰を下ろして、やはり鼻歌交じりにシャワーを浴びはじめる。どうやら、完全にわたしの存在には、気づいていないようであった。
しばらくすると、シャワーを浴び終えた七海ちゃんが、こちらに近づいてくる。
一瞬、わたしの浸かっている箇所のお湯が、消えて見えないのではないかと焦ってしまう。しかし、七海ちゃんは、何事もないように湯船に入ってこようとした。おそらく、時空が微妙にズレているため、七海ちゃんのいる空間では、わたしが浸かっている場所にもお湯があるのだろう。
七海ちゃんに存在を覚られずわたしがホッとしていると、再び脱

衣場に何者かの気配を感じた。気配の主は、勢いよく浴室の扉を開けて、慌てた様子で大きく叫んだ。
「てめぇ！　風呂に入るって、いったい何を考えて！」
それは、メッセージを見てすっ飛んできた、健介ちゃんであった。
『あ…』
わたしがお風呂に入っているとわかっていて飛び込んできたのだ。健介ちゃんも、かなり焦っていたようである。
だが、魂だけの状態で別次元に飛ばされたわたしの姿は、健介ちゃんに見ることはできない。健介ちゃんの瞳には、湯船に入ろうとしている七海ちゃんの姿だけが映っていたことだろう。
可哀想に、七海ちゃんは、わけもわからず固まっている。いち早く状況を把握した健介ちゃんは、急いで浴室の扉を閉めた。その瞬間、七海ちゃんの悲鳴が辺りに響き渡る。
「いゃあああーーーー！　おにぃ～ちゃんのスケベ！　変態ーーー！」
七海ちゃんは、涙目になりながら叫び声を上げる。今回の一件で、健介ちゃんには、妹のお風呂を覗いたという不名誉なレッテルが貼られてしまった。
『健介ちゃん…、ごめんね～』
わたしは、苦笑気味に呟く。この後、健介ちゃんは、しばらく七海ちゃんに口を利いてもらえなくなってしまうのだった。

土曜日の午後、なんちゃらプラネットの部員たちは、駅前の公園に集まっていた。プラネットメーカーの暴走に巻き込まれて入院している野乃原真菜…、つまり、わたしのお見舞いに行くためである。
わたしは、いまだ昏睡状態にあり、その原因すら判明していないという。それもそのはず。わたしは、魂だけの状態で別次元へと飛ばされてしまい、肉体に戻ることができなくなってしまっていたからだ。

「そろそろ行こうか…」
全員が揃っているのを確認して、神倉先輩が号令をかける。姿の見えないわたしがすぐ近くにいるなど、神倉先輩たちは夢にも思わないだろう。
『それにしても…』
わたしは、複雑な心境となって項垂れてしまう。自分自身のお見舞いに向かうなど、かなり間抜けな気がしたのだ。
事情を知っている健介ちゃんは、一緒に行かないほうがいいと言ってくれていた。でも、自分の状態を把握しておくことは、これからどうするかを決めるためにも必要となってくるだろう。
そう…。いつまでも、このままでいるわけには、いかないのだから…。

わたしが入院しているという病院は、駅から歩いて二十分ほどのところにある。
特殊な事故に巻き込まれてしまったわけだから、専用の治療機関かと思っていたが、どうやら普通の総合病院に入院しているようだった。
病院近くまでやってくると、突然、神倉先輩が隠れるように指示を出す。建物の陰から病院を覗くようにして、玄関前にマスコミがいないことを確認した。
「よし…。大丈夫みたいだ…」
神倉先輩は、安心したように呟く。事故から日にちは経っていたが、余計なトラブルで騒がれるのは避けたほうがいいだろう。わたしたちは、安全を確認してから、神倉先輩を先頭に病院へと入っていった。
病院の受付で病室を聞き、設置されている端末にパーソナルカードを通して面会の手続きをする。普段はあまり感じることのない病院内の雰囲気を味わいながら、なんちゃらプラネットの部員たちはわたしが入院している病室へと向かった。

「野乃原真菜…。ここだな…」
神倉先輩は、壁のプレートを見て病室を確認する。さすがに団体部屋ではなく、個室に入院しているようであった。
「失礼します…」
神倉先輩がドアをノックして病室に入っていく。わたしたちは、その後に続いた。
通路を奥へと進んで行くと、かなり広い部屋に出た。その中央にベッドが置かれており、一人の少女が寝かされている。ベッドの周りには、様々な機械が並べられており、それらから伸びたいくつもの紐が少女と繋がっていた。おそらく、少女の容態をモニターしている装置なのだろう。
「あ…、健介くん…」
呆然と立ち尽くすわたしたちに気づいたのか、ベッドの近くに座っていた女性が声をかけてくる。
「お見舞いに来てくれたのね…」
それは、看病疲れで少しやつれたお母さんであった。お母さんは、ゆっくりと立ち上がり、わたしたちに近づいてくる。
「おばさん…」
顔色の悪いお母さんを見て、健介ちゃんが心配そうに呟く。その瞬間、お母さんの手刀が健介ちゃんの額にヒットした。
「だぁあああ！」
健介ちゃんは、両手で額を押えながら、しゃがみ込んでしまう。
「麻衣さんでしょ…、健介くん♪」
お母さんは、健介ちゃんを窘めるように微笑む。その行動に、神倉先輩たちは唖然としていた。
『ちょっとお母さん！』
わたしは、恥かしさのあまり、大きく叫んでしまう。もちろん、その声がお母さんに届くことはなかった。
「さぁ、みんなも入ってくださいね」
お母さんは、先輩たちを招き入れる。病室の奥には、付き添いが

休めるベッドもあり、訪れた人がくつろげるようにソファーも置かれていた。
「え～っと、みんなは、真菜と同じクラブの人かしら？」
それを聞いた神倉先輩たちは、慌てて自己紹介をはじめる。お母さんは、神倉先輩の名前を聞いて、意味ありげに微笑むのだった。
「それで…、真菜ちゃんの容態は…？」
若葉先輩は、遠慮気味に問いかける。すると、お母さんが困ったように顔を横に振った。
いろんな検査を行ったが、何の反応も見られなかったという。
「すみません…。ボクたちの所為で…」
謝罪しようとする神倉先輩だったが、その言葉は、お母さんの笑顔によって遮られた。
「なにもあなたたちの所為じゃないでしょ。ただ、真菜の運が悪かっただけで…」
お母さんは、優しく微笑みながら、とんでもないことを呟く。
「あなたたちが無事で、本当に良かったじゃない♪」
あの日、部活が休みになっていなければ、ここにいた全員が事故に巻き込まれていたかもしれない。それを考えると、お母さんが言うように、わたしに運が無かっただけかもしれなかった。
それにしても、実の娘が大変な状態だというのに、もう少し気の利いた言い方があるのではないだろうか…。わたしは、項垂れるようにして、大きなため息をついた。

神倉先輩たちとお母さんが喋っているとき、わたしはそっとベッドに近づいてみる。そして、ベッドを覗き込んで、おもわず息を呑んでしまった。そこに寝ていたのは、まぎれもなくわたし自身であったからだ。
目立った外傷は見られないものの、肌の色が青白く、とても生きているようには思えない。モニターされている心電図の音だけが、辛うじて生きていることを証明しているようであった。

これまでは、どこか夢の中の出来事のように感じていた。しかし、目の前で寝ている自分を見つめているうちに、急激な不安に襲われてしまう。

確かに、事故を起こしたプラネットメーカーは、優子さんが部室に泊まり込んで調べてくれている。だが、事故の原因を突き止めたところで、時空がズレた理由まで判明するのだろうか。その理由がわかったとしても、時空のズレを修復するのに、いったいどれぐらいの年月が必要となるのだろう。これから先も元の状態に戻ることができず、誰にも気づかれないまま死んでしまうのではないだろうか…。

そんなことを考えているうちに、いつのまにか、わたしの瞳からは大粒の涙が溢れ出ていた。

わたしが泣いていても、誰も慰めてくれない。何をしようとも、誰も気づいてくれない。わたしは、不安と孤独感に耐えられなくなり、逃げるように病室から飛び出してしまった。

突然、誰もいないのに扉が開かれたため、神倉先輩たちは驚きの表情を見せる。ただ、健介ちゃんだけは何かに気づいたようで、慌てて病室を飛び出すのだった。

どこをどう走ったのか…。わたしは、病院の中庭に来ていた。

フラフラとさまよいながら、庭に聳える巨木に近づく。わたしは、巨木の根元にしゃがみ込み、両腕で顔を覆うように項垂れた。

『どうして、こんなことになったんだろう…』

わたしは、ギュッと唇を噛み締める。こんな気持ちになるのなら、病院になんか来なければよかった。そう考えると、再び涙が溢れてきてしまう。

自分がどんな状態なのかを知らなければ、少なくとも不安を覚えることがなかったはずだ。これまで通り、健介ちゃんの部屋で暮らし、端末越しに会話をして…。

わたしは、空を見上げるように、後頭部を木の幹へ押し付けた。

誰にも気づいてもらえない。誰とも喋れないことが、こんなにつらいものだとは思わなかった。
もし、存在に気づいてくれる者がいたのなら、わたしはその人と離れないように憑いていくかもしれない。幽霊なんかは、みんな、こんな考え方をしているのだろうか…。
そんなことを考えながら苦笑していると、ポケットのカード端末に着信が入った。端末を確認してみると、健介ちゃんからの通信のようである。
一瞬、どうしようかと迷ったが、回線を開いてみることにする。モニターに浮かび上がったのは、汗をかいて息を切らせている健介ちゃんの姿だった。
『健介ちゃん…。病院内は、通信禁止なんだよ～…』
わたしは、無意味なことを呟く。二十年前ならともかく、通信等による治療機器の誤作動対策は取られているからだ。
「なぁ～に言ってるんだ…」
なぜか、健介ちゃんの声が二重に聞こえてくる。驚いて顔を上げてみると、息も絶え絶えな健介ちゃんが目の前にいた。
「はぁはぁ…。やっぱり、ここにいたんだな…」
健介ちゃんは、わたしを見つけて、嬉しそうに微笑んだ。
『健介…ちゃん…？』
健介ちゃんには、わたしの姿は見えないはずである。通信もしていないのに、どうして居場所がわかったのだろうか。
「けっ、おまえの考え方は、自分で思っているよりも単純なんだよ…」
健介ちゃんは、腕で汗を拭いながら呟く。
「入院してる自分を見て、不安になったんじゃないか？」
健介ちゃんは、わたしの心をずばり言い当てた。
「それに、真菜が落ち込むときは、昔っからこんな木の下だって決まってるからな♪」
その笑顔を見た瞬間、わたしは涙が止まらなくなってしまった。

誰にもわたしの存在が気づかれなくなったわけじゃない。わたしに気づいてくれる人は、こんなにも近くにいたのだ。

『健介ちゃん！』

わたしは、おもわず健介ちゃんの胸に飛び込んでしまう。わたしが触れることで、健介ちゃんが消えてしまう可能性も考えられた。それでもわたしは、感情を優先させて、おもいっきり健介ちゃんに抱きついた。

「ちょっ、真菜！」

姿は見えないが、抱きつかれた感覚はあるようで、健介ちゃんは激しく慌てまくる。

「えっ…？」

そのとき、健介ちゃんの瞳には、わたしの姿が浮かび上がって見えた。だが、ほんの一瞬のことで、わたしの姿は再び見えなくなってしまう。

そのことは、もしかすると時空のズレを修復するヒントなのかもしれない。しかし、わたしに抱きつかれた健介ちゃんは、それどころではなさそうだ。

健介ちゃんは、顔を真っ赤にさせながら、あたふたしてしまう。ただ、わたしの姿は見えないため、傍目からはかなり挙動不審に映っていたことだろう。

第四話　樹神神社のプラネットメーカー（前書き）

２００４／０６／２９～２００４／１０／２８　連載作品

第四話　樹神神社のプラネットメーカー

一週間という健介ちゃんとの共同生活を経て、あっという間に夏休みがやってきた。

なんちゃらプラネットのみんなは、わたしのお見舞いをきっかけに、再び惑星創りの意欲に燃えはじめる。そして、健介ちゃんが提案したように、夏合宿を行うこととなった。

みんなは、わたしのために惑星を創り上げ、プラネットコンテスト出場を目指すと言ってくれている。それは、わたしにとって、もの凄く嬉しいことであった。

わたしたちは、優子さんから渡されたメモを頼りに、街の郊外へと向かっていた。

メモに書かれている住所は、森が広がっている地区のようである。そんなところに、合宿のできるような施設があるのだろうか…。先導する健介ちゃんも、かなり不安そうな顔をしていた。

「え～っと…」

突然、健介ちゃんが振り返り、わたしと視線が合ってしまう。もちろん、健介ちゃんにはわたしの姿が見えないので、一方的に視線がぶつかっただけである。それでも、わたしは、飛び上がるほど驚いてしまった。

『うぅ～…』

心臓が激しく鼓動し、顔から火が噴き出しそうになる。わたしは、病院での一件から、健介ちゃんの顔をまともに見られなくなっていた。

感情をあらわにして、泣きじゃくる姿を見られてしまい、もの凄く恥かしい思いをした。いや…。実際には見られていないのだが、それでも恥かしさには変わりなかった。

「健介～…。合宿先、まだなの～…？」

振り向いた健介ちゃんを見て、瑞希がうんざりした声を上げる。

たいした距離ではないのだが、舗装されていない地面を歩いて疲れてしまったようだ。
「たぶん、この先だと思うんだが…」
健介ちゃんは、困ったように苦笑して、森の奥へと続く一本道を指差す。すると、神倉先輩たちの動きが固まってしまった。
「こ、この先って…、アレに繋がってるんじゃ…なかった？」
若葉先輩は、大汗をかきながら呟く。視線を向けられた神倉先輩は、カクカクした動きで頷いた。
「って、ちょっと！　合宿先って、まさかアソコなの～！」
瑞希も気づいたのか、大きな叫び声を上げる。健介ちゃんは、瑞希の問いに答えることはせず、唸りながら頭をかいていた。
「まぁ、行ってみるしかないだろう…」
ここで言い合っていてもしかたがない。神倉先輩は、ため息をつきながら、一本道へと入っていく。わたしたちも、渋々その後を追うことにした。
五分ほど歩いただろうか、目の前に石段が現れた。長い石段を見上げると、その先に大きな鳥居が立っている。また、石段の脇には巨大な石碑が建っており、そこには予想通り、“樹神神社”の文字が刻まれていた。
「樹神…神社…」
その文字を見た神倉先輩は、頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。
若葉先輩たちも、項垂れるようにため息をついている。わたしも、まさか目的地が樹神神社だとは思わなかった。
樹神とは、全国にいくつも点在している神社ではあるが、祀っている神様が凄かった。産土神や天神地祇などではなく、現存する二人の人間神さまを祀っているのだ。
そのため、樹神神社は、易々と立ち入ることができない聖域とされていた。中でも光風町と紅柱石、わたしたちが暮らす金緑石の樹神神社は、三大聖域とされている。そんな聖域で合宿しようとしていたとは、我ながら頭痛がしてくる思いだった。

「昴…、どうするの？」
若葉先輩は、苦笑しながら神倉先輩の指示を仰ぐ。神倉先輩は、腕を組んで考え込み、諦めたように呟いた。
「ま～、このままこうしているわけにもいかないし…、行ってみようか～…」
そう言って、神倉先輩は、目の前の石段を登り始めた。

「なぁ～…。アレ…、何だと思う…？」
健介ちゃんは、隣にいる瑞希に問いかける。しかし、瑞希は真っ青な顔でガタガタと震えるだけで、何も答えようとしない。
石段を登り、樹神神社の境内に着いたわたしたちが見たモノ…。それは、境内に伏せるように寝転んでいる、巨大な獣の姿であった。
体長が三～四メートルはあるだろうか、真っ黒な毛並みでいかにも凶暴そうな顔をしている。額に憑いた赤い石と合わさって、三つ目のようにも見えた。そんな狼のような獣が、ピクリとも動かずに、わたしたちを睨みつけていた。
「狛犬の…、代わりなのかしら？」
若葉先輩も、震えながら呟く。このような生物は、地球上のどの場所にも存在しないだろう。もちろん創り物だとは思うが、それにしても恐すぎであった。
「人間神さまを祀っている神社なんだから、普通じゃないんだろうけど…」
神倉先輩は、恐る恐る置物に近づいてみる。
「ふぅ～、大丈夫みたいだ～」
まったく動かないことを確認して、神倉先輩は腕で汗を拭う動作をした。
だが、ホッとしたのもつかの間、わたしは信じられないものを見てしまった。置物と思われていた獣の目玉が、神倉先輩を追うように動いたのだ。
『か、神倉先輩！』

わたしは、危険を知らせようと、大声で叫んでしまう。その瞬間、獣は顔を上げ、わたしを睨みつけた。
「がるるるっ！」
獣は、牙を剥き出しにして立ち上がり、わたしに向かって大きくジャンプする。
「うわぁあああーーー！」
健介ちゃんたちは、涙を浮かべて逃げ惑う。獣の落下地点には、驚きのあまり身が竦んでしまったわたしだけが残された。
獣は、目の前に着地して、低い唸り声を上げている。わたしは、頭の中が真っ白となり、恐怖に震えるしかなかった。
「リウムちゃ～ん、どうしたの～～～？」
どこからか、そんな声が聞こえてくる。その声に反応した獣は、聞こえてきた方角に顔を向けた。
奥の方から、一人の少女が現れる。わたしたちと同い年ほどの少女は、平然と巨大な獣に近づき、丸太のような前足に手を添えた。そして、腰を抜かしたように倒れている健介ちゃんを見て、納得したような表情で獣を見上げる。獣は、軽く尻尾を振って、少女を睨み返した。
「飛鳥…お姉ちゃん…。……、お客…さん♪」
驚いたことに、巨大な獣から、かわいい声が聞こえてくる。わたしたちが唖然としていると、獣の身体がみるみる縮小し、十歳ぐらいの女の子の姿となってしまった。
『なっ！』
信じられない光景に、わたしは言葉を失ってしまう。優子さんの翼にも驚いたが、今回はそれの比ではない。まさに、白昼夢でも見ているようであった。
「え～っと…。もしかして、優子が言ってたなんちゃらプラネットの人かな？」
飛鳥と呼ばれた少女は、わたしに声をかけてくる。どうやら、優

子さんと同じように、わたしの姿が見えているようだ。
『は、はひっ！』
面と向かって喋りかけられるのも久しぶりで、わたしはおもわず奇妙な声を上げてしまう。わたしの返事を聞いて、飛鳥さんは、優しそうな微笑みを浮かべるのだった。
「それじゃあ、みんなが泊まる部屋に案内するわね♪」
飛鳥さんは、身を翻して歩き出す。知らないうちに話がどんどん決まるため、神倉先輩たちはしきりに小首を傾げていた。
わたしが飛鳥さんの後に続こうとすると、少女姿のリウムちゃんが手を握ってきた。やはりというべきか、リウムちゃんにもわたしが見えているようである。リウムちゃんは、わたしの手を引っ張って、先導するように歩き出した。おそらく、案内してくれるつもりなのだろう。
リウムちゃんは、獣のときとは違って、もの凄く愛らしい姿をしていた。わたしは、おもわず抱きしめたくなる衝動を抑えるのに必死だった。
「ま、待ってください！」
突然、神倉先輩が飛鳥さんを呼び止める。立ち止まった飛鳥さんは、ゆっくりとした動作で振り返った。
「あ、飛鳥さんと…いわれるのですよね」
神倉先輩は、飛鳥さんに見つめられて、緊張したように息を呑む。
「飛鳥さんって…、その～…、もしかして…」
しどろもどろになりながら、神倉先輩は何かを質問しようとしている。そんな様子に何かを察したのか、飛鳥さんはまっすぐにわたしたちと向かい合って、ペコリとおじぎをした。
「自己紹介がまだでしたね…。わたしは、樹神飛鳥…」
その言葉を聞いた先輩の顔色が急変する。
「いちおうこの世界の神様…、人間神トパーズをさせていただいています…」
飛鳥さんは、困ったように苦笑する。予想通りの答えに、神倉先

輩は、気を失ったように倒れてしまった。
樹神飛鳥…。その名は、紛れもなく現存する二神の一人。いまから二十年ほど前、この世界の神に即位した、人間神トパーズさまの真名であったからだ。

樹神神社へとやって来たわたしたちを出迎えたのは、巨大な狼型の獣に変身できるリウムちゃんと、現存する二神の一人…、人間神飛鳥さまであった。
普通なら、人間神さまは、地球のどこかにある聖域にいらっしゃるはずである。それなのに、どうしてこの金緑石にいるのだろうか…。
「あ～…。お仕事は瑠璃に任せて、わたしは少し前から夏休み～♪」
それが、大部屋にお茶を運んできてくれた飛鳥さまの御言葉である。現在、わたしたちは、人間神さまにお持て成しされている、とんでもない状況にあった。
「なるほど…。だから、プラネットメーカーの事故が騒がれなくなったのか…」
神倉先輩は、納得したように、そんなことを呟く。
神倉先輩は、飛鳥さまが極秘で金緑石に訪れているため、全ての報道関係がシャットアウトされているという仮説を唱えた。それに、人々の注意が金緑石へ向かないよう、この街で起こった全ての事件は、話題すら上がらないようになっているのかもしれない。
なんにしても、あれほどの大事故を起こして騒がれないのだから、わたしたちにとってラッキーな展開であった。
「それじゃあ、午後からプラネットメーカーの場所に案内するから、それまではゆったりとくつろいでいてね♪」
飛鳥さまは、微笑みを浮べて、部屋から立ち去ろうとする。
「ま、待ってください！」
瑞希は、大声を出して飛鳥さまを呼び止めた。瑞希の叫びに、神

倉先輩たちが青い顔をする。仮にも人間神さまを呼び止めたのだから、当然の反応なのかもしれない。
「わ、わたしの先輩が…、意識不明の病状で入院しています…。どうか、飛鳥さまの御力で、マナ先輩を…治してはいただけないでしょうか！」
瑞希の身体は、緊張のあまりガタガタと震えていた。
「……」
その言葉に、飛鳥さまは考え込んでしまう。
「ごめんなさいね…。個人的なお願いは、叶えちゃいけないことになっているの…」
それを聞いた瑞希は、明らかに落胆した表情を浮べる。
「まぁ～、今回の事故は優子の仕出かしたことだし、わたしも何とかしてあげたいのは山々なんだけど…」
わたしの詳しい病状は、優子さんに聞いているのだろう。どうやら、時空のズレを修復することは、人間神である飛鳥さまにも難しいようだ。
飛鳥さまは、気落ちした瑞希を見て、困ったような顔で部屋から出ていってしまう。
「瑞希ちゃん…」
若葉先輩は、瑞希を慰めるように、頭を優しく撫でる。自分たちも同じ気持ちだよ…と言わんばかりに、にっこり微笑むのだった。

みんなが瑞希を慰めているとき、わたしは視線を感じて廊下の方を見た。そこには、いなくなったと思っていた飛鳥さまが、障子の陰に隠れて手招きをしていた。
『え？』
わたしが自分を指差してみると、飛鳥さまはコクリと頷く。わたしは、みんなに気づかれないように…といっても見えないのだが、飛鳥さまのもとに駆け寄った。
飛鳥さまは、わたしの手を取り、廊下を渡って別棟へと入る。ど

んどん奥の方へと進み、庭に面した一つの部屋へ案内してくれた。
「真菜ちゃんは、この部屋を使ってね♪」
神倉先輩たちから隠れて生活するのは、かなり無理があると思われる。飛鳥さまも、気を使ってくださっているようだ。
「ここは、わたしの知っているだけでも、人類滅亡の危機を五回は救ってくれた勇者さまが使っていた部屋なの」
突然、飛鳥さまの口から、とんでもない言葉が飛び出した。
いったい、飛鳥さまは、何を言っているのだろう…。いや、飛鳥さまが嘘をつくとは、とても思えない。もしかすると、わたしたちの知らないところで、世界は何度も滅亡の危機にさらされていたのかもしれなかった。
そして、追い撃ちをかけるように、飛鳥さまは信じられないことを呟いた。
「その勇者さまなら、時空のズレなんて簡単に直してしまうのに…」
わたしは、己の耳を疑ってしまう。飛鳥さまの御言葉は、まさに問題解決の手掛りだったからだ。
『あ、飛鳥さまっ！　その勇者さまは、いまどこに…って、はっ！』
飛鳥さまを問い詰めている自分に気づき、わたしは慌てて頭を下げる。
『すすす、すみません！』
わたしは、涙目になりながら、謝罪の言葉を口にした。
「う～ん…。この姿のときは人間神ってわけじゃないから、そんなに脅えなくても…」
飛鳥さまは、苦笑しながら呟く。しかし、何かを思いついたのか、わたしを見つめてにっこりと微笑んだ。
「じゃあ～ねぇ、許してほしかったら、わたしのことを“飛鳥さん”って呼ぶこと♪」
どうやら、われらが人間神さまは、立場に対してのこだわりがまったく無いようである。
『そ、それじゃあ…、飛鳥…さん、その勇者さまがいまどこにいる

のかを、教えてくれませんか？』
わたしは、失礼が無いように、言葉を選びながらお願いした。
「え…、ショウくんの居場所！」
飛鳥さんは、わたしの言葉を聞いて、なぜかギョッとした動作をする。言いにくそうに唸りながら、わたしの期待には応えられないことを告げた。
「ショウくん…は、いまから二十年前に亡くなっているの…」
それを聞いた瞬間、わたしは目の前が真っ暗となってしまう。期待が大きかっただけに、泣きたい気持ちになってしまった。

部屋を自由に使って構わないと言い残し、飛鳥さんは早足に立ち去っていった。
飛鳥さんは、わたしたちのために、昼食の準備に取りかかったようである。数十分後、わたしたちは、申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら、人間神さまの手料理を頂戴することになった。
一人残されたわたしは、案内された部屋の中をぐるりと見回してみた。
神倉先輩たちがいる大部屋と同じような純和風の造りで、中央には立派な座卓が置かれている。そして、奥の方に、とても珍しいものを見つけた。博物館にでも展示されていそうな、旧式の電子計算機…。現在のシステムが、パソコンと呼ばれていた時代の個人端末である。
『うわぁ～…。こんなに大きいんじゃ、持ち運びもできないよね～…』
わたしは、興味津々にパソコンを眺めてみた。
本体と思われる装置が箱状でやたら大きく、モニターはブラウン管と呼ばれていたものである。入力装置も不思議な形をしており、カード端末で情報を検索してみると、どうやらキーボードとマウスと呼ばれるものらしい。わたしは、キーボードのボタンを押してみる。ぐにゃりとした感覚が指先に伝わり、なんだか楽しい気持ちに

なってしまった。
　現在の端末は、個人の思考や好みに合わせて、次々と文章候補をパネルに表示させるタイプである。大きささえ気にならなければ、このキーボードと呼ばれる装置を使って、一つ一つ文字を入力してみるのも面白そうだ。
『そうだ…』
　わたしは、あることに気づいて、パソコンの接続端子を探し始める。このパソコンが、飛鳥さんの言っていた勇者さまの使っていたものだとするなら、時空のズレを修復する手掛りが記録されているかもしれないのだ。
　だが、古い時代の端末は、操作が難解だったといわれている。下手に操作して、データが消えてしまっては元も子もない。わたしは、パソコンを直接操作するのではなく、自分の端末に繋げてデータを検索しようと考えた。しかし、接続端子は、見たこともない形状のものばかりであった。
　わたしは、データ検索を諦めて、あとから飛鳥さんに操作をお願いしようと考える。そのとき、背後に異様なプレッシャーを感じた。
　恐る恐る振り返って、わたしはおもわず息を呑んでしまう。そこには、凶暴そうな三つ目の獣が、牙を剥き出しにわたしを睨みつけていたからだ。
『は…ひ…』
　わたしは、気が遠くなるのを感じて、パタリと倒れてしまった。
「…、マナ…お姉ちゃん？」
　巨大な獣とは、わたしの様子を見に来てくれたリウムちゃんである。リウムちゃんは、気を失ったわたしの顔を、巨大な舌でペロペロと舐めはじめた。そのザラザラした感触に、わたしは意識を取り戻す。
『きゃあああぁ…って。り、リウム…ちゃん？』
　再び気を失いそうになるが、その獣がリウムちゃんだと気づき、わたしは大きな息をつく。

覚悟ができていないときに獣姿を見せられると、心臓にも精神にも負担がかかってしまう。ただ、当のリウムちゃんは、わたしの反応が嬉しいのか、軽く尻尾を振っていた。
『あ…、リウムちゃん…？』
わたしは、リウムちゃんを見て、あることを思いつく。
『このパソコンを使って、データを検索したいんだけど…』
リウムちゃんなら、パソコンを操作できるのではないかと考えた。その問いかけに、リウムちゃんは小首を傾げて考え込む。いや、本当に考えてくれているのか、かなり疑問であった。
なんともいえない空気が辺りに漂う。わたしは、なぜか嫌な予感を覚えた。
「…ん。…、やって…みる」
そう言うと、リウムちゃんは、いきなり前足を大きく振り上げる。唖然としているわたしの目の前で、鋭い爪をパソコンに叩き付けた。
パソコンは、まるで紙で作られた箱のようにぶっ飛んでしまう。
時空のズレを修復する手掛りがあるかもしれないパソコンは、二度と使うことができないほど原型を留めていなかった。

昼食後…。わたしたちは、飛鳥さんに連れられて、神社の裏にある林へと向かっていた。
林を抜けると、古いプレハブ小屋が建っている。その中に、システム開発者の優子さんが使っていたプラネットメーカーがあるそうだ。
「はい。これがここの鍵ね♪」
扉を開けた飛鳥さんは、そのまま鍵を神倉先輩に渡す。
「二十年近くは使われてなかったけど…、ちゃんと動くと思うから♪」
そう言って、飛鳥さんは小屋の中へと入っていく。わたしたちも、急いでその後を追うことにした。

「こ、これは…」
小屋にあったプラネットメーカーを見て、神倉先輩が驚きの声を上げる。そこにあったのは、どの規格にも当てはまらない、機材や接続ケーブルが剥き出しのプラネットメーカーであったからだ。
「もしかして…、試作機かなにかですか？」
神倉先輩は、飛鳥さんがいることも忘れて、興味深そうにシステムのチェックをはじめる。しきりに唸り声を上げながら、感心するように何度も頷いていた。
「し、試作機って…。本当に大丈夫なの？」
瑞希は、不安そうに呟く。このプラネットメーカーは、製品が発売される前の試作機で、すでに二十年以上も使われていない。瑞希が心配するのも、無理はないことだろう。
「あら…。試作機だからって、侮ってもらったら困るわね～」
飛鳥さんは、意味有り気に微笑む。
「あなたたち、“ブループラネット”って知ってる？」
その名前は、プラネットメーカーのユーザーであれば、誰でも知っているものだった。
ブループラネットとは、初期の頃に発表された青い惑星のことである。地球に似たその惑星はブループラネットと呼ばれ、その美しさからプラネットメーカーのユーザーを一気に増やしたといわれていた。ブループラネットは、ユーザーたちの憧れの的であり、プラネットメーカーを象徴する惑星でもあった。
しかし、プラネットメーカーが発売されてから約二十年…、青い惑星を創り出したユーザーはいまだ現れていない。そのため、ブループラネットは奇跡の星とも呼ばれていた。
「そのブループラネットを生み出したのが…、この試作機だったりして～♪」
飛鳥さんの言葉に、細部をチェックしていた神倉先輩が驚きの声を上げる。
「こ、これが、ブループラネットを創り上げたシステム！」

神倉先輩は、まるで子どものように、目をキラキラさせていた。
同じシステムを使えば、同じ惑星が創れるわけでもない。それでも、奇跡の星を生み出したシステムが使えるのだから、神倉先輩でなくても感動することだろう。
「なんか…、もの凄いシステムに見えてきた…」
瑞希がそんなことを呟く。ボロボロのシステムがとても立派に見えてくるのだから、人の心とは単純なものである。
とは言っても、さすがは試作機だけあって、操作法があまりにもアナログ過ぎる気がした。
「昴…、システムの様子はどうなの？」
若葉先輩は、各装置を点検していた神倉先輩に声をかける。
「問題ない…。基本操作は、ボクたちが使っていたのと同じみたいだ」
神倉先輩は、ゆっくりと振り向いて、わたしたちを見回す。
「それでは、いまから惑星の創造に取りかかりたいと思います」
神倉先輩は、息を吸い込んで、気合を入れるように大声で宣言する。
「プロジェクト名、“プラネット・マナ”！」
突然、わたしの名前が神倉先輩の口から飛び出したので、飛び上がるほど驚いてしまう。もちろん、神倉先輩にわたしの反応が見えるはずもない。神倉先輩は、みんなが頷くのを見て、満足したように微笑んだ。
「入院している野乃原さんのためにも、必ず完成させよう！」
神倉先輩が拳を突き出すと、みんなも同じ動作で掛け声を上げる。その行動に、わたしは呆然と立ちつくしてしまった。
「プラネット・マナ…ねぇ～…」
飛鳥さんは、含み笑いを浮かべて、わたしに視線を向ける。わたしは、反論することもできず、照れたように頬を赤く染めるしかなかった。

こうして、わたしたちの惑星創りが始まった。
惑星を創るためには、まず自ら光や熱を発する恒星を誕生させなければならない。恒星は、宇宙に漂う塵やガスが集まり、巨大になることで誕生するといわれていた。
プラネットメーカーでは、まず広大無辺な宇宙空間をチェックして、恒星誕生の条件がそろっている座標を探索することから始める。
宇宙に一千億以上もある銀河の中から一つを選び、倍率を上げながら候補の座標を絞り出す。しかし、わたしたちが住む天の川銀河ですら、直径がおよそ十万光年と信じられない広さがある。そんな無限に思えてしまう宇宙空間の中から、ベストな座標を探し出すことはかなりの労力を要する。運がよければすぐにでも見つかるが、たいがいの場合は適当なところで妥協することが多かった。今にして思えば、その労力こそ恒星の創造を成功させるための条件だったのだろう。
神倉先輩たちにもそれがわかっているようで、座標候補の探索は夜を通して行われることになった。
「先輩、ここなんてどうでしょうか？」
健介ちゃんは、候補地を見つけて、神倉先輩に報告する。神倉先輩は、健介ちゃんのデータを自分のモニターに表示させ、食い入るように数値を見つめた。
「ダメだ…。さっきの座標より、数値が低い…」
神倉先輩は、がっかりしたようにため息をつく。こうした地道な探索によって、座標の候補地を絞り込んでいくわけだ。
大した成果も上がらないまま、ただ時間だけが過ぎていく。そのとき、プレハブ小屋の扉が開かれて、飛鳥さんが入ってきた。
「お夜食持ってきました～～～♪」
飛鳥さんは、おむすびを並べたお皿と、お茶の入ったポットを持ってきてくれたようだ。それを見た神倉先輩は、慌てて飛鳥さんから受け取る。
「どう～？　いい場所、見つかった～？」

飛鳥さんは、モニターに映る座標数値を覗き込んだ。
「ええ…。一つだけですが、これまでより数値の高い場所を見つけることができました」
神倉先輩は、おむすびを片手に持ちながら、パネルを操作して座標を指定する。モニターには、高密度のガスが漂う空間が映し出された。
「でも、せっかくブループラネットを創ったシステムを使っているんですから、より完璧な座標を見つけたいと思います」
神倉先輩は、候補地の探索に、三日間ほど費やしたいと考えているようだ。
「うん…。じっくりと時間をかけることも大切だね♪」
飛鳥さんは、微笑みを浮かべながら頷いた。
「ところで…、星が生まれる前は、その場所に何があったのかしら？」
突然、飛鳥さんが、とぼけたように呟く。
「星が生まれるぐらいなんだから、元となる何かがあったのでしょうけど…」
飛鳥さんの言葉に、わたしたちは考え込んでしまう。
星が誕生する前の空間…。そこには、大量の塵やガス、それ以外にも星を構成するために必要な様々な元素が存在する。わたしたちは、そんな空間を探しているのだ。
そのことは、プラネットメーカーに挑戦しているユーザーにとって、常識のような内容である。わたしたちは、飛鳥さんが何を言いたいのか、理解することができなかった。
「闇雲に探すだけじゃなく、もっと違う方向から理由を考えて、座標を選択するのも面白いんじゃない？」
飛鳥さんは、湯呑みにお茶を注ぎながら呟く。
「例えば～…。星の元になる何かは、どうしてそこにあるんだろう…、とか♪」
飛鳥さんの言葉に、神倉先輩がハッとする。どうやら、とてつも

ないヒントが隠されていたようだ。
「そうか！　スーパーノバ…、超新星爆発！」
神倉先輩は、弾かれたように立ち上がり、大きな声で叫ぶ。そこに、仮眠を終えた若葉先輩と瑞希がやってきた。
「若葉、超新星爆発だ！　寿命を終えようとしている星を探すんだ！」
話の内容がわかっていない若葉先輩たちは、神倉先輩の剣幕に呆然としてしまう。だが、神倉先輩の仮説を聞き、慌てて超新星の探索に入った。

『なるほど…、超新星爆発か～…』
わたしは、満足そうに微笑んでいる飛鳥さんに視線を向ける。
巨大な星が年をとると、中心に鉄のような重い物質が溜まっていく。その重さに耐えられなくなった星は、重力バランスに狂いが生じ、ついには大爆発を起こしてしまう。それが、超新星爆発と呼ばれる現象であった。
爆発を起こした星は、辺りに塵やガスを撒き散らす。それらを元に、長い年月をかけて、再び新しい星が生まれるとされていた。超新星爆発直後の座標には、恒星を創り出す条件が、全て揃っていると予想されるのだ。
「いままでボクたちが探していたのは、星になりきれなかったガスや塵の集まりだったんですね…」
神倉先輩は、何かを悟ったように呟いた。
条件を満たしていないため、いつまで経っても恒星が誕生しない。わたしたちなんちゃらプラネットが選んでいたのは、最初から惑星が誕生することのない座標だったようだ。

第五話　急変の知らせ

現在、メインコンソールのモニターには、ひときわ眩しく輝いている星が映し出されていた。太陽より約十倍の重さを持つ星が寿命となって、重力バランスの異常から大爆発を起こす。そんな超新星爆発が、それほど時間がかからないうちに起こると予想された。

ちなみに、プラネットメーカーにおける時の流れは、実際の一時間で約百年となっている。つまり、一日で二千四百年が経過するわけだ。ただし、それは基本的な流れであって、システムをスリープ状態にしたり、数千年単位で時間を進めることもできた。

「超新星って…、たしかブラックホールになることもあるんだよね…」

瑞希は、モニターに映る星を見つめながら身震いする。部員の一人であるわたしが、ブラックホールと思われる現象に巻き込まれて、原因不明の病状で入院しているからだ。

「まぁ、ブラックホールになったり、中性子星が残ったりすることもあるけど…。まだ、モニターしているだけだから、問題ないと思うよ」

神倉先輩は、超新星を眺めながら平然と答える。座標を固定して、中央のガラスケースに表示させない限り、テレビで映像を見ているのと変わりはない。たとえブラックホールが発生したとしても、モニターすることを止めればいいだけのことである。

「それに、ボクは野乃原さんの事故も、ブラックホールが原因だとは思えないんだ…」

神倉先輩は、そんなことを呟いた。

一般的なブラックホールとは、寿命を終えようとする星が、超新星爆発を起こしたときに発生する天体のことである。

星が超新星爆発を起こすと、外層部は吹き飛ばされてしまうが、逆に中心核は重力収縮してしまう。その中心核の重量が太陽の二～

三倍に達しない場合は中性子星となり、それ以上の場合には重力崩壊を起こして、光さえ脱出できない領域“ブラックホール”が誕生するといわれていた。
光すら重力に引きつけられるので、外部からブラックホールそのものを見ることはできない。また、天体に限らず、太陽質量の十万倍以上ある星雲がそのまま収縮すれば、同じく重力崩壊を起こして巨大なブラックホールを形成する可能性がある。銀河の中心にも、このようなブラックホールがあると考えられていた。
つまり、部室のプラネットメーカーで観察していた座標には、ブラックホールが誕生する条件はまったくなかったのだ。
いまとなっては、あの現象が何だったのか、わたしたちに知るすべはない。システムリセットをしたことで、観察していた全てのデータが失われてしまったのだから…。
「まぁ、この超新星がブラックホールにならないことを祈りましょう…」
若葉先輩は、苦笑気味に呟く。
「魅力的な座標でも、近くにブラックホールがあるんじゃ、危険すぎるもの…」
もし、ブラックホールが発生してしまった場合、別の超新星を探す必要が出てくる。だが、恒星同士の距離などを考えても、ここより条件の良い座標を探すことは困難だと思われた。
「ふぁあああ〜〜〜〜…」
突然、健介ちゃんが大きなあくびをする。仮眠を取った若葉先輩たちと違い、神倉先輩と健介ちゃんは、ずっとプラネットメーカーにかかりっきりだったからだ。
「ふふっ。遠野くん、超新星の観察はわたしたちに任せて、少し眠ってきたら？」
若葉先輩は、眠そうにしている健介ちゃんに声をかけた。
「ん〜…、そうするか〜…」
健介ちゃんは、ヨロヨロと立ち上がり、大きく伸びをする。そん

な姿を見ていると、わたしにも眠気が襲ってくるのだった。
「ボクはまだ眠くないし、観察を続けるから…」
神倉先輩は、モニターから視線を外さずに、片手をあげて合図をした。ゲームとはいえ、普通では絶対に見られない天体ショーが、これから起ころうとしている。なんちゃらプラネットの部長としては、是が非でもリアルタイムで観察しておきたいのだろう。
「それじゃ～、お先に休ませてもらいますね…」
健介ちゃんは、みんなに挨拶をして、プレハブ小屋から出て行こうとする。わたしも、その後に続くことにした。
「あ…、そうそう…」
何を思ったのか、健介ちゃんがいきなり振り返る。止まりきれなかったわたしは、そのまま健介ちゃんの胸に突っ込んでしまった。
『え～っと…』
わたしは、動揺しながらそっと顔を上げてみる。姿は見えないものの感触はあるのか、健介ちゃんは顔を真っ赤にして固まっていた。
「って…。なに赤面してるのよ、気持ち悪いわね…」
瑞希が呆れ口調で呟く。健介ちゃんの態度に、瑞希はなぜか、不機嫌な表情を浮かべていた。

白鳳学園なんちゃらプラネットの部室では、一人の女性が黙々とデータ収集に励んでいた。それは、プラネットメーカーの開発者である如月優子さんであった。
優子さんが向かっているモニターには、奇妙な記号の羅列した画面が浮かんでいる。そして、別の小さな画面には、樹神神社にいる飛鳥さんの顔が映っていた。どうやら優子さんは、飛鳥さんと通信しながら、システムログをチェックしているようだ。
『で～…、何かわかったの？』
飛鳥さんは、記号の解読で忙しそうな優子さんに声をかける。
「う～ん、あまり進展無いかな～」
優子さんの否定的な言葉に、飛鳥さんはがっかりする。

「たぶん、時空制御装置の異常だと思うんだけど…」
優子さんがパネルを操作すると、メインモニターにプラネットメーカーの図面が映し出された。
「今回の事故は、装置の暴走っていうより、野乃原真菜さんの力に時空石が反応してしまった…と考えるべきね」
すると、図面の一部が拡大表示される。プラネットメーカーの中核であるガラスケースの下。ユーザーには、決して目にすることができない装置内部のブラックボックス…。そこには、異世界にしか存在しないとされる、不思議な宝石が収められていた。
『それにしても…。プラネットメーカーのユーザーたちは、自分たちがタイムマシンにもなりうる装置を使ってるなんて、夢にも思わないでしょうね～』
飛鳥さんは、呆れたようにため息をつく。
「ま～、ただの人間に、時空石を扱えるほどの知識や技術は無いでしょ～」
優子さんは、苦笑しながら頭をかいた。
「それに、このサイズの時空石には、人を転移させるほどの力は無いはずだし…」
そう言って、優子さんは、懐から一つの小瓶を取り出した。
小瓶の中には、虹色に光を放つ宝石が入っている。これが、時間や空間を操ることができる“時空石”であった。
プラネットメーカーとは、ただのシミュレーションゲームではない。ブラックボックスに収められている時空石の力を使い、過去の宇宙まで遡って、実際に星を観察しようとする装置だ。
これまで、ユーザーがプラネットメーカーで誕生させた恒星や惑星は、宇宙のどこかで実際に存在しているという。時空間転移による過去や未来への時間移動、空間転移による座標の探索…。わたしたちがゲームだと思っている装置は、異世界でも特殊とされる時空術がふんだんに使われていた。
もちろんプラネットメーカーは、過去に誕生した星をただ観察す

るだけの装置ではない。優子さんがプラネットメーカーを創った目的は、惑星の誕生にユーザーを介入させることであった。
ユーザーが惑星の誕生に介入することで、自然では考えられない変化が起こることもある。それによって、ブループラネットのような“生命が住める惑星”を創ろうとしているわけだ。
生命が住めない惑星を、テラ・フォーミング（惑星改造）で強引に変化させるのではなく、長い年月をかけて環境を整える。当然、人間の一生では、星の環境を整えるまでの時間が足りないため、時空間を跳躍するプラネットメーカーが創られたのだ。
まるで、神さまの真似事をしているようである。わたしたちは、惑星の創造という壮大な計画に、知らないうちに参加させられていたようだ。
この事実は、優子さんと飛鳥さんしか知らないことである。他の研究者は、いまでもプラネットメーカーを、異世界の技術が使われているゲームだと思っていた。
おそらく、これからも事実が公表されることはないだろう。ユーザーは難しいことを考えずに、シミュレーションゲームとして楽しめばいいのだから…。
「それはそうと…。そっちの星創りは順調なの？」
一息ついた優子さんは、カップにコーヒーを注ぎながら呟く。席に戻り、飛鳥さんの映っている画面を拡大表示させた。
『うん♪　いま、超新星を観察中だよ♪』
飛鳥さんが答えると、優子さんの眉がピクリと動く。
「飛鳥…。なんか喋ったでしょ…」
優子さんは、飛鳥さんをジト目で睨みつけた。
『ううん、わたしはヒントを口にしただけだよ～♪』
抗議の視線をかわすように、飛鳥さんはそっぽを向いた。
「はぁ～…。まぁいいわ～…」
追求することを諦めた優子さんは、呆れたように大きなため息をつく。飛鳥さんであれば、ブループラネットを創り上げることも簡

単なことだろう。
　そのとき、優子さんの情報端末に、緊急を知らせる着信音が鳴り響いた。
『な、なに？　トラブルでも起こったの？』
　飛鳥さんが心配そうに呟く。優子さんは、それには答えず、緊急回線を開いた。
　画面に映ったのは、事故を調査に来ていた研究員の一人である。研究員の真剣な表情に、優子さんは覚悟を決めるかのように喉を鳴らした。
『優子…？』
　飛鳥さんは、緊急回線が閉じられたのを確認して、優子さんに問いかける。優子さんは、真っ青な顔で、心配そうにしている飛鳥さんを見つめた。
「病院の…、真菜ちゃんの容態が急変したって…」
　そのことを告げる優子さんの声は、微かに震えていた。
　途端に、飛鳥さんとの回線が途切れる。飛鳥さんは、プレハブ小屋にいるわたしの様子を見に行ったに違いない。
　同じように、優子さんも慌ててシステムを休止状態にする。セキュリティーを確認し、急いでわたしが入院している総合病院へ向かうのだった。

「あなたたち！」
　飛び込んできた飛鳥さんに、神倉先輩たちは飛び上がるように驚く。
「何か変なことしなかった？」
　飛鳥さんは、何かを探すようにキョロキョロしながら、プラネットメーカーに近づく。そして、中央にあるガラスケースを見て、おもわず息を呑んでしまった。ガラスケースには宇宙空間が広がっており、超新星の残骸と思われる塵やガス雲が渦を巻いていたからだ。

「変なこと…って…」
神倉先輩が困ったように呟く。
「ちょっと前に超新星爆発が起こって、ベストと思われる座標を探索し、いま第一座標の固定をしたところです♪」
そう言って、微笑みを浮べながらガラスケースを見つめた。
「凄いんですよ♪　いままでの座標とは、比べものにならないほど数値が高くって～」
若葉先輩も、嬉しそうにはしゃいでいる。まるで、恒星の誕生を確信しているようであった。
「そう…。良かったわね…」
飛鳥さんは、素っ気無い態度で、慌しく神社へと戻って行く。残された神倉先輩たちは、意味もわからずに呆然とするしかなかった。

飛鳥さんが用意してくれた部屋に戻る途中、わたしは全身の力が抜けるような感覚に陥り、その場に倒れ込んでしまった。意識はあるのだが、まともに身体を動かすことはできない。助けを呼ぼうにも、カード端末すら操作することができなかった。
『いったい、どうなって…うっ！』
蟲が蠢くような感覚に、わたしはおもわず身震いしてしまう。次の瞬間、全身が引き裂かれるような激痛に襲われた。
痛みによって身体が硬直してしまい、悲鳴すら上げることはできない。このままでは、気が狂って死んでしまう…。そんなことを考えていると、巨大な何かが近づいてくる気配を感じた。目だけで気配を追ってみると、そこには魔獣姿のリウムちゃんが牙を剥き出しにして唸っていた。
「…、マナ…お姉ちゃん？」
リウムちゃんは、強面で小首を傾げる。わたしが動けないことに気づいたのか、鼻の頭で反応を確かめた。
「ここ…、お布団じゃない…」
そう言うと、リウムちゃんは口を大きく開いて、わたしの身体を

咥えてしまう。そのまま首を振り上げて、わたしを背中に乗せてしまった。
　リウムちゃんは、背中でうつ伏せになっているわたしを落とさないようにゆっくり歩く。どういうわけか、さきほどまでわたしの全身を襲っていた激痛は、ウソのように治まっていた。
『リウムちゃん…、ありが…と…』
　わたしは、心地よい温かさを感じながら、意識を失ってしまう。
「真菜ちゃん！」
　そこに、慌てた様子の飛鳥さんがやってきた。
「無事の、ようね…」
　飛鳥さんは、わたしを見てホッとしたように息をつく。すると、飛鳥さんの携帯端末に通信が入った。
「もしもし…、優子？」
　飛鳥さんは、相手の確認もせずに会話を始める。
『こっちは落ち着いたみたい…。そっちの様子はどう？』
　どうやら優子さんは、わたしの容態が安定したことを連絡してきたようだ。
「こっちも同じ…。それより、ついさっきプラネットメーカーの第一座標固定が行われたみたい…」
　飛鳥さんは、これまでの詳細を優子さんに伝えた。それを聞いた優子さんは、難しい顔つきで考え込んでしまう。そして、飛鳥さんを睨みつけるように呟いた。
『わたしがそっちに行くまで、真菜ちゃんをプラネットメーカーへ近づけないようにして…。それと…、リウムちゃん、いる？』
　優子さんの問いかけに、リウムちゃんが飛鳥さんの携帯端末を覗き込む。
『今晩の見回りは中止にして、真菜ちゃんから絶対に離れないこと！』
　リウムちゃんは、一瞬だけ考え込んだが、それでも素直に頷いた。
『まぁ～、そっちに行って詳しく調べてみないとなんとも言えない

んだけど…。真菜ちゃんが倒れた原因は、プラネットメーカーを起動させたことと、何か関係があるのかもしれないわね…』
優子さんは、頭を掻きながら唸り声を上げる。プラネットメーカーの時空石が影響しているのであれば、リウムちゃんの持つ力で遮断できるだろうということだった。
「わかったわ…。優子もなるべく早く、こっちに来てね…」
そう言って、飛鳥さんは通信を終了させる。
「さて…、真菜ちゃんを布団に寝かせるわよ♪」
飛鳥さんは、リウムちゃんを促すように歩き始めた。

目覚めると、いつのまにか朝となっていた。わたしは、枕元にある目覚まし時計を見て、慌ててベッドから飛び降りる。時針は、かなりまずい位置を指していた。
健介ちゃん、今日はどうしたんだろう…。制服に着替えながら、わたしはそんなことを考える。もちろん、あまり考えている余裕はなかった。わたしは、学園に向かうため、家から飛び出した。
学園までの通学路を全力で走る。だが、どういうわけか、自分以外の学生の姿はまったく見られない。どこか違和感を覚えながらも、わたしは学園へと急ぐことにした。
すると、前の方に健介ちゃんの後姿が見えてくる。わたしは、腕を大きく振り、健介ちゃんの名前を呼んだ。しかし、聞こえなかったのか、健介ちゃんが振り返ることはなかった。
そんな態度に小首を傾げていると、別の道から一人の女の子が現れる。女の子は、健介ちゃんの姿を見つけ、嬉しそうに駆け寄った。その女の子とは、わたしたちの後輩、鷲崎瑞希であった。
いつもケンカばかりしていた二人とは思えないほどの仲良さである。それに、なぜか瑞希は、高等部の制服を着ていた。
『マナ先輩が死んじゃってから、もう一年が経ったんだね～…』
突然、瑞希がそんなことを呟く。その言葉に、わたしは衝撃を受けた。瑞希は、いったい何を言っているのだろうか…。

『真菜のことは、もう忘れちまおうぜ…』
健介ちゃんがとても淋しそうな顔をする。
『人は、いつか死んでしまう…。だから、それまでに悔いが残らないよう、一生懸命生きればいいのさ♪』
健介ちゃんは、瑞希に優しく微笑みかけた。
そのとき、わたしはあることを悟ってしまう。ここはわたしが死んでしまった後の世界であること、これが夢の中の出来事であることを…。
空想なのか、あるいは未来を予知したものなのか、それはわたしにもわからない。ただ、時空のズレを修復する方法が見つからない限り、この光景が現実となってしまう可能性も考えられた。
健介ちゃんと瑞希は、まるで恋人同士のように振舞っている。そんな様子を見ていると、なぜかわたしの胸は、引き裂かれてしまうように痛むのだった。

『健介ちゃ～ん…。わたしを置いていかないで～～～…』
布団に寝かされていたわたしは、うなされながら寝言を呟く。
ちょうどそこに、優子さんと飛鳥さんがやってくる。二人は、わたしの情けない寝言を聞いて、おもわず苦笑してしまった。
優子さんは、病院にいるわたしの容態が安定したのを確認して、つい二時間ほど前に樹神神社へ到着していたようである。その足で、プラネットメーカーのあるプレハブ小屋へ行き、システムログのチェックを行う。そして、結果を飛鳥さんに伝えるため、この部屋にやって来たわけだ。
「結論から言うと、飛鳥の予想通り…。真菜ちゃんの容態が急変したのと、プラネットメーカーのメインシステムを起動させた時間が、ピタリと一致したわ…」
優子さんの言葉に、飛鳥さんは大きく項垂れてしまう。
「今回の一件は、プラネットメーカーの異常っていうより、真菜ちゃんの目覚めようとしている力が影響していると思うの…」

優子さんは、神妙な顔つきで、リウムちゃんと一緒に寝ているわたしを見つめた。
「信じられないけど、時空力だね…」
どうやら飛鳥さんも、同じことを考えていたようであった。
わたしの中で、時間や空間を操る力が目覚めようとしているらしい。その力が、プラネットメーカーの中核に納められている時空石と、激しく反応してしまったそうだ。
力のコントロールができないため、プラネットメーカーの暴走を引き起こしてしまい、時空のズレが生じてしまったというのだ。
「ま～、リウムちゃんが側にいるかぎり、ひとまずは安心かな…」
優子さんは、わたしに寄り添うように眠っているリウムちゃんを見る。リウムちゃんの持つ強い力が、プラネットメーカーから発生する時空力を遮断しているという。
「時空石の影響は、真菜ちゃんが必要以上にプラネットメーカーへ近づかなければ平気なんだけど…。魂と肉体が少し離れ過ぎたみたいね～」
その言葉に、飛鳥さんが小首を傾げる。すると、優子さんは、衝撃の内容を口にした。
「魂の崩壊が始まっている。このままじゃ、あまり長くもたないかもしれないわ…」
そう言って、優子さんは悲しそうにわたしから顔を背ける。
そんなやりとりを、わたしは夢とも現実ともつかない空間で、ぼんやりと聞いていた。

「お…、真…。起き…」
遠くの方から、健介ちゃんの声が聞こえてくる。その声は、とても懐かしく感じられるものであった。しかし、今はとても眠いのである。わたしは、適当な返事を返して、もう一眠りすることにした。
「って、いい加減に起きろ！」

そんなセリフと共に、わたしの頭に激痛が走った。
『いった～～～い！』
どうやら、健介ちゃんの拳骨が、わたしの頭に直撃したようである。わたしは、涙目になりながら、ゆっくりと起き上がった。
『う～ん…。健介ちゃん…？　おはよ～～～…』
大きなあくびをしながら、わたしは健介ちゃんに挨拶をする。
「おはようじゃねぇー！　まったく、いつまで寝てる気だ～？」
健介ちゃんは、呆れ口調で大きなため息をつく。お前の寝起きの悪さは一生直らなねぇな…、とでも言いたげであった。
『そんなこと言ったって～～～…って、あれ？』
そのとき、わたしは健介ちゃんと普通に会話できていることに気づいた。
『健介ちゃん…、わたしの声が聞こえるの？』
わたしは、またもや無意味な質問をしてしまう。健介ちゃんの反応を見れば、わかりきったことなのだ。
「おぅ♪　あの鳥人間に渡されたこの石のおかげで、お前の姿もばっちり見えてるぜ♪」
健介ちゃんは、首からかけているペンダントのような石を見せた。ちなみに鳥人間とは、優子さんのことである。
その石には異世界の能力が備わっているようで、微妙な時空のズレを修正して健介ちゃんの感覚に伝えているという。おそらく、これまで調べてきた情報を元に、優子さんが創ったものなのだろう。
「これで通信越しじゃなく、普通に喋れるよな！」
健介ちゃんは、嬉しそうに微笑みを浮かべた。
その言葉を聞いて、わたしはハッとしてしまう。起きたばかりのわたしは、髪の毛もボサボサで、とても情けない姿をしていたからだ。わたしは、身体を隠すようにタオルケットを引き寄せ、手にした枕で健介ちゃんを叩き始める。
『わかった。わかったから、あっちに行って！』
わたしは、枕を振り回すように、健介ちゃんを何度も叩く。恥ず

かしさのあまり、顔から火が出てしまいそうだった。
「って！　なにするんだ真菜！」
健介ちゃんは、その攻撃から逃れるように、部屋から飛び出してしまう。わたしの意外な反応に、かなり戸惑っているようだ。健介ちゃんにしてみれば、いつものように起こしているだけなのに、突然の反撃を受けてしまったわけだ。
「ったく…。二度寝して、飛鳥さんに迷惑をかけるんじゃねぇぞ！」
吐き捨てるような言葉を残し、健介ちゃんはスタスタと歩いていく。いつもと違うわたしの反応に、健介ちゃんはしきりに小首を傾げていた。
『び、びっくりした～～～…』
健介ちゃんの足音が聞こえなくなったのを確認して、わたしは大きく項垂れてしまう。健介ちゃんが起こしてくれるのは、いつものことである。それなのに、とてつもなく恥かしく感じてしまった。
もしかすると、わたしの中で健介ちゃんへの気持ちが変化してきたのかもしれない。だが、それがどういった意味を持つものなのか、今のわたしに理解することはできなかった。

身なりを整え、わたしとリウムちゃんは、台所のある母屋へと向かった。その途中、急激なめまいに襲われる。わたしは、壁へ寄り添うようにしゃがみ込んでしまった。
「マナ…お姉ちゃん…？」
リウムちゃんは、無表情にわたしの顔を覗き込んでくる。
「…ごはん？」
なぜ御飯なのかわからなかったが、わたしを心配してくれているようだ。
身体の変調は、昨晩のような激痛を伴うものではなく、酷いカゼにでもかかったときのようなダルさである。どこか熱っぽく感じるのも、気のせいではないのかもしれない。そんなことを考えていると、わたしは自分の身体に起こった異変に気づいてしまった。壁に

添えた右手が色を無くし、半透明となって消えようとしていたのだ。
『えっ！』
わたしは、右手を隠すように抱え込んでしまう。その異様な光景は、わたしの理解を超えたものであった。
「…お姉ちゃん？」
異様な気配を感じ取ったのか、リウムちゃんがわたしに問いかけてくる。わたしは、慌てて何でもないことを伝えた。そして、恐る恐る右手を確認してみる。わたしの右手は、普段と変わらない状態で、間違いなくそこにあった。
気のせいだったのだろうか…。いや、わたしの右手は、確かに消えようとしていた。
“魂の崩壊が始まっている。このままじゃ、あまり長くもたないかもしれないわ…”
突然、頭の中に優子さんの声が響いてくる。どこかで…、また、確実に聞いた言葉であった。
『魂が…、崩壊…？』
わたしは、昨晩の出来事を思い出す。全身を襲った激痛は、普通ではなかった。それに、消えかかった右手…。いったい、わたしの身体に、何が起ころうとしているのだろうか。わたしは、ゆっくりと近づいてくる死の恐怖に、身体の震えが止まらなくなってしまう。
そんなわたしの手を、リウムちゃんがギュッと握り締める。それだけで、不安に押し潰されようとしていたわたしの心は、落ち着きを取り戻してくるようだった。
わたしは、おもわずリウムちゃんを抱きしめてしまう。
「う？」
リウムちゃんは、きょとんとして、不思議そうに小首を傾げていた。

台所に到着すると、部室で調査しているはずの優子さんが、飛鳥さんの用意した朝食をとっていた。そういえば、健介ちゃんが優子

さんにペンダントを貰ったとか言っていたような気がする。
「飛鳥～、お茶まだ～～～？」
優子さんは、それが当然であるかのように催促をした。
「あんたは～、本当～に変わらないわね～…」
文句を言いながらも、飛鳥さんはお茶の入った湯のみをテーブルに置く。ただし、怒っているふうではなく、そんなやり取りをどこか楽しんでいるようであった。
「あら、真菜ちゃんにリウムちゃん。おはよ～♪」
わたしたちに気づいた飛鳥さんは、笑顔で挨拶をしてくれる。
『あっ、おはようございます！』
わたしは、慌てて挨拶を返した。彼女が人間神さまであるなんて、いまだに信じられないことである。
『え～っと…。優子さん、いらっしゃっていたんですね～…』
わたしは、お茶を飲んでいた優子さんに視線を向けた。
「真菜ちゃん、久しぶりね～♪」
優子さんは、にっこりと微笑んだ。
「どう？　元気してた？」
すごく普通な会話に、おもわず呆然としてしまう。はたして、魂だけの状態で、元気だといえるのだろうか…。
『は、はい…。いちおう、元気だと…思います…』
わたしが苦笑気味に答えると、優子さんは真剣な眼差しでこちらを窺う。
『あの～…』
優子さんの意味有りげな表情に、わたしは大汗をかいてしまった。体調の異変を、どこか見透かされているような気がしたからだ。
「真菜ちゃん…」
優子さんは、わたしをジッと見つめる。そして、とんでもない内容を口にした。
「朝御飯は、和食でいい？」
それを聞いた瞬間、わたしは豪快にずっこけてしまう。てっきり、

昨日倒れてしまったことを確認してくると思っていたのに、まったくの肩透かしであった。
「優子…。あんた、だんだんアリスに似てきたわね…」
飛鳥さんの呟きに、優子さんはなぜか項垂れてしまう。アリスさんとは、いったい誰のことなのだろう…。
「真菜ちゃん。はい、どうぞ♪」
飛鳥さんは、落ち込む優子さんに苦笑しながら、朝食をテーブルに並べてくれた。
『あ、ありがとう…ございます～…』
わたしは、椅子に手をかけながら、ヨロヨロと立ち上がった。用意された朝食は、とても美味しそうである。
『いただきま～す♪』
席に着いたわたしは、飛鳥さんに感謝しながら、箸とお茶碗を手にするのだった。
「ところで、真菜ちゃん…」
食後のお茶を飲んでいた優子さんが、不意に喋りかけてくる。
「昨日の夜、プラネットメーカーの第一座標固定がされたみたいだよ～…」
優子さんの話では、わたしがプレハブ小屋から出た直後、観察していた超新星が大爆発を起こしたという。その後、神倉先輩たちが候補地を探索し、星の創造にベストと思われる座標を固定したらしい。
『そうなんですか～？　じゃあ、ご飯をいただいてから、さっそく見に行かなくっちゃ♪』
プラネットメーカーが本格稼動したという情報は、わたしの心を弾ませるものであった。だが、続けられた優子さんの言葉に、わたしは愕然としてしまう。
「それはダメ…。っていうか、真菜ちゃんは小屋に近づくのも禁止ね」
優子さんのセリフに、わたしは絶句してしまった。しかし、衝撃

の内容は、それで終りではなかった。
「プラネットメーカーが稼動したことで、あなたの魂はとても不安定な状態になっているの…。だから、小屋に近づけば、あなたの寿命を削ってしまうことになるから…」
優子さんの真剣な表情に、わたしは息を呑んでしまう。優子さんは、とても冗談を言っているような様子ではなかった。

第六話　五つの仮設定

プラネットメーカーのあるプレハブ小屋に近づくことを禁止されたわたしは、することもなく部屋でぼぉ～っとしていた。こんな状態のわたしにできることはなかったが、それでもみんなと一緒に星を創ってみたかった。

どこか仲間外れにされてしまったような感じがしてしまう。もちろん、それはしかたのないことだし、みんなはわたしのために星を創ろうとしてくれているのだから、そう思うこと自体が間違いであった。

わたしがそんなことを考えていると、なぜか飛鳥さんがやってきた。

「あっ、いたいた♪」

飛鳥さんは、どこかに出かけるのか、肩からショルダーバッグを提げている。

「真菜ちゃん。いまからお買い物に行くわよ♪」

そう言って、飛鳥さんはわたしの腕を掴んだ。

『えっ？　お、お買い物…ですか？』

わたしは、飛鳥さんの言葉に狼狽してしまう。

飛鳥さんは、こう見えても現存する二神の一人である。そんな人間神さまが、普通にお買い物へ行くなんて、わたしには信じられなかった。だが、当の飛鳥さんは、そんなことを全く気にしていないようである。

「五人分の食材が必要でしょ～。それの買い出しだよ♪」

飛鳥さんの言葉に、わたしは納得をする。わたしたちがお世話になっているのだから、その分の食材は必要となって当然である。

「本当は優子に来てもらおうって思ってたんだけど…、なにかの調査に向かうとか言って逃げちゃったから」

飛鳥さんは、苦笑気味に呟く。神倉先輩たちはプラネットメーカ

ーにかかりっきりだから、手の空いていそうなわたしに荷物持ちが回ってきたようだ。
『わかりました。ぜひ、お供させてください』
このまま何もしないでいるよりはマシである。わたしは、飛鳥さんの買い物について行くことにした。

樹神神社を囲む森を抜け、わたしたちは金緑石の市街地へとやってきた。そこから少し歩けば、目的の商店街が見えてくるはずである。商店街にはわたしもよく訪れていたが、こちらの市街地からは初めてなので、いまいち道順がわからなかった。
飛鳥さんの先導で歩くわたしたちは、かなり人々の注目を集めていた。こんなところを人間神さまが歩いているわけだから、注目されないはずもない。だが、飛鳥さんはあまりメディアなどに姿を見せないので、彼女が人間神トパーズさまであることを知らない人が多いのではないだろうか。
それでは、なぜ注目されているかというと…。わたしたちの後ろを歩く、体長三～四メートルほどで三つ目をした巨大な獣の存在が理由だと思われた。
『あ、あの～…』
わたしは、大汗をかきながら飛鳥さんに問いかける。
『リウムちゃん…。やっぱり、まずいんじゃないでしょうか…』
リウムちゃんは、のっしりとした足取りで、わたしたちの後をついて来ていた。魔獣と呼ばれる姿をしたリウムちゃんは、まさに怪物か化け物のようである。そんなリウムちゃんが平然と街中を歩いているのだから、注目されるのは当たり前であった。
「あ～…、大丈夫だと思うよ～。みんな…、慣れてるから～♪」
飛鳥さんは、意外にあっさりと答える。
「それに、この辺りはリウムちゃんのテリトリーも同然だし」
言われてみれば、どこか脅えているようではあったが、悲鳴を上げたり逃げ惑う者は一人もいなかった。

どうやらリウムちゃんは、飛鳥さんが夏休みで金緑石にやってきたときから、魔獣姿でこの辺りをうろついていたらしい。それに、リウムちゃんは、かつて黒き魔獣と呼ばれ、この街の人々を災難から護っていたのだという。

『慣れている…ですか…』

わたしは、どう反応していいものか困ってしまう。すると、途中の公園で遊んでいた子供たちが、魔獣姿のリウムちゃんを見て大きな声を上げた。

「あぁ～！　リウムちゃんだ～♪」

子供たちは、ドタドタとリウムちゃんめがけて走ってくる。リウムちゃんは、ギョッとした顔をして身構えた。

「リウムちゃん、リウムちゃん♪」

子供たちの怒涛の攻撃が始まる。足にしがみ付き、尻尾にぶら下がり、背中によじ登る。牙を剥き出しにして威嚇するリウムちゃんだったが、子供たちには効果がなさそうだった。

「飛鳥お姉ちゃん、こんにちは～」

小さな女の子が飛鳥さんに挨拶をする。

「はい、こんにちは♪」

飛鳥さんは、女の子と視線を合わせるようにしゃがみ込み、にっこりと微笑んだ。

「みんな～。お姉ちゃんたち、お買い物に行くから、リウムちゃん放してあげてね～♪」

飛鳥さんが叫ぶと、子供たちは“は～い♪”っと元気な返事をした。開放されたリウムちゃんは、子供たちから逃げるように、民家の屋根へジャンプしてしまう。

リウムちゃんがその気になれば、子供たちなどひと飲みである。それでも、リウムちゃんは、子供たちの無邪気さに、どこか脅えているようであった。

飛鳥さんがお買い物している姿を、わたしは呆然と眺めていた。

「おばさん、お野菜くださいな～♪」
飛鳥さんは、元気良く八百屋さんに声をかける。すると、店の奥から、エプロンを着けたおばさんが現れた。
「おや、飛鳥ちゃん♪　久しぶりだね～、元気にしてたかい？」
おばさんは、嬉しそうに飛鳥さんの腕を叩く。
「どうだい？　仕事の方は順調かい？」
飛鳥さんが選んだ野菜を袋に入れながら、おばさんはそんなことを質問した。それを聞いて、飛鳥さんは、苦笑しながら指先で頬をかく。もの凄く普通な会話に、わたしは立ち尽くしてしまった。
「じゃあ、これでお願いします♪」
飛鳥さんは、お財布から一万円札を取り出す。現物のお金で取引きされることが珍しいこの時代、わたしも一万円なんて数年ぶりに見た気がした。
だが、おばさんも負けてはいない。奥にあるレジからお釣りを取り出し、飛鳥さんに手渡す。お釣りに含まれている二千円札なんて、まさにプレミア級のお宝であった。
そんなやり取りをしながら、飛鳥さんは次々にお買い物を済ませていく。買い物袋に入った大量の食材は、そのほとんどをリウムちゃんが口に咥えていた。
わたしたちは、駅前の広場で一休みすることにした。荷物を置いたリウムちゃんは、再び子供たちに囲まれてしまう。その人気ぶりは、驚くべきものだった。そんなリウムちゃんを見て、飛鳥さんは楽しそうに微笑んでいた。
「どう？　少しは気分転換になった？」
不意に、飛鳥さんが問いかけてくる。どうやらこのお買い物は、落ち込んでいるわたしを見かねて、飛鳥さんが計画してくれたもののようであった。
『はい…、おかげさまで…』
わたしは、曖昧な笑みを浮べる。飛鳥さんの心遣いは嬉しかったが、それより気になっていたことがあったからだ。

『あの～、飛鳥さん…』
わたしは、おもいきって、その疑問を口にしてみる。
『人間神って…、どういった存在なんですか…？』
これまでの飛鳥さんや周りの反応を見る限り、飛鳥さんが神さまだとはとても思えなかった。
「どういった？」
飛鳥さんは、空を見上げながら考え込んでしまう。
「う～ん…。あなたがイメージしている神さまと、それほど大差はないんだけど…」
返事を期待するわたしに、飛鳥さんは信じられないことを呟いた。
「わたしにしてみれば、人間神はお仕事…。職業かな～♪」
その言葉に、わたしはずっこけてしまう。彼女にしてみれば、人間神という存在も、ただの職業だというのだ。もちろん、世界を滅ぼす力や、奇跡を起こす力も持ち得ているらしい…。
『そ、それなのに、お仕事…なんですか～？』
わたしは、おもわず苦笑してしまう。飛鳥さんの考えは、いまいち理解できないものである。
確かに、飛鳥さんたちが人間神として即位するまでの神さまといえば、大自然を象徴したものや、神話上の超人、過去の偉人を神化したものがほとんどであった。しかし、飛鳥さんともう一人の人間神さまは、わたしもよく知らないのだが、約二十年前に起こった地球滅亡の危機を奇跡の力で救ったといわれている。
そんな御二人を、人々は生き神さまとして、崇め敬うようになったわけだ。
「でも、やってることと言えば、大したことないのよ～」
飛鳥さんは、人間神としての仕事のいくつかを教えてくれた。
まずは、地球の環境を監視すること。必要であれば、改善の指示を出したり、知恵や技術を与えたりする。また、宇宙や深海などの調査。そして、異世界からやってくる別種族の介入を防ぐこと…。
それらが、人間神としての役目だという。

大したことない…と言っているが、とてもそうだとは思えなかった。それに、人間神さまとは、思っていた以上にいろんなことをやっているようである。地球のどこかにある聖域から、わたしたちを見守っているだけかと思っていたが、それは間違いのようであった。

『じゃあ…、もう一つ、質問してもいいですか？』

わたしは、飛鳥さんの話を聞いて、再び疑問が浮かんでくる。つまらない内容なのだが、どうしても聞いておきたかった。

『人間神がお仕事っていうなら…、お給料はどこから貰ってるんですか？』

その言葉を聞いた飛鳥さんは、ベンチからずり落ちるようにずっこけてしまうのだった。

お買い物から戻ってくると、わたしに用意された部屋で、優子さんが何かの作業をしていた。ちょうどパソコンが置いてあった場所に、何かの機械を設置しているようである。その機械は、どこかプラネットメーカーの操作装置に似たものであった。

『優子さん…。何をしているんですか～？』

わたしは、優子さんの背後から、作業の様子を窺ってみる。すると、優子さんから不機嫌なオーラが立ち昇った。

『あ、あの～…』

わたしが意味もわからず苦笑していると、優子さんはジト目をしながら振り返る。

「お兄ちゃんのパソコン壊したの…、真菜ちゃん…？」

どうやら優子さんは、例のパソコンが壊れたことを怒っているようだ。わたしは、慌てて顔を横に振る。怒っている優子さんは、かなり恐かった。

「ゆう…お姉ちゃん…」

すると、少女姿のリウムちゃんが、ぼつの悪そうな表情で優子さんの袖を引く。

「…、ごめんなさい…」
リウムちゃんは、ペコリと頭を下げた。
『あっ、違うんです！　わたしが無茶なことを言っちゃったから…。だから、リウムちゃんは悪くありません！』
わたしは、慌てて言い訳をする。リウムちゃんが破壊したとはいえ、その原因を作ったのはわたしなのだ。リウムちゃんが怒られる必要は全く無い。
「はいはい…。わかったからこっちに来る！」
優子さんは、まったく聞く耳を持たないようである。わたしたちが近づくと、優子さんは、二人の頭に連続したチョップを放った。
『…ったーーーい！』
頭が割れてしまいそうな痛さに、わたしは涙目でしゃがみ込んでしまう。だが、リウムちゃんはというと、まったくもって平然としていた。
「はぁ～…。壊れちゃったのは哀しいけど…、許してあげるわ…」
優子さんは、心底がっかりしたように、大きなため息をつく。そして、気持ちを入れ替えたように、いつもの笑顔に戻った。

『で…。優子さんは、何をしているんですか～？』
わたしは、頭のコブをさすりながら、同じ質問をする。優子さんの設置している機械が、とても気になっていたからだ。
「あ～…、ちょっと待ってね～」
優子さんは、軽やかに機械の設定を施す。
「これで…、どうかな？」
優子さんがパネルの決定キーを押すと、空中にいくつものモニターが浮かび上がった。その中で一際大きなモニターには、宇宙空間が映し出されていた。
大量の塵やガス雲が渦巻いている光景は、わたしたちなんちゃらプラネットの部員にとって見慣れたものだった。
『これって、第一座標固定した宇宙空間ですよね…。もしかして、

みんなが使っているプラネットメーカーの…』
わたしがそんなことを呟くと、優子さんは嬉しそうに頷いた。
「せっかくの合宿なんだから、あなたも活動に参加しないとね♪」
優子さんが設置していた機械は、プラネットメーカーを監視したり、遠隔操作するための装置だという。このような装置が存在するなんて、一般のユーザーは知らないだろう。これは、新しいプラネットメーカーを作る上での開発機材だそうだ。
「これで、小屋に行かなくても、惑星創りの進行状況をチェックできるでしょ♪」
本体に近づかず観察できるため、わたしの魂にも影響は無いという。
「操作法は、プラネットメーカーを使ってるんだから、大体わかるよね♪」
そう言って、優子さんは、わたしに席を譲ってくれた。
『あ、ありがとうございます♪』
わたしは、心の底から感謝した。これで、みんなと同じことをしているという一体感が得られるだろう。わたしは、さっそくシステムの状況を確認することにした。
『すご〜い！　いったい何十倍なの？　こんな数値、いままで見たことが無い…』
わたしは、素直に驚きの声を上げてしまう。星の誕生に必要とされる各元素などの数値は、これまでとは比べものにならないほど高かった。
『これなら、絶対に星が誕生しますよね♪』
わたしは、確信を持って優子さんに問いかけた。すると、優子さんは、してやったりといった表情を見せる。
「ふっふ〜ん♪　数値レベルが高いだけで星ができるほど、プラネットメーカーは甘くないわよ〜」
優子さんが操作パネルに指を走らせると、別の画面が立ち上がった。

そこには、一つの惑星が表示されている。青色をした美しい惑星の姿に、わたしはおもわず目を見開いてしまった。
『ブループラネット！』
わたしの反応に、優子さんはにっこりと微笑む。
それは、プラネットメーカーを象徴する奇跡の惑星、ブループラネットであった。優子さんは、管理者権限を使って、過去のシステムログをロードしたようである。
しかし、今回の目的は、ブループラネットではなかったらしい。優子さんは、普通では絶対にできないはずの第二座標固定を解除して、プループラネットが公転する恒星に座標を合わせた。

モニターには、次々と恒星のデータが表示される。
ゲームが第二座標固定まで進行すると、恒星の数値データは見れなくなってしまうはずである。それをいとも簡単にやってしまうなど、さすがはシステム開発者だといえた。
「見て…。恒星が誕生する前の座標データよ」
優子さんは、システムログから数値データを呼び出し、画面に表示させる。そこに表示された数値は、なんちゃらプラネットが観察している座標の五分の一ほどしかなかった。
「わたしに言わせると、数値レベルが高すぎる…」
優子さんは、なんちゃらプラネットが観察している座標を拡大表示させる。
「この分だと、星が誕生する確率は…、五分五分ってとこかしら」
数値データをチェックしながら、優子さんはそんなことを呟いた。
『す…、すごーーーーい！』
わたしは、大きな声で叫んでしまう。
『半分の確率で、星ができるんですね！』
なんちゃらプラネットが創設してから十二年。これまでは、星が誕生する気配すらなかった。そのことを考えると、二分の一とは、まさに夢のような数字である。だが、優子さんは、苦笑しながらわ

たしの考えを否定した。
「半分の確率で、なにをしようが何も起こらないってことよ…」
優子さんの話では、二分の一の幸運を引き当てたとしても、最終的に恒星が誕生する確率は、わずか五パーセントほどだという。
「プラネットコンテストの開催日から考えて、候補地を替えるなら今しかないんじゃないかな～？」
優子さんは、決断を促すように、わたしの顔をジッと見つめた。
『う～ん…。いまの話は聞かなかったことにしますね～…』
わたしは、苦笑しながら頬をかく。
『たとえ星が出来なかったとしても、それがプラネットメーカーの面白いところなんですから』
上手く言えなかったが、なぜか優子さんは、とても嬉しそうな顔をしていた。
「あなたたち、本当にこのゲームを楽しんでくれているのね♪」
優子さんは、上機嫌に微笑んでいる。
「でも、今回の星創りは、単なるクラブ活動じゃない…。みんな、あなたのために、惑星を創ろうとしているのよ…」
そう…、神倉先輩たちは、なんとしても星を創ろうと必死なはずだ。
プラネット・マナ。それが今回のプロジェクト名である。みんなは、事故で入院しているわたしのために、プラネットコンテスト出場を目指している。星のできない可能性が少しでもあるのなら、早めに回避したほうがいいのかもしれない。
わたしは、両腕を組んで考え込んでしまった。優子さんがしてくれた話を、健介ちゃんに伝えたほうがいいのだろうか。だが、健介ちゃんに伝えたとしても、神倉先輩たちを納得させなければ意味はない。わたしは、どうすればいいのかわからなくなり、頭を抱え込んでしまうのだった。
「じゃ～、今回だけは手助けしてあげようかな～♪」
そう言って、優子さんは、ある機械を監視装置に接続する。それ

は、パーソナルカードを差し込むような、データ読取り装置であった。
「これは、次世代のプラネットメーカー用に開発した拡張装置の一つで～…」
優子さんは、さらに一枚のカードを取り出す。そのカードには、宇宙に流れる惑星の絵が描かれており、上の方には“遊星の大接近”という文字が書かれていた。
『カード…？』
わたしが意味もわからずに小首を傾げていると、優子さんは読取り装置にカードを差し込んだ。
『…え？』
その瞬間、プラネットメーカーの異常を知らせるアラーム音が鳴り響く。いくつかのモニターが立ち上がり、危険レベルAランクの遊星衝突が迫っていると知らされた。
「次のシステムから、宇宙現象の一部をカードによって再現させようかな～って思っているの」
優子さんは、たくさんのカードを広げて見せる。わたしは、あまりのことに苦笑するしかなかった。
恒星の重力から離れて飛んできた惑星は、わたしたちが観察している座標の中心を通過する。その凄まじい勢いに、固まっていた塵やガス雲は、かなり分散してしまった。
そのことで、座標の数値データが半分以下となる。優子さんによると、あとはみんなの努力次第で恒星が誕生するだろうということだ。

「い、いまのは…いったい…」
神倉先輩たちは、突然やって来た遊星を、ただ見守ることしかできなかった。観察中の座標を遊星が通過するなど、これまでに聞いたことのない事例である。もちろん、宇宙で起こる出来事としては

考えられたが、まさか自分たちが経験することになろうとは夢にも思わなかった。
「若葉！　数値はどうなっている！」
神倉先輩は、呆然としている若葉先輩に声をかける。ハッとした若葉先輩は、慌ててモニターの数値を確認した。
「惑星の通過前と比べて…、全ての数値が半分以下になっている…」
若葉先輩は、気落ちした声で呟く。せっかくベストと思われていた座標が台無しである。
「もぉ！　なんなのよあの星はーーー！」
瑞希が大きな声で叫ぶ。
「よし、あの星は“プラネット・健介”と名付けよう！」
瑞希は、大真面目な顔で、そんなことを提案した。
「プラネット・健介かどうかは置いといて」
健介ちゃんは、呆れ口調でため息をつく。
「昴先輩…。一度システムリセットをして、最初からやり直したほうがいいんじゃないですかね～？」
健介ちゃんの言葉に、みんなは息を呑む。システムリセットをすれば、全てのデータが消えてしまい、候補座標の検索から始めなければならないからだ。
確かに、超新星爆発というヒントがあるため、座標の検索も以前よりは簡単になった。しかし、超新星を見つけても、どれだけの期間で大爆発を起こすかわからない。下手をすれば、超新星爆発を待つだけで、数日間が経過してしまうことも考えられた。
さらに、超新星爆発が起こった後に、ブラックホールでも発生してしまったら目も当てられない。
「プラネットコンテストまでの期間を考えると、あまり迷っている時間はありませんよ…」
健介ちゃんは、優子さんと同じようなことを口にした。
「そうだな…。一度、仕切り直しをした方がいいかもしれないな…」
神倉先輩は、苦悶な表情で呟く。

「よし…。みんなが良ければ、一度システムリセットをしてみようと思う…。どうだろう？」
神倉先輩が決断したのだから、若葉先輩たちに異論はなかった。それに、樹神神社のプラネットメーカーを使い始めたのは、昨日のお昼過ぎからである。わずか一日のことだったため、神倉先輩たちも簡単に考えてしまったのだろう。
遊星の大接近は、優子さんが仕組んだ出来事である。そのことで恒星誕生の確率が上がったわけだが、事実を知らない健介ちゃんたちは、システムリセットしてしまうことに決めたようだ。
そのとき、健介ちゃんのカード端末に通信が入る。健介ちゃんが確認すると、それは、部屋にいるわたしからの通信であった。
健介ちゃんは、物陰へ隠れるようにして通話回線を開く。
「真菜…、どうした？」
みんなに聞こえるとマズイので、健介ちゃんは小声で囁いた。
『健介ちゃん、さっきプラネットメーカーで、惑星が通り過ぎたでしょ♪』
わたしの言葉に、健介ちゃんが驚く。この場にいなかったわたしが、プラネットメーカーで起こった出来事をなぜ知っているのか不思議に思ったのだろう。
わたしと健介ちゃんがそんなやり取りをしているとき、神倉先輩はプラネットメーカーのリセットボタンに手を添えようとしていた。
「じゃあ、システムリセットをするぞ…」
神倉先輩が覚悟を決めて呟くと、若葉先輩と瑞希もコクリと頷く。
「…せ～の！」
それを見た神倉先輩は、リセットボタンを一気に押し込もうとした。
「わぁあああ！　ストーーーーーーップ！」
突然、健介ちゃんの叫び声が響き渡る。みんな、その声に驚いて目を丸くしている。神倉先輩も、リセットボタンを押し込む寸前で、動きを止めていた。

「あ～…」
健介ちゃんは、みんなに注目されて大汗をかく。
「やっぱり…リセットするの…、止めにしませんか～？」
遊星通過の理由をわたしから聞いた健介ちゃんは、困った顔をしながら、さきほどとは正反対の意見を呟いた。当然、神倉先輩たちに怪訝な顔をされたのは、いうまでもない。

プレハブ小屋でのドタバタから一時間後、プラネットメーカーに変化が現れた。
非常に細かくではあるが、砂粒のようなものが出来始める。それは、塵が集まって出来たもので、星が誕生する前触れだといえた。おそらく、神倉先輩たちがプラネットメーカーを操作して、塵やガス雲などをうまく誘導しているのだろう。
わたしは、数値変動を確認しながら、メインモニターの渦巻きを見つめていた。ここから先は、わたしたちなんちゃらプラネットにとって全てが初めての出来事となるため、片時も目を放すことができなかった。
「もう少しすれば、もっと大きな塊がいくつか出来てくるはずだから…」
わたしと違い、優子さんはとてもリラックスしている。
「その中で一番大きな塊が、恒星になるはずだよ♪」
どうやら優子さんは、恒星の誕生を確信しているようだった。
システム開発者の優子さんが言っているのだから、恒星が誕生することはまず間違いないだろう。問題は、プラネットメーカーの最終目的である惑星が、どの場所に誕生するかであった。
プラネットメーカーでは、すでに誕生している惑星は、表示されないようになっている。現存する惑星を見つけ、自分たちで創ったと発表する不正が出来ないようにである。そのことは、これから誕生しようとしている惑星にも言えることだった。
惑星は、恒星が誕生するときに放つ、熱やエネルギーによって出

来るとされている。惑星の原形となる塊が表示されているのは、恒星が誕生してから僅か二十秒という短い時間だけであった。そのため、恒星が誕生してしまう前に、ある程度の候補地を見つけておかなければならなかった。

そんな候補地を、プラネットメーカーでは五つだけ仮設定することができる。ただし、惑星の誕生する座標を、ピンポイントで見つける必要はない。指定する直径五十万キロという広範囲の中に、惑星が誕生すればいいわけだ。

直径五十万キロという数字はなかなかピンとこないかもしれないが、地球の直径が約一万三千キロと考えると、その広さもイメージできるだろう。それでも、宇宙の広さから考えれば、かなり狭い範囲だといえる。さらに、範囲指定は平面ではなく、立体的にしなくてはならなかった。

仮設定をした中に惑星の原形が入っていれば、恒星誕生から二十秒が経過しても消えることはない。もし複数個入っていれば、その中からベストな原形を選択し、第二座標の固定をすればいい。しかし、範囲内に何も入っていなければゲームオーバーとなり、最初からやり直しとなってしまう。

この仮設定こそ、プラネットメーカー最大の山場といえる。それをクリアすることで、その先の惑星開発に進めるのだ。

誕生するであろう恒星の規模と、仮設定する座標の距離を考えれば、自ずと惑星の姿が想像できるだろう。恒星に近すぎれば岩だらけの惑星となり、遠すぎれば氷やガスに包まれた惑星となる。そんなことを考えると、地球やブループラネットは、まさに奇跡の星と言えた。

神倉先輩たちは、惑星が誕生するであろう座標の仮設定にかかろうとしていた。恒星の誕生する兆候が現れたため、今のうちに仮設定をしておく必要があるからだ。

「この大きな塊が星になるとして…」

神倉先輩は、モニターに映し出された星図の中心を指差す。
「これらの小さな集まりが、惑星になる可能性があるかな…」
続いて、いくつかの塵やガスの塊を指差した。
「そこで、五つの仮設定だけど…」
神倉先輩は、他の部員たちをゆっくりと見回す。
「自分を含めてみんなには一ヶ所ずつ、四つの座標指定をしてもらおうと思う」
なんちゃらプラネットの創設以来、はじめての恒星誕生である。神倉先輩は、今回のプロジェクトに参加したみんなで、座標候補を選んでもらおうと考えているようだ。
「でも、わたしたち四人が選んだとして、残りの一つはどうするの？」
若葉先輩は、小首を傾げながら問いかける。神倉先輩の答えは、もう一人の部員であるわたしが入院しているため、今回は四ヶ所を選ぶだけにしようということだった。
仮設定を四ヶ所だけにするということは、それだけ惑星が誕生する確率も低くなる。そんな確率を削ってまでも、わたしの分を残してくれるという。若葉先輩や瑞希も、その提案に納得してくれたようである。しかし、健介ちゃんだけが、唸るように考え込んでしまった。
「昴先輩…」
健介ちゃんは、覚悟を決めたように呟く。
「真菜の仮設定分ですが…、オレに任せてくれませんか？」
健介ちゃんは、真剣な表情で訴える。それを聞いた神倉先輩たちは、健介ちゃんの意図がわからず、お互いの顔を見合わせるしかなかった。

第七話　恒星誕生と惑星の原形

プレハブ小屋のプラネットメーカーでは、今まさに、究極の選択がされようとしていた。

惑星が誕生するであろう座標を予想して、あらかじめ五つの候補を選んでおく。その座標候補に惑星の原形が入っていないと、プラネットメーカーはゲームオーバーとなってしまう。恒星創りに成功したユーザーたちの約八割は、座標の仮設定に失敗してゲームオーバーになっているらしい。

そのため、ユーザーたちの間では、この選択がプラネットメーカー最大の難関といわれていた。

プラネットメーカーの状況を表示しているモニターに、無作為に回転している小さなリングが浮かび上がった。どうやら、神倉先輩たちが、座標の仮設定を始めたようである。

「恒星から、およそ一億五千万キロの距離ってとこかしら…」

優子さんは、一つ目の仮設定を見て、意味ありげに呟いた。

「誕生する恒星の規模が太陽と同じと予想して、ほぼ地球のある位置関係だね…」

あまりにも基本に忠実な座標指定だったためか、優子さんは、どこか面白くなさそうである。

「う～ん…、もう少しおもいきった設定にしても良いと思うんだけど…」

優子さんはそんなことを言っているが、神倉先輩たちにとっては、少しでも惑星誕生の可能性を考えての選択だったのだろう。

『じゃ～、優子さんなら、どの辺りを選びますか～？』

システム開発者としての意見は、とても興味深いものである。わたしは、おもいきって優子さんに聞いてみることにした。

「わたしなら…」

優子さんは、広大な空間を見回す。

「ずばり、ここかな♪」
優子さんが指差したのは、塵やガスが固まった場所ではなく、辺りに何もない真っ暗な空間であった。
『え～っと…』
わたしは、反応に困って苦笑してしまう。しかし、優子さんは、冗談を言っているようではなかった。優子さんは、わたしの戸惑う様子を見て、にっこりと微笑んだ。
『でも…、どういう理由でこの座標…なんですか？』
わたしが問いかけると、優子さんは選んだ座標の少し内側を指差す。そこには、惑星の誕生しそうな塵やガス雲が集まっていた。
そのとき、二つ目のリングが浮かび上がる。仮設定のリングは、一つ目と同じように、塵やガス雲が中心となるように指定されていた。それを見た優子さんは、“やっぱり”と、小声で呟く。
「はじめての仮設定だからしかたないと思うけど…」
優子さんは、恒星の位置から二つ目のリングまでを、指でなぞるようにする。
「恒星誕生の瞬間、結構な爆風が発生してしまって、惑星の元となる塊が外側にずれちゃうことがあるの…」
優子さんが選んだ座標は、そんな移動を考えての指定だったようだ。
はじめて恒星誕生を成功させたユーザーは、ほぼ間違いなく仮設定に失敗するらしい。それは、爆風によって移動する距離を考えずに、仮設定をしてしまうからであった。
『結構な距離を移動するんですね…』
わたしは、仮設定のリングを眺めながら、驚きの声を上げてしまう。恒星誕生から二十秒でこの距離を移動するわけだから、まさしく弾き飛ばされてしまう感じなのだろう。ちなみに、この移動範囲は、恒星に近いほど、大きくなるということだった。
「まぁ～、自分の直感を信じた方が、綺麗な惑星になるんだけどね～♪」

優子さんは、苦笑しながら頭をかく。移動距離を考えて指定しても問題はないが、気に入った惑星ができるのは、いつも直感で指定した範囲であるという。
続いて、三つ目のリングが浮かび上がる。やはりというべきか、先に選択された二つのリングと同じような設定であった。
『あと二つ…。このままじゃ、仮設定に失敗するんですよね…』
わたしは、優子さんに問いかけてみる。優子さんの答えは、基本的な座標を選択した場合でも、まれに成功する場合があるということだった。ただし、その確率は、限りなくゼロに近いらしい。
すると、四つ目のリングが浮かび上がった。全てのリングは、恒星の誕生するであろう位置から、一億キロ～二億キロの範囲内に収まっている。神倉先輩たちは、地球やブループラネットのような、水の惑星を創ろうとしているのかもしれない。
「さてと…、ラストの仮設定をどこにするのか…。これは見物ね～…」
優子さんは、身を乗り出すようにして、モニターを見つめる。だが、数分経っても最後のリングは現れなかった。

なかなかリングが現れないため、わたしたちが不思議に思っていると、プレハブ小屋にいるはずの健介ちゃんがやって来た。
「真菜！」
健介ちゃんは、急いでわたしたちの元に駆け寄ってくる。
「いま、座標の仮設定をしているところなんだが…」
説明しようとした健介ちゃんは、わたしたちの見ていたモニターに気づいて驚いてしまう。モニターには、プレハブ小屋にあるプラネットメーカーの様子が映し出されていたからだ。
「女の子の部屋へ勝手に入ってくるなんて…。健介ちゃんのエッチ～♪」
優子さんは、両手で身体を隠すように、健介ちゃんから距離を取った。優子さんは、なぜかとても楽しそうである。

「ど、どうしてこっちにもモニターが…。っていうより、あんたは学園に帰ったんじゃなかったのかーーー！」
健介ちゃんは、ここに優子さんがいることを怒り出す。“こんなところで遊んでいないで、さっさと事故の原因を調べに行け！”とでも言いたいのだろう。
『け、健介ちゃん、落ち着いて！』
わたしは、慌てて健介ちゃんの腕をしっかりと抱える。いまにも、優子さんに飛びかかりそうだったからだ。すると、健介ちゃんは、驚いたようにわたしを見つめた。
『…はっ！』
わたしは、顔を真っ赤にさせながら、健介ちゃんの腕を解放する。健介ちゃんは、やや複雑な表情で、大きなため息をついた。
「で～、真菜ちゃんに何か用があるんじゃないの？」
そんなやり取りに飽きてしまったのか、優子さんは、部屋にやって来た理由を問いかけた。
「そうだった…」
健介ちゃんは、思い出したかのように、わたしをジッと見つめる。
「真菜。第二座標候補なんだが、なんちゃらプラネットの部員が一人づつ指定することになった」
突然のことだったため、わたしには健介ちゃんの言いたいことがわからなかった。健介ちゃんは、やれやれといったふうに、再び大きなため息をつく。
「最後の仮設定は、おまえが決めるんだよ…」
そう言って、健介ちゃんは、モニターに浮かぶ宇宙空間を指差した。
『えぇーーーー！』
予想していなかった重要な役回りに、わたしは、おもわず叫んでしまう。
『そ、そんな…。だって、わたしは意識不明で入院していることになってるんだよ～！』

意識が無いのに、座標の指定ができるはずもない。健介ちゃんは、そのことをわかっているのだろうか…。
「そんなの、適当な理由を付けておけばいいんだよ！」
健介ちゃんは、わたしのお母さんが選んだことにしようと考えているらしい。
「で～？　どの辺りにするんだ？」
どうやら、わたしが五つ目を選ぶことは、すでに決定しているようであった。
困ったわたしは、意見を貰おうと、優子さんに視線を向けてみる。優子さんは、余計な情報を喋り過ぎたと、自己嫌悪に陥っている最中だった。
「はぁ～…。そういうことなら仕方ない…」
優子さんは、パネルを操作して、座標の選択画面を呼び出す。
「真菜ちゃん。決めるのなら、確実に惑星が誕生する座標を選びなさいよ♪」
気持ちを入れ替えた優子さんは、にっこりと微笑んで、わたしに席を譲ってくれた。
『が、がんばります…』
わたしは、覚悟を決めて、操作パネルに向い合った。
候補地をチェックしながら、次々に座標を拡大表示させていく。いくつもの塵やガス雲をチェックするが、どれも良いように思うし、全てが悪いようにも思えてしまう。優子さんの口ぶりからすると、他の四つは失敗している可能性が高いので、全てがこの選択にかかっているといえた。わたしは、そんなプレッシャーに耐えられなくなり、頭を抱え込んでしまうのだった。
「真菜…。あまり時間が無いんだぞ…」
健介ちゃんが急かすように呟く。その言葉を聞いて、わたしはさらに焦ってしまう。
「だから、直感でいいのよ…」
そんなわたしを見兼ねたのか、優子さんが耳元で優しく囁いてく

れた。
　わたしは、優子さんが教えてくれた仮設定の選び方を思い出す。惑星の元と思われる塵やガス雲より、外側に座標を指定する。ただし、綺麗な惑星が誕生するのは、自分の直感で選んだ座標だという。
『よしっ！』
　わたしは、拡大させていた画面を元に戻し、星図全体が表示されるようにする。そして、何も考えないように、ぼぉ～っと宇宙空間を眺めてみた。
　しばらくすると、ある座標に蒼い光が走ったのを感じた。慌てて視線をやるが、そこは黒い闇が広がっているだけの空間である。また、近くには惑星の元となる塵やガス雲も見当たらない。そんな、惑星ができる可能性のまったく無いような座標に、わたしの心は激しく惹かれるのだった。
『じゃ～、ここにします…』
　わたしがその箇所を指差すと、健介ちゃんは見事にずっこける。
「って、なに考えてるんだ！」
　健介ちゃんは、よろめきながら身体を起こす。
「そんな何も無い座標を選んで、惑星ができるわけないだろ！」
　健介ちゃんには、わたしの選択が、どうにも納得できないようである。
　言いたいことはよくわかるし、わたしだってここに惑星ができるとは思えない。だが、どうしてもこの座標が気になってしまうのだ。
「はいはい。真菜ちゃんが選んだんだから、文句はないでしょ～♪」
　優子さんは、健介ちゃんを無視して、わたしの選んだ座標を固定してしまおうと操作する。わたしは、止めようと暴れる健介ちゃんを押さえるのに必死だった。
「へぇ～…、これが見えたのか…」
　優子さんは、わたしたちに聞こえないような小声で、そんなことを呟く。何も無い座標をジッと眺め、嬉しそうに仮設定を完了させてしまった。

プレハブ小屋でシステムを監視していた神倉先輩たちは、その変化に驚きを隠せないでいた。何の操作もしていないのに、五つ目の仮設定リングが出現したからだ。

リングが現れたのは、健介ちゃんが病院に向って、しばらく経ってのことである。別の部屋に監視システムがあることを知らない神倉先輩たちは、まさに、狐につままれた思いだっただろう。

「マナ先輩が来てくれたんですよ♪」

瑞希のぶっ飛んだ言葉に、神倉先輩たちは苦笑してしまう。意識不明で入院しているわたしが、魂だけの状態で仮設定をしに来たとでもいうのだろうか…。しかし、たとえシステムのバグだとしても、瑞希はそう思いたかったようだ。

「それにしても、なんとも言えない座標ね～」

若葉先輩は、複雑そうな表情で呟く。恒星の誕生するであろう場所から一万九千キロと、距離こそ他の仮設定と似通っているが、そこは周りに何も無い闇の空間であった。

「あ…。昴、遠野くんに“早く戻って来なさい”って連絡しといてね♪」

若葉先輩は、神倉先輩にそんなことをお願いする。健介ちゃんが別棟にあるわたしの部屋に来ているなど、みんなは夢にも思っていないだろう。

「ああ、そうだな」

神倉先輩は、携帯端末を手に取り、健介ちゃんとの通信回線を繋ごうとする。そのとき、プレハブ小屋の扉が開かれ、健介ちゃんが入ってきた。

「あ…れ、健介…？」

先輩たちは、驚きのあまり口をパクパクさせてしまう。

「あ～…。やっぱり、おばさんに頼める状況じゃないかな～…って」

健介ちゃんは、適当な言い訳をして、病院へ行かなかったことを

誤魔化した。
「…、役立たず…」
呆れた瑞希は、ジト目で健介ちゃんを睨む。
健介ちゃんは、バグによって最後の仮設定がされてしまったことを神倉先輩から告げられる。理由を知っている健介ちゃんは、苦笑しながら頭を掻くしかなかった。

神倉先輩たちは、飛鳥さんが用意してくれた夕食を交代でいただく。そして、日付が変わろうとしたころ、観察していた座標に変化が現れた。
宇宙空間に広がっていた塵やガス雲が、回転するスピードを増して圧縮されていく。このとき雲の中では、冷え切っていたガスが、圧縮することで高温となっていた。
オレンジ色の球状となったガスは、ゆっくりと時間をかけながら、さらに回転を増して周りの塵などを内側へと吸い込んでいく。内部の圧力に耐えられなくなったガスは、中心から一気に噴出される。それは、まるで球体から細い棒が飛び出しているようであった。
球体は、さらに回転するスピードを速め、一瞬だけ真っ黒となる。
次の瞬間…、球体に眩しい光が灯されて、青白く輝く恒星が誕生した。
「やった…。ついにやったぞーーー！」
神倉先輩が雄叫びを上げる。これほど興奮している神倉先輩は、非常に珍しい。それほど、恒星誕生が嬉しかったのだろう。
「惑星は…、惑星はどうなったの！」
若葉先輩は、慌てて仮設定した座標を確認する。惑星の原形が表示されているのは、恒星誕生から二十秒と短いため、それほどのんびりとしていられなかった。
「えっ…、あれっ？」
一つ目のリングをチェックしていた若葉先輩は、惑星の元となる岩石群が見当たらないことに焦りはじめる。

「他の座標を調べるぞ！」
神倉先輩の顔色は、かなり悪いように思えた。若葉先輩がチェックした座標は、惑星ができるであろう最有力の仮設定であったからだ。
「いやな流れだな…」
そんな悪い予感が当ったのか、四つの仮設定に惑星の原形は一つも入っていなかった。
事実に落胆する神倉先輩たち…。恒星が誕生してから二十秒という、惑星の原形が表示されている時間も過ぎてしまった。
「せっかく、恒星の誕生まで成功したのに…」
健介ちゃんは、悔しそうに歯を食い縛る。いったい、何がいけなかったというのだろうか…。
「ねぇ…」
落胆している先輩たちに、瑞希が声をかける。
「マナ先輩が指定した座標は…調べないの？」
瑞希が言っているのは、何の操作もしていないのに現れた、五つ目の仮設定のことである。実際は、わたしが直感で選んだ座標なのだが、それを知らない神倉先輩たちはシステムのバグと思っているようであった。そんなバグによって選択された座標に、惑星の原形があるはずもない…。神倉先輩たちは、そう考えていた。
「そう…だな。もしかしたら、惑星が誕生しているかもしれないな♪」
神倉先輩は、気を取り直して、五つ目の仮設定を画面に表示させてみる。僅かな期待に胸を膨らませながら、仮設定の座標を食い入るように見つめた。だが、その期待は落胆へと変わってしまう。
「やっぱり…、何もない…」
結果を報告する神倉先輩の声は、微かに震えていた。
「ゲームオーバー…、だね」
瑞希がひとりごとのように呟く。神倉先輩たちは、項垂れるように落ち込んでしまった。

なんちゃらプラネットとしては、初めてとなる恒星の誕生…。しかし、最大の難関といわれる第二座標の仮設定に失敗してしまったようだ。
初めて恒星を誕生させたのだから、クラブ活動としてはまずまずといったところなのかもしれない。ただ今回の活動は、意識不明で入院しているわたしのために、プラネットコンテストを目指したものである。恒星を完成させておいて、惑星創りに失敗してしまったのだから、神倉先輩たちの悔しさは計り知れないだろう。
「なんにしても、今日はここまでにしよう…」
神倉先輩は、活動の終了を宣言する。
「明日の午後から情報を集めて…、それが終ったらシステムリセットする…ことに…」
神倉先輩は、おもわず言葉を詰まらせてしまう。その瞳には、薄っすらと涙が浮かんでいた。

恒星誕生の様子は、わたしの部屋に設置されているモニターでも、確認することができた。
星の誕生する映像を見たのは初めてだったが、とても印象に残るものであった。夜空に浮かぶ星々は、全て、このように誕生したのだろうか…。などと、感動していたのはほんの僅かな間だけである。わたしは、プレハブ小屋にいた神倉先輩たちと同じように、仮設定の座標を確認した。
『はぁ～…。やっぱり、失敗ですね…』
わたしは、惑星の元となる岩石群が見つからなかったことに落胆してしまう。ただ、仮設定が失敗する可能性も聞かされていたので、それほどショックではなかった。
『あ～ぁ…、これでゲームオーバーか～』
わたしは、気落ちした心を隠すように苦笑する。
「…って、何をそんなに落ち込んでるの？」
わたしの様子を見て、優子さんは不思議そうな顔をしていた。優

子さんにとっては、失敗の一つや二つ、大した問題ではないのかもしれない。
そこに、プレハブ小屋から戻ってきた健介ちゃんが現れた。健介ちゃんは、遠慮気味に座布団へ腰を下ろす。そして、仮設定に失敗したこと、明日からの活動計画についてを知らせてくれた。
「と、いうわけだ…。調査が終わったら、また候補地探しから始めないと…」
健介ちゃんは、疲れた様子で項垂れてしまう。この二日間の作業が全て無駄になって、かなり気落ちしているようだ。
「ねぇ…」
突然、優子さんが健介ちゃんに声をかける。
「作業を再開するのって、明日のお昼からなんだよね～…」
健介ちゃんが頷くと、優子さんは、何かを考え込むように腕を組む。
「ま～、半日あれば、変化も現れるかな～…」
優子さんの呟きに、わたしたちは小首を傾げる。すると、優子さんは、苦笑しながら衝撃の事実を伝えた。
「なに勘違いしてるか知らないけど…。仮設定…、ちゃんと成功してるわよ」
その言葉に、わたしたちは唖然としてしまう。成功…と言われても、五つの仮設定には、惑星の原形は見当たらなかった。それが、どうして成功だというのだろうか…。
「失敗なら、ちゃんと“ゲームオーバー”って表示されるでしょ～。あなたたち、マニュアル読んだことある？」
優子さんは、からかうように微笑んだ。
『たしかに、ゲームオーバーにはなってないみたいだけど…』
わたしは、あらためて五つの仮設定を確認してみる。だが、どんなにチェックしてみても、惑星の影すら見当たらなかった。
「また、いい加減なことを言ってるんじゃねぇだろ～な…。この鳥人間…」

健介ちゃんは、呆れ口調でそんなことを呟く。当然、優子さんに聞こえないわけがなかった。
優子さんは、無言で立ち上がり、廊下側の障子をゆっくり開く。
「リウムちゃ～ん♪」
優子さんが庭に向かって声をかけると、暗闇に大きな赤い光が三つ浮かび上がった。
真っ赤な三つ目は、ジッと健介ちゃんを睨み付ける。健介ちゃんは、そのプレッシャーに恐怖してしまい、ガタガタと震え出した。
「ちょっ！　な、何をする気だ！」
気丈にも、健介ちゃんは、優子さんを怒鳴りつける。
「ふふふっ…。どちらの立場が上か…、はっきりさせといた方がいいでしょ～」
優子さんは、悪魔のような微笑を浮べ、健介ちゃんを指差した。
「リウムちゃん、やっちゃいなさい♪」
その瞬間、庭の暗闇から現れた大きな“口”が、健介ちゃんめがけて迫ってきた。
まさに、一瞬の出来事であった。健介ちゃんは、部屋へ突っ込むようにした魔獣姿のリウムちゃんに、頭から咥えられる。健介ちゃんの身体は、腰から上がリウムちゃんの口に、すっぽりと収まっていた。
健介ちゃんは、苦しそうに両足をばたつかせる。
『わあぁーっ！　リウムちゃん、ダメーーー！』
慌てたわたしは、リウムちゃんの牙に手をかけて、口を開けようと努力する。もちろん、それでリウムちゃんの口が開くはずもない。
「はむはむはむ♪」
リウムちゃんの額にある真っ赤な石から、のん気で楽しそうな声が聞こえてくる。リウムちゃんの口はしっかりと塞がれており、わたしにはどうすることもできなかった。
そうこうしていると、健介ちゃんの足が激しく痙攣を始める。しばらくすると、健介ちゃんの身体がぐったりとして、とうとう動か

なくなってしまった。
『いやぁ～！　健介ちゃん、死なないで～～～！』
わたしは、涙目で必死に呼びかける。隣りで嬉しそうに笑っている優子さんの姿が、とても印象的であった。

翌朝…、いつになく早起きをしたわたしは、プラネットメーカーの監視装置を起動させてみた。もちろん、昨晩に聞いた優子さんの話が、気になっていたからである。
モニターが立ち上がり、観察している宇宙空間が映し出される。誕生した恒星を中心にして、無作為に回転する五つのリングが浮かんでいた。
『やっぱり、ゲームオーバーにはなっていないみたいだけど…』
わたしは、五つの仮設定を順番に確認する。だが、昨日と同じように、星の欠片すら見つからなかった。
優子さんによると、仮設定は確実に成功しているらしい。しかし、惑星の原形となる岩石群が見つからない以上、失敗したと言えるのではないだろうか。わたしは、わけもわからずに、大きなため息をついてしまう。
そこに、飛鳥さんが朝食を運んできてくれた。
「朝から熱心だね～♪」
飛鳥さんは、座卓に朝食を並べながらにっこりと微笑む。
昨日、わたしが夕食をいただいていると、神倉先輩たちと鉢合せになってしまった。当然、神倉先輩たちにわたしの姿は見えないのだが、それでもかなり焦ってしまう。そのため、いらぬ騒ぎを起こさないためにも、今日からこの部屋で食事をいただくことになったのだ。
『飛鳥さん、すいません～…』
わたしは、慌てて頭を下げた。忘れがちなのだが、彼女はこの世界の神さまである。そんな神さまに賄ってもらい、そのうち罰が当

るのではないかと心配になってしまう。
『リウムちゃ～ん、ご飯だって～～～』
わたしが庭に向かって声をかけると、巨大な漆黒の獣が現れた。次の瞬間、獣はみるみる小さな女の子の姿となり、テクテクとした足取りでこちらにやって来る。女の子は、それが当然であるかのように、わたしの膝の上に座った。
「リウムちゃん、よっぽどあなたが気に入ったのね～」
飛鳥さんは、苦笑しながら手招きをする。
「でも、リウムちゃんはこっち♪」
飛鳥さんに注意されて、リウムちゃんは、渋々向いの席に座るのだった。
『いただきます♪』
わたしは、手を合わせて、飛鳥さんに感謝しながら御飯を食べ始めた。
「ねぇ、ちょっとプラネットメーカー見せてもらうね～♪」
そう言って、飛鳥さんは、慣れた手つきでパネルを操作する。
「はは～ん。優子が言ってたのは、これか～～～」
飛鳥さんは、五つの仮設定のうち、わたしが選んだ座標を見てそんなことを呟いた。
『……』
わたしは、食べる手を休めて飛鳥さんに視線を向ける。
『そこに、何かあるんですか？』
どうやら、飛鳥さんにも何かが見えているようである。
「いや～…。ばらしちゃうと、また優子が怒るだろうし…」
飛鳥さんは、困ったように指先で頬をかく。超新星爆発の一件も、後から色々と言われたらしい。
おそらく、飛鳥さんに頼み込めば、いまプラネットメーカーがどうなっているかを教えてくれるだろう。だけど、優子さんや飛鳥さんのようなガイド的存在に頼ってばかりでは、惑星が誕生しても自分たちだけで創ったとは言い切れない。たとえ簡単な内容でも、自

分たちで見つけないと意味は無いからだ。
わたしは、少しでも早く作業を再開させようと、食べるスピードを速めた。

そのころプレハブ小屋では、食事を終えた健介ちゃんが、プラネットメーカーの作業を再開していた。本来ならば午後から調査を始めるはずだったが、健介ちゃんも優子さんの言葉が気になってしまったのだろう。健介ちゃんは、わたしと同じように、仮設定の再確認を始めていた。
「ったく…、何があるって言うんだ？」
健介ちゃんは、頭を掻きながら呟く。仮設定をする前まであった塵やガス雲は、恒星誕生の爆風により、見事に吹き飛ばされていた。
「ま～、あいつはこのゲームを作った人間なんだから、オレたちの気づかない何かが見えてるんだろうけど…」
健介ちゃんの言うあいつとは、もちろん優子さんのことである。健介ちゃんは、優子さんをかなり意識しているようで、いまだ名前で呼ぼうとはしなかった。
健介ちゃんがそんな愚痴をこぼしていると、突然、小屋の扉が開かれた。
「あ…れ…？　健介が先に来てるなんて、今日は大雪かな～？」
現れた瑞希が、眩しそうに空を見上げる。季節は夏であるため、当然、雪など降るはずはない。
「あのな～…」
健介ちゃんが大きなため息をつく。
「それより、瑞希こそ早いじゃないか…」
健介ちゃんは、席についた瑞希に声をかけた。
「マナ先輩のためにも、休んでなんかいられないわよ！」
瑞希は、拳をギュッと握りしめる。その瞬間、瑞希の背後に炎が立ち昇った…ように見えた。
「はぁ～…、なに張り切ってるんだか…」

健介ちゃんは、やれやれとため息をつく。
「そんなの、真っ先に来てる健介だけには、言われたくないわね！」
瑞希は、なぜか頬を赤くさせながらそっぽを向く。
「それより…、データの収集だよね…」
赤い顔を見られたくないのか、瑞希は慌てて作業に入ろうとした。
「あ～…。データ収集をする前に、もう一度、仮設定の座標確認だ…」
健介ちゃんの言葉に、瑞希は驚きの表情を浮かべる。
「ほら…、例のプラネットメーカー開発者に聞いたんだが、仮設定に失敗したら、ゲームオーバーが表示されるはずなんだよ…」
健介ちゃんは、優子さんに聞いた内容を、簡潔に説明した。
「仮設定に成功しているって言っても…」
瑞希は、五つの仮設定を順番に表示させる。だが、健介ちゃんと同じように、何も発見することができなかった。
「簡単に諦めるなよな～…」
健介ちゃんが大きなため息をつく。
「昨日と何か変わったところがあるはずなんだ。そいつさえ見つけられたら…」
健介ちゃんは、モニターを食入るように見つめた。
「変わったところね～…。なにも変わらなかった場所ならあるんだけど…」
そう言って、瑞希はわたしが選択した座標を表示させる。
「ほら…。ここの空間って、やけに暗くない？」
モニターを覗き込む健介ちゃんにドキドキしながら、瑞希はリングの中央付近を指差した。瑞希によれば、恒星が誕生する以前から、この座標は暗かったという。
「確かに…」
健介ちゃんは、モニターいっぱいに、真っ暗な空間を表示してみた。
「なっ！　これってガス雲…なのか？」

健介ちゃんが驚きの声を上げる。ただの空間と思われていた座標には、雲のようなガスが発生していて、光を遮っていたからだ。
どうやら、広範囲に渡って高密度のガスが発生しており、システムのスキャン機能でも内部の様子を確認することができなかったようだ。
「えっ、なにあれ！」
瑞希は、何かに気づいて、大きな声を上げる。ガス雲の間から、僅かに岩の欠片のようなものが見えたのだ。
「ちょっと、あれって！」
瑞希が健介ちゃんの腕を取って引き寄せる。すると、ガス雲の一部が晴れ、大きな岩の塊が現れた。
漆黒の雲は、霧が晴れるように薄れていき、隠していたものをあらわにする。そこには、大小様々な岩の塊が、円を描くように渦を巻いていた。
「やった…。オレたち、ついにやったんだーーー！」
惑星の原形を発見した健介ちゃんは、感動のあまり、瑞希を背中から抱きしめてしまう。瑞希は、惑星を見つけた嬉しさと、健介ちゃんに抱きしめられた恥かしさで、顔が真っ赤になっていた。

惑星の元となる岩石群は、別棟のわたしにも確認することができた。
『本当に…あった…』
わたしは、驚きのあまり目を丸くする。優子さんの言葉を信じていなかったわけではなかったが、あのようなガス雲に岩石群が隠れているとは思わなかった。
『優子さん…。あの雲はいったい…？』
わたしは、隣りでモニターを見ていた優子さんに問いかけてみる。優子さんは、その問いかけに、なぜか困ったような顔をした。
「ごめ～ん、わたしにもわかんないのよ～…」
苦笑しながら呟く優子さんに、わたしは豪快にずっこけてしまう。

仮にもこのゲームを作った当人だというのに、わからないことがあるのだろうか。
「ま～、わたしはあの物質を、ダークマターって呼んでいるけどね～」
その言葉に、わたしは飛び上がるほど驚いてしまった。
ダークマターとは、宇宙にたくさん存在すると考えられているが、光も電波も発することがないため、可視光線や赤外線、エックス線などではまったく見ることのできない謎の暗黒物質のことである。質量からその存在が予測される物質で、正体はよくわからないが、宇宙の質量の約九十～九十五パーセントはダークマターが占めていると考えられている。存在は確認できないが、そこに無ければ、宇宙の始まり“ビッグバン”が説明できないという、なんとも不思議な物質であった。
『じゃあ、これがダークマターなんですか！』
わたしは、モニターに映るガス雲を凝視する。しかし、どう見てもただのガス雲にしか思えない。すると、優子さんは、とんでもないことを呟いた。
「あ…、いや～～～…。わたしが勝手にそう呼んでるだけで～…」
優子さんは、苦笑気味に頭を掻く。どうやら、優子さんにも、その正体がわかっていないらしい。わたしは、全身の力が抜けたように項垂れてしまった。
優子さんは、仮設定のときに、ダークマターが集まってできたガス雲に気づいていたのだろう。わたしが見た蒼い光は、もしかすると、ガス雲から現れた岩石群の一部だったのかもしれない。
惑星の元となる岩石群は、ダークマターの雲に包まれて、恒星誕生の爆風から護られたという。だが、その爆風により、今度はガス雲が薄まって、岩石群が姿を現したようだ。
「なんにしても、惑星の仮設定が成功して、良かったじゃない♪」
優子さんは、誤魔化すように大きな声で笑う。
こんな適当な人が作ったプラネットメーカーを使っていて、ほん

とうに大丈夫なのだろうか…。わたしは、心の底からそんなことを思うのだった。

第八話　真菜の生命力

惑星の原形が発見されたことは、直ちに神倉先輩たちにも知らされた。

予期していなかった事態に、先輩たちは喜びの声を上げる。偶然とはいえ、プラネットメーカー最大の難関をクリアしたからだ。

なんちゃらプラネットのみんなは、気持ちも新たに惑星創りを再開させた。第二座標には、当然、わたしが選んだ座標が設定される。そのことで、プラネットメーカーの中核であるガラスケースに、選択された宇宙空間が映し出された。

ガラスケースには、まだ惑星とはいえない大小様々な岩石が浮かんでいる。この後、それぞれが集まるように大きくなり、重力が強くなるにつれて周りに漂う塵をも引き寄せる。そして、ある一定の大きさに達すると、内部に熱が発生して、原始の惑星が誕生するという。

それから、このゲームのメインといえる、惑星の環境設定が待っていた。

環境を整え、時には地震や噴火のような災害を起こし、根本的な惑星改善を行う。八月末に開催されるプラネットコンテストでは、誕生させた惑星の美しさが競われることになるわけだ。

と…、ここまでが惑星創りを順調に進められた場合のお話…。恒星が誕生してから三週間。わたしたちの観察している岩石群は、まったく変化が現れていなかった。

「マナ…お姉ちゃん…。……、無事？」

枕元では、少女姿をしたリウムちゃんが、わたしの様子を心配そうに見つめている。

このところ、わたしは身体の調子が悪く、寝込むことが多くなっていた。いや、身体は入院しているわけだから、魂の調子が悪いというべきだろうか…。とにかく、一日の大半を布団の中で過ごして

いた。
『う～ん…、無事じゃないかも…』
わたしは、大きく咳き込んでしまう。そのたびに、全身の筋肉が軋むような痛さを感じた。
『わたし…、このまま死んじゃうのかな～…』
最近、そんな悲観的な考えがよく浮かぶようになっていた。日に日に体力が落ちていくのを、実感することができるのだ。
“魂の崩壊が始まっている。このままじゃ、あまり長くもたないかもしれないわ…”
合宿を始めたころに聞いた優子さんの言葉が思い出される。わたしの魂は、もはや限界を迎えようとしているのかもしれなかった。
「真菜ちゃん、お粥作ったんだけど、食べられる～？」
土鍋を持って現れた飛鳥さんは、わたしの意思を確認する。とても食べる気にはなれなかったので、わたしは小さく首を振ってお断りした。
「少しでも食べておいた方がいいんだけど…」
飛鳥さんは、困ったようにため息をつく。ただ、飛鳥さんにも、わたしがそんな状態ではないことはわかっているようだ。
飛鳥さんは、わたしの額に置かれた濡れタオルを交換してくれる。
『あ、ありがとう…ございます～…』
ここに来てからというものの、飛鳥さんには世話をかけっぱなしである。わたしは、こんな自分を情けなく思えてしまうのだった。
『あ…、そうだ…。飛鳥さん、プラネットメーカーの様子は…、どうなってますか～…』
わたしは、身体を起こすことも辛かったため、飛鳥さんに聞いてみる。飛鳥さんは、監視モニターに近づき、システムの状況を確認した。
「え～っと…、特に変化は見られないかな～…」
飛鳥さんは、申し訳なさそうに呟く。
第二座標固定までは順調に進んだというのに、肝心の惑星が誕生

しない。このままでは、プラネットコンテストまでに、納得のいった惑星が創れない可能性も出てくる。
惑星創りも、これまでと同じではなく、なんらかの変化が必要なのかもしれなかった。

ちょうどそのころ、優子さんは、わたしが入院している病院を訪れていた。
最近の優子さんは、樹神神社と病室の往復を続けている。時空のズレによる、わたしの身体と魂の変化を調べているようだった。
それにしても、いくらプラネットメーカーの開発者だからといって、わたしたちと同い年にしか見えない優子さんが病状を調べていることは異様なことである。普通なら、付き添っているお母さんに、追い出されてしまっても仕方のないことだろう。しかし、入院費用や生活費を優子さんが負担してくれているようで、何の問題もなかったようである。
それに、わたしには知らされていなかったことだが、優子さんとお母さんは、学生時代の同級生で親友同士だったらしい。さらに、二人は、人間神に覚醒する前の飛鳥さんとも同級生だったという。
「う〜ん…、ヤバイかも…」
わたしの身体を見ていた優子さんは、その衰弱状態に、思わず本音を呟いてしまった。
「って、冗談じゃないわよ！」
途端にお母さんの顔色が一変する。
「あなたが大丈夫だって言ったから、いままで黙ってたんですからねーっ！」
お母さんは、優子さんの首を掴み、ぐらぐらと揺らす。どうやらお母さんは、わたしの陥っている状況を、優子さんから聞いていたようである。
「麻衣、まぁ落ち着きなさいって…」
優子さんは、お母さんの両肩に手を置く。

「死とは哀しいものではないの…。むしろ、この世で修行を終えて、あの世に迎えられる…」
しかし、優子さんの言い訳は、お母さんの睨み付けるような視線で中断されるのだった。

「ねぇ、優子…」
少し落ち着いたお母さんは、眠っているわたしの顔を見つめながら呟く。
「セリアに連絡することってできないの？　魂が別の次元に飛ばされるなんて、どう考えてもあっち側の現象でしょ…」
お母さんは、異世界にいる友人の名前を口にする。だが、優子さんの反応は否定的であった。
「今回の現象は、本当に特殊なの…。たとえセリアでも、どうすることもできないでしょうね…」
優子さんの言葉に、お母さんは項垂れてしまう。優子さんは、意識の戻らないわたしの頭を、優しく撫でてくれた。
優子さんは、プラネットメーカーが暴走した原因を、とっくの昔に解明していた。
今回の事故では、時間や空間を操作するプラネットメーカーと、わたしが潜在的に持っている時空力が互いに影響し合って引き起こされた。いや…、徐々に目覚めようとしていた時空力を、わたしが制御できなかったのが原因だという。
わたしがプラネットメーカーに近づいたことで、中核に収められた時空石が激しく反応することになる。プラネットメーカーは過去にあった実際の宇宙空間をガラスケース内へ表示させているわけだが、時空石の暴走によって、一瞬で数億年の時間が経過したそうだ。
そんな変化に耐え切れず、プラネットメーカーには膨大なエネルギーが蓄積される。そして、リセットボタンを押したことで、時空軸をズラしてしまうほどの大爆発を起こした。優子さんによると、もしリセットボタンを押さないでいたら、数分もしないうちにこの

街は、闇に呑み込まれて消滅していただろうという。
「時空力を扱える者は本当に珍しくって、長い歴史の中でも三人しか現れていないの…」
優子さんは、四人目であるわたしの顔を、あらためて見つめる。ただの女の子であるわたしには、時空力など過ぎた力であった。
「真菜ちゃんの時空力は、コレで封じることができるけど…」
優子さんは、懐から一つの指輪を取り出す。それは、ショウさんの形見ともいえる、時空力を封じるための指輪であった。
「時空のズレを修復してからじゃないと、渡しても意味はないしね〜」
優子さんは、困ったように苦笑してしまう。異世界でも特殊な力とされる時空力は、優子さんにもわからない部分が多いそうだ。
「真菜ちゃん自身が時空力をコントロールできるようになれば一番いいんだけど…」
とは言っても、独学でコントロールできるようになるのは、まず不可能と思われる。つまりは、わたしの命が尽きるまでに、なんとしても時空のズレを修復する方法を見つけなければならないのだ。
「優子…、いまはあなただけが頼りなんだからね！」
お母さんは、優子さんの手をしっかりと握った。傍目から見ると親子のようなのだが、これで同い年だというのだから驚きである。
お母さんの訴えに、優子さんは真剣な表情をする。次の瞬間、優子さんは苦笑しながら、指先で頬を掻いた。
「ごめ〜〜〜ん。ちょっと無理かも〜♪」
優子さんの言葉に、お母さんは唖然としてしまう。無理という言葉だけで片付けられてしまったらたまらない。お母さんは、優子さんの頭に、おもいっきり手刀を振り下ろした。
「痛っ…。ま〜、精一杯努力いたします〜…」
優子さんは、涙目でそんなことを呟く。優子さんを睨み付けるようにしているお母さんは、かなり怒っているようである。
「真菜…」

お母さんは、わたしの手を両手で握りしめ、祈るように俯いてしまう。その姿は、間違いなく、我が子を心配する母親のものであった。

草木も眠る丑三つ時…。わたしの部屋に、何者かが侵入してきた。息を殺し、気配を消しながら近づき、寝ているわたしの顔をそっと覗き込む。

「なるほど…。この子を中心に、時空の歪みが発生しているみたいですね…」

わたしの姿が見えているのだろうか…。何者かは、確認するように呟いた。

そんな声に、わたしは目を覚ます。薄明かりに照らされたのは、美しい顔立ちをした青年の姿であった。青年は、わたしの視線に気づき、にっこりと微笑みを返す。

『……』

目の前の出来事が夢なのか幻なのか、わたしは理解に苦しんでしまう。

『え～っと…、こんばんは～…』

我ながら、なんとも間抜けなことを口にしたものである。青年は、苦笑しながら頭を掻いた。

「あやしい者ではありません…。ボクは、ある御方の命を受け…」

青年が事情を説明しようとしたとき、障子が勢いよく開かれ、隣の部屋で寝ていた優子さんが飛び込んできた。

優子さんは、青年めがけて長剣を振り下ろす。しかし、青年は後ろに飛んで、それを難無くかわした。

「こんな時間に女の子の部屋へ忍び込むぐらいなんだから、殺されても文句はないでしょうね…」

優子さんは、牽制しながら青年を睨みつける。その威圧感に、わたしはおもわず息を呑んでしまう。いままでの優子さんとは、まる

で別人のようだったからだ。
「ちょっ、待ってください！　ボクです、アクア…」
その瞬間、青年は、庭から現れた魔獣姿のリウムちゃんに、頭から咥えられてしまった。
「んーーーっ！」
青年は、苦しそうに足をじたばたとさせる。リウムちゃんは、青年を庭へと引きずり出し、何度も何度も地面に叩きつけた。
青年の言葉に納得したのか、優子さんは長剣を収めて苦笑する。どうやら、青年の正体に思い当るふしがあったようだ。
『な…、なんなの？』
わたしは、そんな出来事に、ただ呆然とするしかなかった。

母屋にある居間では、優子さんと飛鳥さんが謎の青年を前に苦笑していた。
「それにしても、まさかアクアちゃんだったとは…」
優子さんは、久しぶりに再会した青年を、あらためて見つめる。青年は、二十年前とは比べものにならないほど成長していた。
彼の名は、光竜アクアマリン。こう見えても、人間ではなく、異世界の竜族だという。
「あの頃のアクアちゃんは、おもいっきり如月家のペットだったからね～♪」
飛鳥さんは、懐かしむように微笑む。本当のアクアさんは獣のような姿をしており、二十年前にはペットのように扱われていたそうだ。
「人型がその姿なんだから、犬型の方も成長しているの？」
飛鳥さんが問いかけると、アクアさんは涙目で項垂れてしまった。
「い、犬じゃありませんよ～…」
アクアさんは、シクシクと涙を流す。
「で～…。アクアちゃんは、なにしに来たわけ？」
優子さんは、アクアさんの真意を問いかける。おそらく、わたし

の様子を見に来たのだろうが、アクアさんの口から直接聞きたかったようだ。
「それに…。精霊界から人間界へ来ることは、禁止されてるんだけどな～」
飛鳥さんは、アクアさんを睨みつけるように呟く。飛鳥さんが人間神として即位した後、異世界との交流は基本的に禁止されていた。もっとも、異世界の住人で人間界の存在を知っているのは、ごく一部の人々だけのようなのだが・・・。
「……、時空の歪みを感知しました…」
アクアさんは、用件を簡潔に呟く。その途端、優子さんの顔色が変わった。
「どうやら、時空力によるトラブルが起こったようですね…」
アクアさんは、優子さんをジト目で見つめる。優子さんは、あさっての方角に視線を向けてしまった。
「はて…、なんのことでしょう～」
優子さんは、大汗をかきながら、とぼけようとする。
「え～っと…。ちょっとした事故なら…、起こっちゃった…かな～」
指で頬を掻く優子さんに、アクアさんは大きなため息をついた。
「そのことで、ある御方が説明を求めておられます…」
アクアさんは、やっと本題を切り出した。優子さんたちが小首を傾げていると、アクアさんがその御方の名前を呟く。
「ラルドさまです…」
それを聞いた優子さんたちは、飛び上がるように驚いた。
「ラ、ラルドさまって…。姿を晦ませていたんじゃなかったの？」
飛鳥さんの問いかけに、アクアさんはこくりと頷いた。ラルドさまは、いまから二十年前、ショウさんとアリスさんの死に責任を感じて、精霊界から姿を消していたという。
「時空力のことですから、時空神であらせられるラルドさまが対応するのは当然かと…」
アクアさんが素っ気無く呟くと、優子さんは彼の後ろに回り込ん

で、頭を抱えるように首を絞めた。
「へぇ～…。アクアちゃんは、噂に聞く“絶対無敵で非常識”なヤツに、わたしを売ろうっていうの？」
優子さんは、キリキリとアクアさんの首を絞め上げた。
「“究極の若作り”…が…抜けていますよ…」
アクアさんは、苦しそうな声で、優子さんの説明を追加する。アクアさんは、現在、その究極の若作りな方に、弟子入りしているそうだ。
「わかったわよ…。行けばいいんでしょ…」
優子さんは、アクアさんを解放して、やれやれといった表情をする。
「それに…。これで真菜ちゃんの状況を、なんとかできるかもしれないしね～」
優子さんは、ゆっくりと立ち上がり、“後は任せる”といったような視線を飛鳥さんに向けた。
「では、魔界に出発しましょう♪」
その言葉に、優子さんがずっこける。
「ラルドさまは、現在、魔界にいらっしゃいます」
アクアさんは、優子さんの疑問を先読みするように答えた。
「ま～、この際、どこだっていいわ～…」
優子さんは、頭痛を感じたように、こめかみに手を添える。目的地は、てっきり精霊界だと思っていたようだ。
「それで、一度光風町に戻るんだよね…」
なぜか、優子さんは、言いにくそうに呟く。当然の質問であるためアクアさんが小首を傾げていると、優子さんは苦笑しながら頭を掻いた。
「できれば、背中に乗せてってもらいたいな～…なんて♪」
その言葉に、今度はアクアさんがずっこけてしまった。
「って…。優子さん、もしかして、まだ飛べないんですか～！」
アクアさんが問いかけると、優子さんは恥ずかしそうに頷く。優

子さんは、五十メートルほど浮かぶことは出来るそうだが、鳥のように飛び回ることはできないらしい。
「飛べない天空族って、貴重ですよね…」
アクアさんは、まるで天然記念物を見るような視線を向けて、大きなため息をついた。

日の出前…。優子さんたちは、薄暗い境内に集まっていた。これから、異世界へと繋がるゲート“こだまの樹”がある光風町に向うらしい。
「さて…、光竜の姿に戻るのも久しぶりですね…」
そう呟いた瞬間、アクアさんは、美しい純白の竜へと姿を変えた。光竜となったアクアさんは、魔獣姿のリウムちゃんを二回りほど大きくした姿をしており、頭に二本の立派な角、背中には大きな翼を持っていた。
竜といっても、伝説に残る爬虫類のような形ではなく、見た目は細めの大型犬をさらに巨大化させたような姿であった。魔獣に変身しているリウムちゃんとは違い、アクアさんはこちらが本来の姿であるという。
「でかっ！」
飛鳥さんは、おもわず驚きの声を上げてしまう。しかし、アクアさんがさらに成長すると、全長が五十メートルほどになるそうだ。
「もう、アクアちゃんなんて、言ってられないかもね～♪」
飛鳥さんは、アクアさんの成長を喜ぶように微笑んだ。
優子さんは、ふわりと浮き上がり、光竜となったアクアさんの首元に着地する。跨ぐように座った優子さんは、身体に純白の毛を巻き付けて固定させた。
「それじゃあ、ちょっと行ってくるね…」
優子さんは、見上げている飛鳥さんに声をかける。
「それと…。あの子たちに、これ以上、ヒントを与えないこと！」
優子さんがビシッと指差すと、飛鳥さんは苦笑しながら固まった。

「はいはい…」
飛鳥さんは、困ったように返事をする。
「あなたも、時空の歪を修復する方法、ちゃんと見つけてきなさいよ。このままじゃ真菜ちゃんの命…、長くてあと数週間程度でしょうから…」
飛鳥さんの言葉に、優子さんはしっかりと頷く。そして、アクアさんの首筋に手を添える。すると、アクアさんは、翼を大きく広げて大空へと舞い上がった。
飛鳥さんは、飛び去るアクアさんたちをジッと見つめる。ちょうど、東の空が、明るくなり始めたところだった。
そのとき、小石の転がるような音が聞こえた。
「えっ！」
飛鳥さんは、慌てて振り返る。そこには、仮眠を取ろうとプレハブ小屋から戻ってきた健介ちゃんが呆然と立ち尽くしていた。
「け、健介くん…」
飛鳥さんは、真っ青な顔をしている健介ちゃんに声をかける。
健介ちゃんは、ヨロヨロと歩き出し、飛鳥さんの両肩を掴んで大きく叫んだ。
「真菜…。真菜の命があと数週間って！」
健介ちゃんは、飛鳥さんに縋りつく。よほどショックだったのか、足に力が入っていないようである。
ガタガタと震え、涙を流す健介ちゃん…。飛鳥さんは、そんな健介ちゃんを落ち着かせるように、そっと抱きしめるのだった。

優子さんが魔界へと旅立って、すでに三日が経過していた。
プラネットメーカーは、相変わらず沈黙を決め込んでおり、惑星の誕生する気配すら無かった。プラネットコンテストへの出場申込みが数日後に迫っていることを考えると、なんとしても今の環境で惑星を誕生させなければならない。そのことが、健介ちゃんを苛立

たせていた。
「だぁーーーっ！　さっさと惑星になりやがれっ！」
健介ちゃんは、拳を机に叩き付ける。その大きな音に、隣に座っていた瑞希が飛び上がって驚いた。わたしの寿命を聞いた所為か、このところの健介ちゃんは、イライラしっぱなしである。苛立ちによって痛みは無いのだろうが、健介ちゃんの拳には薄っすらと血が滲んでいた。
「健介…、少し落ち着け」
神倉先輩は、健介ちゃんの態度を嗜める。神倉先輩の言葉に、健介ちゃんはチッっと舌打ちをした。
「ちょっと…、頭を冷やしてきます…」
声を絞り出すように呟くと、健介ちゃんは、プレハブ小屋を出て行ってしまった。
「……。反抗期かしら？」
若葉先輩は、なんとも的外れなことを呟く。その問いかけに、神倉先輩はおもわず苦笑してしまう。
「健介…」
瑞希は、健介ちゃんの態度がなんとなく気になっていた。健介ちゃんの態度は、まるで、部室での事故当時、わたしを心配していた瑞希自身のようだったからだ。
「惑星創りが進まないから、気が立っているんだろうな…」
神倉先輩は、中央に設置してあるガラスケースを見て、大きなため息をつく。健介ちゃんだけでなく、神倉先輩たちも、少なからず落胆しているようであった。

プレハブ小屋を出た健介ちゃんは、わたしの寝ている部屋にやってきていた。
『……』
健介ちゃんに気づいたわたしは、視線を向けて笑顔を浮かべる。
わたしは、もはや起き上がることもできないほど衰弱していた。

「真菜…」
健介ちゃんは、わたしの寝ている枕元で胡坐をかく。
「真菜～、大丈夫か～？」
健介ちゃんは、心配そうにわたしの顔を覗き込む。わたしの顔は、まさに病人のようだっただろう。
なんとか返事をしようとしたのだが、声すら出てこない。わたしは、布団の中から手を出し、健介ちゃんに伸ばした。健介ちゃんは、わたしの手を握り締め、祈るように目を閉じる。手には健介ちゃんの体温が感じられ、なぜか幸せな気分となるのだった。
「もうすぐ惑星が誕生するから、それまでには元気になっていないとな…」
健介ちゃんは、嘘の報告をする。今のわたしでは監視システムをチェックすることはできないが、惑星創りの進行状況は飛鳥さんから聞かされていた。
しかし、そんな健介ちゃんの心遣いは、とても嬉しく思える。健介ちゃんは、病気で沈みがちなわたしを、元気付けようとしてくれているのだ。
「あら、健介くん…。また来ているの～？」
そこに、わたしの着替えを持ってきてくれた飛鳥さんが現れる。最近の健介ちゃんは、暇を見つけては、この部屋にやって来ていた。
「あ、飛鳥…さん…」
健介ちゃんは、少しだけ複雑そうな表情をする。優子さんが魔界へと向ったあの日、健介ちゃんはわたしの状態について説明され、やり場の無い怒りの言葉を飛鳥さんにぶつけていたらしい。飛鳥さんは少しも気にしていないようだったが、健介ちゃんにしてみれば、どこか気まずいのだろう。
「あの～、飛鳥さん…。優…、あの鳥人間は…、まだ戻らないんですか？」
健介ちゃんが言う鳥人間とは、もちろん優子さんのことである。最悪の出会いの所為か、はたまた照れているだけなのか、優子さん

を名前で呼ぶのにいまだ抵抗があるようだ。
「優子？　そうね～、戻ってくる連絡は無いわね～…」
飛鳥さんは、困ったように呟く。魔界でトラブルに巻き込まれ、なにか戻れない理由でもできたのだろうか…。
「そうですか…」
健介ちゃんは、大きなため息をついた。わたしの寿命が尽きようとしているいま、一刻でも早く優子さんには戻ってきてもらわなければならない。
「ところで…、健介くん」
飛鳥さんは、視線を健介ちゃんとわたしの間に向ける。飛鳥さんの視線を追ってみると、わたしの手が健介ちゃんに握り締められたままだった。
「いやぁ～、ラブラブですね～♪」
飛鳥さんは、からかうように手の平を顔へ向けて上下させる。途端に健介ちゃんは、真っ赤な顔でわたしの手を離した。
「うふふっ、からかっちゃってごめんなさい♪」
飛鳥さんは、楽しそうに微笑む。
「これからも真菜ちゃんの手を握ってあげてね♪　それが、真菜ちゃんのためにもなるんだから…」
急に真面目な顔となる飛鳥さん。飛鳥さんによると、お互いの手を通じて、生命力のようなものがやり取りされているという。
「いや…。一緒にお布団へ入って、身体を密着させたほうが効果あるかしら…」
飛鳥さんは、考え込むようにとんでもないことを呟いた。
『さ、さすがに、そこまでは～…』
わたしは、おもわず苦笑してしまう。すると、なぜか健介ちゃんは、落ち込んだように項垂れてしまった。
飛鳥さんの言うように、健介ちゃんに手を握られて、少しだけ元気が出たように思えた。生命力のやり取りは、強い信頼で結ばれている者たちが行うと効果的である。身内や恋人同士…、お互いを思

う力が強いほど、より効果が表れるという。
「な、なら、昴先輩に手を握ってもらえば、一発で治るんじゃないか～？」
わたしの気持ちを知ってか、健介ちゃんはそんなことを呟く。だが、神倉先輩に手を握られたのなら、ドキドキして逆効果となってしまう気がした。
『健介ちゃん…』
わたしは、頬を赤くしながら、健介ちゃんをジッと見つめる。
『また…、手を握りに来てね…』
そう言って微笑むと、健介ちゃんはまるで漫画のように顔が真っ赤となった。
「お、おぅ！　ま…、任せとけ！」
健介ちゃんは、照れたようにそっぽを向く。
「はいはい、いちゃつくのはそれぐらいにして…。ほら…、真菜ちゃんはこれから身体を拭くんだから、あなたはあっちに行ってなさい！」
飛鳥さんは、手を上下に振って健介ちゃんを追い出そうとする。健介ちゃんは、しぶしぶ立ち上がり、部屋を出ようとした。
「健介くん…」
障子を閉めようとした健介ちゃんは、飛鳥さんの声に振り返る。
「覗いちゃダメだからね～♪」
とんでもないことを言う飛鳥さんに、健介ちゃんは見事にずっこけてしまった。
部屋を出た健介ちゃんは、プレハブ小屋に戻らず、境内で空を見上げていた。真夏の陽射しが照りつけており、健介ちゃんの額から滝のような汗が流れ落ちている。それでも健介ちゃんは、無意味に空を見上げ続けていた。
そのとき、健介ちゃんのカード端末に通信が入る。健介ちゃんが端末を手に取ると、それはプレハブ小屋にいる瑞希からの通信であった。

『健介！　すぐに来て！』
瑞希は、とても慌てているようである。健介ちゃんが何事かと問いかけると、瑞希は弾んだ声で返事をした。
『星が…、岩石群が固まりはじめた！』
それを聞いた健介ちゃんは、急いで小屋へと走り出す。惑星が完成すれば、きっと真菜は助かる…。そんな奇跡を信じるように、健介ちゃんは惑星創りの最終調整へと向った。

ガラスケースの中にある岩石群は、渦を巻いて徐々に集まり、大きな球体となった。
しばらくすると、重力によって内部に熱が発生し、球体全体がオレンジ色に光り始める。まるで、球体の表面が溶岩で覆われているように見えた。この状態が治まれば、念願の惑星誕生となるわけだ。
「星はどうなった！」
プレハブ小屋に健介ちゃんが飛び込んでくる。健介ちゃんは、中央にあるガラスケースに近づき、食い入るようにオレンジ色の球体を見つめた。
「よっしゃーーー！」
健介ちゃんは、感情が弾けたようにガッツポーズをする。よほど嬉しかったのだろう、健介ちゃんの目じりには、涙が浮かんでいた。
「ふぅ～…。これで、もう大丈夫だな…」
神倉先輩は、大きく息をはく。どんな姿に成長するとしても、惑星が誕生することは間違いないことである。
「昴…」
若葉先輩が右手を上げると、神倉先輩はそれに答えてハイタッチをする。
「やったね♪」
若葉先輩は、神倉先輩の手を握り締めて、にっこりと微笑んだ。
神倉先輩も、にっこりと微笑みを返す。なんちゃらプラネットが創設されてから約十二年…、始めてとなる惑星誕生の瞬間であった。

第九話　プラネット・マナ

オレンジ色に輝く球体は、冷えるにしたがって黒い箇所が目立つようになってきた。惑星を覆う地面が出来始めたのだろう。

時々、吸収されなかった岩石が惑星に衝突するのを確認することができた。衝突した箇所は、まるで水面に波紋が広がるような現象を起こす。そして、固まりかけた地面を砕き、表面を再びオレンジ色に染めた。

しばらくすると、球体全体が薄黒い色となる。地殻の完成…。つまり、惑星の誕生である。

惑星が誕生しても、宇宙空間に漂う岩石が降り注ぐことには変わりない。ただし、先ほどまでとは違い、岩石の衝突した後には丸いクレーターが出来上がり、惑星の表面に粉塵を撒き散らしていた。

「環境を整えるにしても、岩の衝突が無くならないと危ないよな～…」

健介ちゃんは、引っ切り無しに降り注ぐ流星の数に、呆れた顔でため息をつく。惑星と同じ軌道上のゴミが無くなるまで、この現象は続くと予想された。

「そうだな…。惑星が安定するまで、ボクたちにできることはないから…」

神倉先輩は、時間を確認して、ある結論を出した。

「今日の観察は、これで終りにしよう。明日は、九時から再開することにします」

誰も反対することなく、神倉先輩の提案は受け入れられた。惑星が誕生しているのだから、それほど付きっきりにならなくても平気なのだ。

しかし、この後、大きな事件が起こることになる。それは、惑星の完成に関わる、とても重要な出来事であった。

みんなが寝静まった深夜のことである。突然、プラネットメーカーに警戒音が鳴り響いた。
メインモニターには、危険レベルBランクの“彗星の接近”が表示される。次々に小さなモニターが浮かび上がり、彗星の情報が映し出された。彗星の軌道が計算され、惑星に衝突する可能性が八十パーセントを超えることが確認される。そのため、危険レベルはBランクからAランクへと訂正された。
このような天体現象は、この場に神倉先輩たちがいたとしても、回避できるものではない。それでも、何らかの対策が検討できたはずである。だが、いまとなっては全てが遅すぎであった。
数分後、惑星と巨大彗星は、表面を掠めるように衝突した。
直撃していれば惑星は粉々になっていたはずであったが、表面を掠めるように激突したため砕け散ることはなかったようだ。しかし、惑星の表面は深く抉れ、その衝撃により内部のマントルが激しく活動を再開する。惑星は、再びオレンジ色の球体となる。そして、やって来た彗星はというと、惑星の重力に捕まり、その流れを止めていた。
彗星の表面には、大量の氷が層を重ねていたようで、砕け散らばったものが惑星の重力に引き寄せられる。氷は熱によって蒸発し、雨を降らせて惑星の地表を冷やしていく。惑星は、彗星の激突で巻き上がった塵や、水蒸気によって発生した雲で、全体が覆われてしまう。厚い雲により、惑星の地表は、完全に見えなくなってしまうのだった。
また、やってきた彗星は、惑星が誕生するのと同じように、周囲の塵や岩石を集めて球体となる。その大きさは、惑星の四分の一ほどもあった。
プレハブ小屋にやって来た神倉先輩たちは、惑星の状態に度肝を抜かれてしまった。僅かな間に、惑星の表面が厚い雲に覆われていたからだ。

「な、何が起こったんだ…」
神倉先輩は、呆然とガラスケースを見つめた。
雲は惑星の自転に逆らって流れており、惑星全体に縞模様を描いている。ところどころ渦を巻いており、まるで目玉のような模様となっていた。
「ちょっ！　何よアレ！」
突然、瑞希が素っ頓狂な声を上げる。瑞希が指差した方角に視線を向けると、そこには信じられないものが浮かんでいた。
「ななな っ！　星ーーーー！」
健介ちゃんは、声を震わせながら驚く。惑星の陰から、別の球体が現れたからだ。
「惑星…。いや、惑星を中心に回っているから、衛星か？」
神倉先輩は、健介ちゃんより冷静に状況を分析する。
「どうやら、彗星が惑星の重力圏に引っかかって、そのまま衛星になっちゃったようね…」
若葉先輩は、システムログをチェックして、そんなことを呟いた。
「…って、ちょっと待って！」
若葉先輩が慌てて振り返る。
「惑星と衛星…、衝突しちゃってるみたい…」
青い顔をしながら、若葉先輩はそう報告した。
そこで、神倉先輩たちは、プラネットメーカーに残る映像を再生してみる。彗星の接近、惑星との衝突。そして、惑星の再構築と、分厚い雲の発生…。全てが驚きの連続であった。
「雲に遮られて、内部のスキャンが効かない…。でも、惑星全体が氷のように冷たくなっている…」
若葉先輩は、パネルを操作しながら、必死に惑星のデータを集めていた。
「恒星からの距離を考えても、これほど冷たくなるわけがないから…、この雲によって太陽からの熱が遮断されているようね。少し違うけど…。ほら、地球でいうところの、恐竜絶滅みたいな感じ♪」

その仮説には、神倉先輩たちも納得したようだった。
太古の昔、地球上には、数多くの恐竜が存在していた。そんな恐竜たちは、一説によると、落下した巨大な隕石が大量の粉塵を巻き上げ、その結果分厚い雲が地球を覆い隠し、寒さによって絶滅したとされている。この惑星も、同じような状態になったと予想されるのだ。
「それにしても…。よく砕けなかったよな～…」
健介ちゃんは、愛おしそうに惑星を眺める。彗星の軌道がもう少し内側だったなら、惑星は木っ端微塵となっていただろう。
「さっすがは、プラネット・マナ先輩だね♪」
瑞希は、ご丁寧にも惑星の名前に“先輩”を付けている。それを聞いた健介ちゃんは、おもわず吹き出してしまった。
「な、なによ～！」
瑞希は、顔を真っ赤にさせながら、可愛く頬を膨らませる。
「いや、確かに…。さすがはマナだな♪」
健介ちゃんは、笑いを堪えながらそっぽを向く。だが、そんな健介ちゃんを見て、瑞希はどこか嬉しそうであった。
最近の健介ちゃんは、かなり様子がおかしかった。しかし、惑星が誕生したことで、完全に以前と変わらない状態となってくれたようである。瑞希は、それが嬉しかったのだろう。

惑星が誕生して、さらに三日が過ぎた。惑星の表面は、いまだ分厚い雲で覆われている。このままではとても環境設定を行える状態ではなく、健介ちゃんたちは二人一組で惑星の観察に当っていた。
「変わんないね～…」
瑞希は、詰まらなそうに呟く。隣では、健介ちゃんも同じように退屈していた。
「コンテストの締め切りまで、あと三日か～」
健介ちゃんは、携帯端末でスケジュールを確認する。このままの状態でもコンテスト出場は可能だが、美しさからみればせいぜいＣ

ランク止まりだろう。そのことは、瑞希にも充分わかっていた。
「でも、これだけ立派な“月”があるんだから、いいとこまでいくかも♪」
瑞希は、惑星の四分の一ほどある大きな衛星を見つめた。衛星にしては大きいと感じるかもしれないが、地球に対しての月の大きさが約四分の一だと考えると、意外に普通なのかもしれない。
「確かに…。いままでのコンテストでも、これほど大きな衛星がある惑星は無かったもんな～」
健介ちゃんは、衛星を拡大してモニターに表示させる。何も無い岩石だけの衛星だが、遠目で見ると美しい薄黄色をしていた。
「この衛星にも、名前を付けたほうがいいかも…って！」
そのとき、惑星を覆う雲の一部が切れ、地表が見えたような気がした。健介ちゃんは、慌ててガラスケースに駆け寄り、内部に浮ぶ惑星をジッと見つめる。その身体は、小刻みに震えているようであった。
「健介…。どうしたの？」
瑞希もモニターから離れ、健介ちゃんの後ろから惑星を覗き込む。
「えっ！」
瑞希は、その光景に愕然としてしまう。雲の隙間から見え隠れしているのは、とても美しい水色だったからだ。
「うそ…だろ…」
健介ちゃんは、ガラスケースに手を添えて、惑星を凝視する。雲は徐々に薄れていき、惑星本来の姿を現した。
「ブ、ブルー…プラネット…」
健介ちゃんは、震えるような声で呟く。現れたのは、いくつかの大陸を持ち、青い海に囲まれた美しい惑星であった。
プラネットメーカーが発売されて二十年間…。水に囲まれた青い星を創ったのは、システム開発者の優子さんしかいない。そのため、青い星を創ることは全ユーザーの夢となり、その惑星はプラネットメーカーの象徴といわれてきた。

いくつもの偶然が重なり合い、再び誕生した青い惑星…。なんちゃらプラネットは、そんな奇跡の星を完成させたのだ。

誰もいなくなったプレハブ小屋の中に、一人の女性が佇んでいた。その女性とは、魔界から戻ってきた優子さんである。

「まさか、ブループラネットに成長してるとは…」

優子さんは、ガラスケースに浮ぶ宝石のような青い惑星を見つめた。

「うぅ～…。この環境を犠牲にしなければならないなんて…」

優子さんは、心苦しそうな表情で、中央装置のメンテナンスパネルを開く。特殊な工具を使い、プラネットメーカーのブラックボックスを開けて、時空石をあらわにさせた。

「え～っと…、こいつをここに…」

優子さんは、小さな部品を時空石の近くに設置する。中央装置とケーブルで繋がった操作パネルで、何かの設定を施した。

「これで、よしっと…」

作業を終え、メンテナンスパネルを閉める。立ち上がった優子さんは、もう一度だけ青い惑星に視線を向け、プレハブ小屋から立ち去っていった。

全身が焼けるように熱く感じられる。それなのに、流れる汗はとても冷たく思えた。わたしは、いつまで経っても眠ることができず、寝返りを繰り返していた。

そのとき、わたしの部屋に、誰かが入ってきたのを感じた。月明かりに浮かび上がった人影は、数日前に魔界へと旅立っていった優子さんであった。

「やっぱり…、もう限界のようね…」

優子さんは、わたしの頬に手を添えながら呟く。そして、掛け布団を取り去り、わたしの身体をいわゆるお姫さま抱っこの状態で持

ち上げた。
『ゆ…、優子…さん？』
わたしは、気恥ずかしさから、おもわず苦笑してしまう。
『え～っと…。わたし…、どうなっちゃうんですか～？』
優子さんの態度からすると、単にからかっているだけではなさそうだ。
「ん～…。時空のズレを修復する方法が見つかったから、これから試しに行くんだよ～♪」
優子さんは、微笑みながらそんなことを呟く。しかし、思考が麻痺している所為か、特に嬉しいとは感じなかった。
優子さんは、わたしを抱きかかえたまま、プレハブ小屋へと向かう。その途中、トイレに起きた健介ちゃんがこちらを窺っていたことに、わたしは気づかなかった。
プレハブ小屋に入ると、中央に青白い光が感じられた。わたしは、ゆっくりと視線を向けてみる。そこには、青い宝石のように輝く、美しい惑星が浮んでいた。
『ブルー…、プラネット…』
わたしは、おもわず息を呑んでしまう。惑星が誕生したことは聞いていたが、まさか、それが奇跡の星とされるブループラネットだとは思わなかった。
プラネットメーカーは、データ上で創られた惑星を、ただ映しているわけではない。ガラスケース内には実際の宇宙空間が広がっており、疑似惑星がそこに存在している。ガラスを挟んで数メートルの距離に実物の惑星があるのだ。
それは、まるで宇宙船から地球を眺めているような光景であった。
「ブループラネットのときもそうだったけど、環境設定をしない状態で水の豊富な惑星が誕生する確率は、限りなくゼロに近いの…」
優子さんは、わたしを抱えながらガラスケースに近づく。
「この惑星も、たくさんの偶然が重なって誕生したのね…」
そう呟いた優子さんは、とても哀しそうな表情をした。わたしが

不思議そうにしていると、覚悟を決めた優子さんがとんでもないことを口にする。
「時空のズレを修復するには、この環境をシステムリセットしなければならないの…」
優子さんは、真剣な表情で、わたしの顔をジッと見つめた。
『シ、システムリセット！』
わたしは、驚きのあまり叫んでしまう。途端に激しく咳き込んでしまい、優子さんが背中をさすってくれる。
『あ、ありがとうございます…。でも…、どうしてシステムリセットをしなければならないんですか…？』
わたしは、恐る恐る優子さんに問いかけてみた。システムリセットをすれば、せっかく誕生した奇跡の惑星が破壊されてしまうことになるからだ。
わたしを助けるためにシステムリセットが必要というのであれば、どうしてもその理由が知りたかった。すると優子さんは、わたしを椅子に座らせて、魔界で確認してきた内容を語りはじめた。

魔界で会った人物は、時間や空間を司る神、時空神ラルドさまであった。
優子さんがラルドさまに会うのは、これが初めてだったという。優子さんの受けた印象は、意外に常識人であったそうだ。
ラルドさまは、わたしに起こっている状況を、全て御存知だったようである。ラルドさまの見解は、優子さんの仮説と同じであった。
時空石とわたしの目覚めようとしている時空力が影響して、プラネットメーカーが暴走する。一瞬で数億年の時が経過し、それが影響して時空軸が少しだけズレてしまう。そのとき、わたしの魂が別の次元に弾き飛ばされてしまったらしい。
「つまり、あの事故と同じレベルのエネルギーを発生させて、それをある機械で反転させれば、あなたの魂を元の時空に戻せるってわけ♪」

優子さんは、対処方法を説明する。簡単そうに言っているが、巨大なエネルギーを反転させるなど、もの凄く難しい技術が必要なのだろう。
『そのエネルギーを得るために…、この惑星を破壊する…わけですね…』
わたしが問いかけると、優子さんはコクリと頷いた。
「破壊するって言っても、この前と同じようにシステムリセットをするだけ…」
優子さんは、メインコンソールの足元に視線を向ける。そこには、プラネットメーカーの環境をリセットする、アナログ式のボタンがあるはずだ。
「こうしている間も、あなたの時空力を感じて、プラネットメーカーのエネルギーが増大している。あと数分もしないうちに、この辺り一帯を巻き込んだ大爆発が起こってしまうでしょうね～…」
優子さんは、さらりと恐ろしいことを呟いた。
『でも…、やっと完成した惑星を破壊するなんて…』
わたしは、躊躇いの言葉を口にする。
この惑星が誕生するまで、神倉先輩たちの苦労は並大抵のものではなかったはずだ。さらに言ってしまえば、完成した惑星は、奇跡の星ブループラネットである。たとえ同じようにゲームを進めたとしても、二度とこの青い星を創り上げることは出来ないだろう。
「なにを言っているの。システムリセットをしなければ…。このままじゃ、あなた死んじゃうのよ！」
優子さんは、わたしの考えを窘める。
「ゲームと自分の命…、どっちが大切なの？」
真剣に問いかける優子さんだったが、わたしにはずばりな決断をすることができなかった。そんな態度に、優子さんは大きなため息をつく。
「健介ちゃん…、そこにいるんでしょ。入ってきなさい…」
優子さんは、突然、そんなことを呟いた。

すると、プレハブ小屋の扉が開き、健介ちゃんが入ってきた。
「真菜…。なにを悩んでいるんだ？」
健介ちゃんは、苦笑しながら近づいてくる。どうやら、わたしたちの会話を、最初から聞いていたようである。
「この惑星を壊すことで、おまえの命が助かるのなら、考える必要もないだろ…」
健介ちゃんには、迷っている様子はまったくなかった。
『でも…。惑星を壊しちゃったら、コンテストにも出られないんだよ！』
わたしがそう叫ぶと、健介ちゃんはにっこりと微笑む。
「コンテストは来年もある…」
健介ちゃんは、ゆっくりとした動作で、ガラスケースに手を添える。
「それに、この惑星は、おまえのために創られたんだ。おまえの命を助けるために壊すんなら、みんなも納得するだろうよ…」
健介ちゃんは、宝石のような青い惑星を、愛おしそうに見つめた。
『でもでも…』
それでも納得しない様子を見て、優子さんは再びわたしをお姫さま抱っこで持ち上げる。
『ゆ、優子さん！』
優子さんは、わたしを抱いたまま、ガラスケースを背にするように立った。
「健介ちゃん…。お願いできるかしら？」
優子さんは、健介ちゃんに微笑みかける。健介ちゃんは、素直に頷き、メインコンソールの足元にしゃがみ込んだ。
『ちょっ…。け、健介ちゃん！』
リセットボタンに手をかける健介ちゃんを見て、わたしは慌てて声を上げた。
『健介ちゃん…、ちょっと待って！　みんなに相談してからでも遅

くは…』
だが、その言葉は最後まで続かなかった。
「真菜がなにを言おうと、オレはリセットを押す！」
健介ちゃんの決意は変わらない。
「いくぞ…」
健介ちゃんは、優子さんが頷くのを確認して、一気にリセットボタンを押し込んだ。
『ダメーーーー！』
わたしの悲鳴が辺りに響き渡った。
リセットボタンが押されたことで、惑星は一気に縮小し、プレハブ小屋は白い光に包まれる。それは、事故のときの暗く冷たい光ではなく、とても暖かで優しい感じの光だった。
光が収まったとき、わたしと優子さんの姿はその場から消えていた。健介ちゃんは、きょろきょろと辺りを見回す。そして、中央にあるガラスケースが視界に入った。
ガラスケースの中には、何も存在していない。まるで、最初から何も無かったかのようであった。また、メインコンソールのモニターには、初期メニューの画面が表示されている。どうやら、全てのデータがクリアされてしまったようである。
こうして、なんちゃらプラネットが創り上げた奇跡の星は、ついに幻となってしまった。

健介ちゃんがリセットボタンを押した翌日、プレハブ小屋へやって来た神倉先輩たちはその光景に愕然とした。やっとの思いで完成させた奇跡の星…。その惑星が、ガラスケースから消えていたからだ。
「い、いったいどうなってるんだ！」
神倉先輩は、ガラスケースに駆け寄って内部を確認する。だが、宝石のような惑星は影も形もなかった。

「健介！　何があった！」
神倉先輩は、メインコンソールへもたれかかるようにしゃがみ込んでいる健介ちゃんに問いかけた。
「システムリセットをしました…」
健介ちゃんは、大きなため息をつき、簡潔な報告をする。
「シ、システムリセットですってーーー！」
瑞希がヒステリックに叫ぶ。
「あんた、いったい何を考えて！」
怒った瑞希は、健介ちゃんの胸倉を掴んで前後に揺らす。
「やかましい！」
健介ちゃんは、いらついたように、片腕で瑞希の手を弾く。瑞希は、健介ちゃんの態度に、驚きの表情をした。いつもなら、迷惑そうな顔をしながらも、軽い冗談を返してくれるはずである。それなのに、いまの健介ちゃんは、かなり様子が変であった。
「な、なによ…」
瑞希は、驚きと悲しさに、涙ぐんでしまう。健介ちゃんは、軽く舌打ちをして、項垂れるように呟いた。
「これで…、真菜の命が助かるんだよ…」
健介ちゃんの言葉に、神倉先輩たちが息を呑む。どうしてここで、わたしの名前が出てくるのだろうか…。神倉先輩たちがそんなことを考えていると、この修羅場を予想していたのか、飛鳥さんがプレハブ小屋に現れた。
「あ～…。やっぱり説明が必要みたいだね～」
飛鳥さんは、苦笑しながらみんなを見回す。どうやら飛鳥さんは、優子さんがわたしを連れ出す前に、これからの行動について、説明を受けていたようであった。
「飛鳥さん…、説明が必要って…？」
神倉先輩は、飛鳥さんと向い合う。
飛鳥さんは椅子に腰を下ろして、わたしに起こっていた出来事…、なぜシステムリセットが必要だったのかを語りはじめた。

どこからか、わたしを呼ぶ声が聞こえてくる。朦朧とする意識を覚醒させ、わたしはゆっくりとまぶたを開いた。
瞳に飛び込んできたのは、一面に広がる青色であった。所々、白い綿のようなモノが浮んでおり、それが雲であると理解するのには、しばらく時間が必要だった。
『えっ…、地球？』
わたしは、自分の置かれている状況に愕然とする。わたしは、宇宙空間に漂いながら、巨大な青い惑星を見下ろしていたのだ。
『いいえ…。あの星は地球じゃない…』
突然、後ろから声が聞こえたため、わたしは慌てて振り返る。そこには、純白の翼を広げて漂う、優子さんの姿があった。
『あの惑星の名前は“プラネット・マナ”…。あなたたちなんちゃらプラネットが創っていた惑星よ♪』
優子さんは、わたしの隣に浮び、惑星マナを見つめた。
『プラネット・マナって…。優子さん、なにがどうなってるんですか～？』
爆発に巻き込まれて、今度はプラネットメーカーの中に取り込まれたとでもいうのだろうか…。わたしは、混乱のあまり、頭痛がしてくる思いだった。
そんな疑問を感じ取ったのか、優子さんが説明を付け加える。
『あれは、正真正銘、宇宙に実在する惑星…』
優子さんは、さらに混乱してしまうわたしを見て苦笑する。そして、信じられないことを語りはじめた。
『プラネットメーカーって、本当はゲームじゃないの。本物の惑星を観察して、生き物が住めるように改良するためのシステムなのよ…』
優子さんは、プラネットメーカー本来の機能について説明をはじめた。
時空石の力を使って過去の宇宙を表示させる。惑星の誕生するで

あろう座標を選択し、環境を整えて生き物が住めるように調整を施す。いままでプラネットコンテストで発表された惑星は、生命が住めるような状態ではないが、宇宙のどこかに存在しているらしい。
優子さんの話は、全てが驚きであった。ガラスケース内に再現させていると思っていた宇宙空間は、時空間を歪めて表示させていた本物の宇宙であるという。もちろん、観察していた惑星も、正真正銘の本物である。
わたしたちがゲームだと思っていたプラネットメーカーは、想像を遥かに超えた、とんでもない装置だったようだ。ちなみにシステムリセットとは、宇宙との繋がりを遮断するだけで、本当に惑星が破壊されてしまうわけではない。
『凄い…ですね…』
わたしの感想は、こんなものである。いや…、正直のところ、説明の半分も理解できたかどうか疑問であった。ただ、この星がみんなで創っていたプラネット・マナであることだけは、理解することができた。
『で～…、なぜわたしたちが、その惑星マナを見下ろしているんですか？』
わたしは、もう一つの疑問を口にする。記憶に間違いがなければ、つい先ほどまで、わたしたちは樹神神社のプレハブ小屋にいたはずである。それが、どうして宇宙空間を漂っているのだろうか…。
『いや～…、なんて言うか～…。そ、そんな難しいことを考えてはダメ！』
突然、優子さんの態度があやふやになる。
『これは…。そう、夢なの！』
適当な説明で誤魔化そうとする優子さん。どうやら、優子さんにも理由がわからないらしい。
真相はというと、惑星との繋がりを遮断するとき、わたしの魂がプラネット・マナに引き寄せられて、時空間移動してしまっただけである。優子さんは、いなくなったわたしの波長を頼りに、ここま

でやってきてくれたようだ。
『じゃあ…、時空のズレはどうなったんですか？』
わたしは、もっとも重要な疑問を確認する。すると、優子さんの表情は、パッと明るくなった。
『あっ、それは大丈夫～♪』
優子さんは、自信満々に答える。
『時空にズレは感じられないから、ちゃんとこっちの次元に戻ってこれたはずだよ♪』
それを聞いて、わたしはホッと息をついた。そういえば、こころなしか身体に生命力が満ち溢れているように思える。入院している肉体との繋がりを、確かに感じることができた。
『さぁ…、みんなが待ってるわ…。帰りましょう♪』
優子さんは、わたしの身体をそっと抱きしめる。その心地良さに瞳を閉じると、わたしの意識はそこで途切れてしまった。
わたしの姿は、徐々に揺らいで薄くなり、ついには光の塊となった。優子さんは、その光を愛おしそうに抱える。懐から一つの時空石を取り出し、その力で時空間移動をして姿を消すのだった。

わたしの肉体が眠っている病室には、事実を知らされた神倉先輩たちと飛鳥さんが訪れていた。
長い看病生活により、お母さんもかなり疲れているようである。学生時代の同級生でもある飛鳥さんは、わたしのことよりお母さんを心配しているようだった。
「マナ先輩は、ずっとわたしたちのそばにいてくれたんですね…」
瑞希は、涙ぐみながらわたしを見つめる。姿こそ見えなかったが、一緒に惑星創りをしていた事実が嬉しかったようだ。
「遠野くんも水臭いわね～…。どうして教えてくれなかったの？」
若葉先輩は、おどけたように問いかける。健介ちゃんは、優子さんから口止めされていたことを伝え、苦笑しながら頭を掻いた。
そこに、時空間移動で戻ってきた優子さんが飛び込んでくる。

「はいはい、どいてね～～～」
優子さんは、急いでベッドに駆け寄る。そして、抱えていた光の塊を空中へと解き放った。その瞬間、病室内は眩しい光に包まれた。
光の中に、半透明のわたしが浮かび上がる。その姿は、ゆっくりと降下をはじめ、ベッドに寝ているわたしの肉体と重なるように消えてしまった。
「ふぅ～…。これで一安心…」
優子さんは、落ち着いた様子で、大きく息をついた。すると、いままで人形のようだったわたしの顔が、ゆっくりと赤みをおびてくる。魂が戻ったことで、身体の各機能が回復を始めたようだ。
「真菜…、真菜…」
健介ちゃんは、静かに囁きかける。しかし、わたしの意識は一向に戻ろうとしない。
「おい、どうなってるんだ！」
健介ちゃんは、優子さんを睨みつけるように問いかけた。
「だ～か～ら～。ほんと、憎たらしい子ね～～～！」
優子さんは、その問いには答えず、健介ちゃんの頬を掴み、左右におもいっきり引っ張った。痛がる健介ちゃんを見て、飛鳥さんが苦笑する。
「命に別状は無いから大丈夫よ…。仮にも魂が離れていたわけだから、回復するのに時間がかかるだけ♪」
優子さんと違い、飛鳥さんの言葉は素直に信じられるから不思議なものである。健介ちゃんも、それ以上問い詰めることはなかった。
だが、しばらく経ってもわたしの意識は戻ろうとしなかった。
神倉先輩たちは再度惑星創りをはじめたようだが、二日ではどうすることもできない。コンテストの締切日も過ぎてしまい、出場を断念するしかなかった。ただ、システムリセットをしてしまったとはいえ、奇跡の星を誕生させたという充実感はあった。
そして、わたしの意識が戻らないまま、プラネットコンテストの当日を向えることになった。

第十話　星を創った学生たち

今年で十五回を数えるプラネットコンテスト。プラネットメーカーのユーザーたちが創り上げた、惑星の美しさを競う大会である。

毎年、プラネットコンテストに参加してくるのは、個人はもちろん、わたしたちのような学校のクラブ活動、企業の専門チームなど二十団体ほどであった。

わたしたちなんちゃらプラネットは、惑星を創るのが第一目的であったが、コンテストに参加して入賞することが最終目標でもあった。

数日前までは、その目標に手が届きかけていた。しかし、わたしの命を救うため、完成した惑星をシステムリセットしてしまう。みんな、そのことには納得していたが、目の前で大会が進行しているのを見ていると、自分たちもそこに立っていたはずだとどうしても考えてしまうのだった。

「あ～ぁ…。誰かさんがシステムリセットをしなければな～～～…」

瑞希は、見せつけるように、大きなため息をつく。もちろん、システムリセットをしてしまった健介ちゃんに対する皮肉である。

「あのな～…。あれは、真菜を助けるためだって、説明しただろうが…」

健介ちゃんにも、瑞希が冗談で皮肉っていることはわかっている。それでも言い訳を繰り返すのは、健介ちゃんもコンテストのことを残念に思っているからだろう。

「確かに…。あの星で参加していれば、優勝は確実だっただろうな…」

神倉先輩は、今大会で発表された惑星の写真が載っているパンフレットに視線を向ける。何回チェックしても、プラネット・マナを超える美しさの星は見当たらなかった。

「昴先輩～…」

健介ちゃんは、困ったように苦笑する。もちろん、神倉先輩は事実を口にしただけで、健介ちゃんを責めているわけではない。
「はいはい…、いまさら愚痴ってもしかたないでしょ♪　それより、そろそろ入賞した惑星が発表されるみたいだよ」
若葉先輩は、舞台上のスクリーンに注目する。
今大会で出展された惑星の数は、十七個と意外に少なかった。その中で、ベスト5の惑星が入賞したことになるわけだ。
しばらくすると会場の照明が落とされて、舞台上のメインスクリーンには、第五位の惑星が映し出された。その瞬間、会場内にたくさんの拍手が沸き起こる。映し出されたのは、土星のように美しいリングを持つ惑星であった。
司会進行の女性が、惑星の基本情報を発表する。
「え～っ！　あれが五位なの～？」
瑞希は、抗議の声を上げた。瑞希の予想では、さらに上位であったのだろう。
スクリーン上では、次々に入賞した惑星が発表される。そして、ついに優勝した惑星が映し出された。優勝したのは、プラネットコンテストでは常連となる企業チームが持ち込んだ惑星であった。
美しさからいえばそれほどでもなかったが、二つの月を持つみごとな惑星である。
「やはり、アレが優勝か…」
予想通りの結果に、神倉先輩は大きく頷いた。
すると、会場内にファンファーレが鳴り響き、舞台上に五つのガラスケースが現れる。今回、入賞した五つの惑星が入ったケースである。入賞した惑星は、表彰式が終われば自由に近づいて見ることができるのだ。
入賞した惑星を創ったユーザーたちの表彰式が無事に終了する。
「昴…。もう帰りましょうか…」
若葉先輩は、神倉先輩に小声で囁く。入賞した惑星を間近でみた

ところで、哀しくなるだけである。どうしても、プラネット・マナと比べてしまうからだ。
「そうだな…。みんなも、それでいいか？」
神倉先輩は、健介ちゃんと瑞希に視線を向ける。二人も同じ気持ちなのか、反対することはなかった。
そのとき、会場内がひときわ大きくざわめいた。人々は、メインスクリーンに注目している。そこには、プラネットコンテストの象徴となっているブループラネットが映し出されていた。その美しさは、映像でありながらも、今回入賞した惑星らと比べ物にならないほどである。だが、何度も目にしているはずのブループラネットを見て、なにをいまさら騒いでいるのだろうか…。
「ちょっと待て…。あれって、本当にブループラネット…なのか？」
神倉先輩は、いち早くブループラネットの様子が違うことに気づいた。
「うそ…でしょ…」
若葉先輩も、その違いに気づいたようである。スクリーンに映っているブループラネットの陰から、惑星の四分の一ほどの大きさをした“月”が出現したからだ。
メインスクリーンに、“ＰＬＡＮＥＴ　ＭＡＮＡ”という文字が表示される。そして、その左右には、次々と惑星に関する情報が映し出された。
「アレって、マナ先輩の惑星だよ！」
瑞希は、健介ちゃんの腕を抱えて上下に揺らす。健介ちゃんは、驚きのあまり、思考が固まっているようだった。
『これは、今回のコンテストに参加するはずだった惑星…。私立白鳳学園なんちゃらプラネットが誕生させた“プラネット・マナ”です♪』
突然、スピーカーから聞き覚えのある声がした。
舞台を見ると、白衣を着て、グリグリメガネをかけた優子さんがマイクを手に立っていた。

『なんちゃらプラネットは、事故によって意識不明となった部員のために、この惑星を創り上げました。ですが、完成した惑星のデータは、不幸なことに失われてしまったのです』

優子さんは、わたしの状態や時空力のことは伏せて、惑星誕生までの話を“美談”として発表する。神倉先輩たちは、都合の良いように解釈された話に、おもわず苦笑してしまった。

『その、なんちゃらプラネットのみんなが、この会場に来てくれています♪』

優子さんが会場に手を突き出すと、神倉先輩たちにスポットライトが当った。神倉先輩たちは、飛び上がるように驚く。その途端、会場内には、割れんばかりの拍手が巻き起こった。

神倉先輩たちは、会場係員に舞台上へと連れられていく。その間も、会場内の拍手は鳴り止まない。第二の奇跡の星が誕生したこと、優子さんが少しだけ脚色した美談に、みんなが感動しているようだ。

『すでに惑星本体が失われているため大会の審査対象から外れてしまいましたが、これほど素晴らしい惑星が誕生していたという事実を皆さんにも知っていただきたい…。また、非常に難しい惑星を創り上げたなんちゃらプラネットのみんなを、特別賞として表彰したいと思います♪』

さすがは元スーパーアイドル。優子さんは、入賞作品の表彰式以上に、場を盛り上げていた。

「わ、若葉せんぱ〜い…」

瑞希は、緊張した面持ちで、若葉先輩にしがみ付く。コンテスト出場を目指してはいたが、このような形で参加することになるとは思ってもいなかった。はっきりいって、心の準備がまったく出来ていない。

『では、部長の神倉昴くんに話を聞いてみたいと思います。昴くん…、奇跡の星と呼ばれるブループラネットを誕生させた感想は？』

優子さんは、神倉先輩にマイクを突き出す。しかし、神倉先輩は、

岩のように固まってしまって言葉が出てこない。
『え～っと…、緊張してるのかな～？』
優子さんは、苦笑しながら若葉先輩に視線を向ける。若葉先輩は、涙目になりながら、首を横に振っていた。
ちなみに、このコンテストの様子は、全世界に中継されている。さすがの神倉先輩も、緊張によって頭が真っ白となっていたのだろう。
困った優子さんは、比較的落ち着いていそうな健介ちゃんに目標を定めた。
『じゃあ、健介ちゃん。部を代表して、なにかひとこと…』
優子さんは、健介ちゃんにマイクを突き出す。健介ちゃんは、非常に不機嫌そうな表情で呟いた。
「事前に話ぐらいしておけってんだよ…。この鳥人間が…」
健介ちゃんは、小声で話したつもりだったが、その言葉は高性能のマイクによって拾われてしまう。
優子さんの額に怒りマークが浮かび上がる。優子さんは、健介ちゃんの首に腕を回し、抱えるようにおもいっきり絞め上げた。
『どうやらなんちゃらプラネットのみんなは、感激のあまり言葉が出てこないようですね～』
優子さんは、健介ちゃんの首を絞めながら、表彰式を進行させる。時折、ジタバタする健介ちゃんの頭に、拳をグリグリと押しつけていた。
『それでは、プラネットコンテスト特別賞を授与します♪』
優子さんは、惑星の形を模したトロフィーを、神倉先輩に差し出す。
『おめでとう♪』
健介ちゃんを脇に抱えながら、優子さんはにっこりと微笑んだ。
「あ、ありがとうございます！」
我に返った神倉先輩は、身体を震わせながらトロフィーを受取る。ズッシリと重いトロフィーを持ち上げ、おもわず涙ぐんでしまうの

だった。
　再び会場内に拍手が鳴り響く。とても嬉しそうな神倉先輩たち…。そんな中で、健介ちゃんだけが、優子さんに抱えられたまま、ぐったりと力尽きていた。

　プラネットコンテストで特別賞に輝いたなんちゃらプラネットは、表彰式の後、会場に来ていたユーザーや報道関係者の質問攻めにあっていた。実際の惑星は壊れてしまっていたが、みんなは奇跡の星を誕生させたその経過を知りたかったようだ。
　しかし、プラネット・マナは、ほとんど偶然に誕生した惑星であるため、神倉先輩たちにも詳しく説明することができない。それでも、恒星誕生の直前に通過した衛星、システムバグによる座標の仮設定、惑星が誕生した後に起こった彗星との衝突など、普通では考えられないような出来事の数々に驚きの声が上がっていた。
　また、入院中のわたしのために惑星を完成させた事実は、人々の心に大きな感動を与えたようである。そんな美談を、マスコミがほおっておくわけはない。あらためて取材をしたいという申込みも、数社から聞かされた。
　神倉先輩たちは、しばらく開放されることがなかった。すると、再び現れた優子さんが、質問を切り上げるように人々を追っ払ってしまう。
「いや～、みんな大変だったね～♪」
　優子さんは、まるでひとごとのように苦笑する。もちろん、こうなったのは、優子さんがみんなに黙ってプラネット・マナを公開した所為であった。
「でも…、いつの間に惑星の映像を録画していたんですか？」
　神倉先輩は、優子さんにそんなことを問いかける。あれほど美しい映像を撮るためには、かなりの設備が必要となるはずだ。
「あれは、復旧したログデータから、映像だけを取り出したものだ

よ～」
優子さんは、平然とそんなことを答える。システムリセットをすれば、全てのデータはクリアされるはずだが、開発者の優子さんなら復旧することも可能だったようだ。
「けっ…。どうせなら、惑星そのものを修復しやがれってんだ…」
健介ちゃんは、とても小さな声で文句を言う。その途端、優子さんのつっこみが健介ちゃんに炸裂した。健介ちゃんは、後頭部から煙を出してうずくまってしまう。
「もぉ～、そんな無茶を言わないの～♪」
優子さんは、倒れている健介ちゃんを指でつつく。犬猿の仲に見えるこの二人…。じつは、かなり気が合っているようであった。

金緑石に戻ってきた神倉先輩たちは、駅前でも報道関係者に囲まれてしまう。まるで、芸能人にでもなってしまった気分である。
報道関係者が集まるということは、金緑石に発令されていたマスコミ禁止令が解除されたのだろう。つまり、飛鳥さんは世界のどこかにある聖域に戻ってしまい、樹神神社へ向ったとしても会うことができないはずだ。
飛鳥さんには、これまでお世話になりっぱなしであった。ぜひともお礼を言いたかったのだが、それはもはや叶わなくなってしまったようである。彼女が人間神さまであることを考えると、もう二度と会うことはないのかもしれなかった。
神倉先輩たちは、報道関係者を振り切って、わたしの入院している総合病院へ駆け込んだ。さすがに敷地内まで入ることは躊躇ったのか、報道関係者は出入口の外で中継をはじめた。
「ふぅ～…、やれやれ…だな」
神倉先輩は、天井を見上げるような姿勢で額の汗を拭う。
「さて、野乃原さんの病室に行こうか」
神倉先輩は、みんなを引き連れて、病室へと向かうことにした。
今回、病院にやって来た理由は、プラネットコンテストで特別賞

に輝いたことを、入院しているわたしに報告するためである。そう…、わたしの意識は、いまだ戻らないままであった。
優子さんの話では、時空のズレが修復されたとはいえ、魂と身体の回復には時間がかかるという。命を落とす危険は回避されたものの、いつ意識を取り戻すかはわからない。明日になるか、一年先になるか…。それは、誰にもわからないことであった。
「マナ先輩、こんにちは～♪」
瑞希は、ノックも早々に病室へと飛び込む。相変わらず目覚めないわたしと、少しだけ元気になったお母さんがみんなを出迎えた。
「みんな…、やったわね♪」
お母さんは、みんなに向けてピースサインをする。どうやら、お母さんもプラネットコンテストの中継を見ていたようである。神倉先輩たちは、恥ずかしそうではあったが、満面の笑みを浮かべるのだった。

「マナ先輩…。見てください、わたしたち特別賞を貰ったんですよ♪」
瑞希は、特別賞のトロフィーを掲げる。そして、トロフィーとプラネット・マナが映っているプレートを、わたしの枕元に置いた。しかし、わたしは何の反応も示さない。瑞希は、どこか寂しそうに苦笑していた。
「えっと…。野乃…、真菜さんの様子はどうなんですか？」
神倉先輩は、お茶を用意しているお母さんに問いかける。お母さんは、テーブルにティーカップを並べながら、わたしに視線を向けた。
「そうね～。優子にも見てもらったんだけど、どこにも異常はみられないから安心して♪」
お母さんは、にっこりと微笑む。数日前のように、命の火がいまにも消えてしまいそうな状態から考えれば、意識が戻らないとはいえ、回復に向かっているといえるだろう。

「魂を回復させるために眠っているみたいだから、そのうち起きるでしょ♪」
お母さんは、意外にも落ち着いているようである。
「そうですか…」
神倉先輩は、安心したように胸を撫で下ろす。直接的な原因ではなかったとはいえ、部活動で起こった事故であるため、かなり負い目を感じているようであった。お母さんは、そんな神倉先輩の様子をジッと見つめる。
「健介くん、健介くん…」
お母さんは、健介ちゃんを手招きで呼び寄せて、内緒話でもするように囁いた。
「神倉くんも素敵な子みたいだから、真菜のハートをゲットするなら、もっと頑張らなくっちゃダメだからね♪」
その瞬間、健介ちゃんは、豪快にずっこけてしまった。
「ま、麻衣さん…？」
健介ちゃんは、顔を真っ赤にさせながら苦笑する。
「あ～…。いまから、“お母さん”って呼び方に慣れておく～？」
お母さんは、いたずらっぽく微笑んだ。どうやら、優子さんから様々な情報が伝わっているようである。健介ちゃんは、どう反応していいのかわからず、かなり焦っているようだ。それを見ていた瑞希は、なぜか不機嫌そうな表情をしていた。
「さてと…。あまり長居するわけにもいかないから、そろそろ失礼しましょうか…」
若葉先輩は、苦笑しながら神倉先輩に声をかける。
「そうだな…」
神倉先輩は、出された紅茶を飲み干し、ゆっくりと立ち上がった。
「それでは、ボクたちはこれで失礼します…」
神倉先輩は、お母さんに深々とお辞儀をする。
慌てて引きとめようとするお母さんに、首を振って遠慮する神倉先輩…。お母さんたちがそんなやり取りをしているとき、健介ちゃ

んはベッドに寝ているわたしの元にやって来ていた。
健介ちゃんは、寝ているわたしの顔をジッと見つめる。そして、ゆっくりと近づき、わたしの耳元で小さく囁いた。
「お～ぃ、真菜～～～。そろそろ朝だぞ～～～…」
健介ちゃんにとって、わたしを起こすことは毎日の日課となっている。そんな日課のように、軽い気持ちで声をかけたのだろう。意識を戻さないわたしが、僅かでも反応してくれることを願って…。
「うにゅ～～～。健介ちゃ～ん…、あと五分…」
わたしは、そんな言葉を呟いて、寝返りをうつ。
「なっ！」
僅かどころではない反応に、健介ちゃんが驚愕する。
「おい！　真菜！」
健介ちゃんは、大きな声で叫び、わたしの身体を揺らした。
そんな健介ちゃんの行動に、帰ろうとしていた神倉先輩たちがびっくりする。慌てて止めようとした神倉先輩たちだったが、その光景におもわず息を呑んでしまった。
「もぉ～、なによ～～～…」
意識不明だったわたしが、むくりと身体を起こす。眠そうに目を擦りながら、無理矢理起こそうとする健介ちゃんに文句を言った。
「あと五分ぐらい…」
その瞬間、呆然と立ち尽くす神倉先輩と、視線が重なってしまう。
「かかか、神倉先輩！」
なぜわたしの部屋に神倉先輩がいるのだろうか…。わたしは、いまいち状況が掴めず、パニックとなってしまった。
「マナ先輩ーーー！」
途端に、瑞希が体当たりをするように抱きついてきた。
「マナ先輩、マナ先輩！」
瑞希は、泣きじゃくりながら、何度もわたしの名前を叫ぶ。
「えっ、あれ？　…瑞希？」

わたしは、さらに混乱してしまう。よくよく見れば、ここはわたしの部屋ではないみたいだ。
「え～っと…、あれ～？」
わたしは、何があったのかを思い出そうとする。しかし、頭の中にモヤがかかっているように何も思い出せない…。
「時間はたくさんあるんだ…。ゆっくりと、思い出せばいいよ…」
そんなことを言って、健介ちゃんがわたしの頭に手を乗せてくる。見上げてみると、健介ちゃんは、もの凄く優しそうな顔で微笑んでいた。

夏休みも終り、新学期が始まった。
無事に意識を取り戻したわたしだったが、その後も体力の回復のために入院を続けていた。お母さんは仕事に戻り、何もすることが無いわたしは暇な時間を過ごすことになる。
また、奇跡の星を誕生させたなんちゃらプラネットは、いまや世間の話題を独占していた。
先日も、特別番組製作のため、テレビ局のスタッフがこの病室を訪れた。恥ずかしながら、生まれてはじめてインタビューというものを経験してしまう。ただし、わたしはずっと意識不明で入院していたことになっていたため、自分のために惑星が創られたことへの質問がほとんどだった。
わたしは、魂だけが別次元に飛ばされるという信じられない体験をした。そんな出来事も、いまでは夢だったのではないかと思えてしまう。もちろん、健介ちゃんから夏合宿の話を聞いて、自分の記憶が間違いでなかったことは確認できていた。それでも、現実味が感じられない不思議な体験であった。
さらに、宇宙空間で聞かされた優子さんの話も驚きだった。
プラネットメーカーとは、実際の惑星を観察して、生物が住めるように環境を整える装置であるという。それが本当なら、プラネッ

トメーカーのユーザーたちは、知らない間にとんでもない計画へ参加していたことになる。
ちなみにこの事実は、優子さんの他に、わたしと飛鳥さんしか知らない…。わたしは、このことを誰にも話すつもりはなかった。優子さんの言うように、ユーザーは難しいことを考えず、シミュレーションゲームとして、プラネットメーカーを楽しめばいいと思ったからだ。
わたしが意識を取り戻してから、優子さんは一度だけお見舞いに来てくれていた。
優子さんは、一つの指輪をわたしに手渡してくれる。その指輪は、ショウさんの形見であり、時空力を封じる効果があるという。わたしに目覚めようとしている時空力は、異世界でも特殊な力であるそうだ。しかし、普通に生活する分には邪魔以外のなにものでもない。今回の事故のように、自分の意思とは関係なく、時空力が発動してしまう可能性も出てくる。そのため、指輪の力で、時空力を封じてしまおうというのだ。
指輪を鎖に通し、ペンダントとして身に付ける。この指輪をしている限り、プラネットメーカーに近づいても、力が暴走することはないそうだ。
これで全てが解決したことになり、平穏な日常が戻ってくることだろう。だが、全てが元通りになったわけではなかった。わたしたちがプラネット・マナを誕生させたことは、さらに騒ぎを引き起こす結果となってしまった。

「それで…。なんで健介ちゃんが、こんな時間、こんな場所にいるのかな～？」
わたしは、お見舞いに来てくれた健介ちゃんに問いかける。時刻は午前十時二十三分…。平日に…、しかもこんな時間にやって来るなど、学校はどうしたのだろうか。
「禁止されていたのに惑星を創ったから、一週間の自宅謹慎…」

健介ちゃんは、平然とその理由を答える。学園の設備を使わなかったとはいえ、なんちゃらプラネットの活動は禁止されていた。それが、プラネット・マナの発表によって、活動していたことを学園側に知られてしまったようである。
「って…。健介ちゃん、自宅謹慎の意味、知ってる？」
わたしは、おもわず苦笑してしまった。謹慎中なのに、こんなところに来ている場合ではないだろう。
「まぁ～、健介ちゃんが来てくれたのは嬉しいけどね…」
わたしがそう呟くと、健介ちゃんは顔を赤くして視線を逸らせる。
「あっ！　べ、べつに変な意味じゃないからね！　暇だったから…。そう、暇だったのよ！」
わたしがおもわず力説すると、健介ちゃんは、大きなため息をついて項垂れてしまった。
あの事件がきっかけで、わたしの健介ちゃんに対する気持ちが、少しだけ変化してしまったようだ。わたしは、健介ちゃんのことを優しいお兄さんのように思っていた。それなのに、いまでは健介ちゃんの言動を妙に意識してしまう…。自分でもよくわからないが、それは、神倉先輩を想う気持ちとは、また違ったものであった。

病室内に気まずい空気が流れる。すると、健介ちゃんは、何かを思い出したかのように、鞄から一冊の雑誌を取り出した。
「これ…、来る途中に本屋で買ってきた…」
健介ちゃんは、わたしに雑誌を手渡してくれる。それは、本日発売された映画雑誌のようであった。
最新の映画情報や、製作中の作品が紹介されている雑誌である。映画ファンでもない健介ちゃんの買うような雑誌ではなかったが、今回ばかりはそうはいかなかったようだ。雑誌の表紙には、製作決定作品として、“ＰＬＡＮＥＴ　ＭＡＮＡ”の文字がデカデカと載っていたからだ。
「うわぁ～…。本当に映画化されるんだ～～～…」

わたしは、大汗をかきながらページをめくりはじめる。雑誌には、映画作品“ＰＬＡＮＥＴ　ＭＡＮＡ”の特集が、数ページに渡って載せられていた。
「なんだか、どんどんおかしな方向に進んでいっちゃうね…」
わたしの呟きに、健介ちゃんも苦笑する。まさか、映画化の話まで飛び出すとは思わなかったようだ。
しかも、映画を製作するのは、海外の某有名スタジオである。創られる映画の全てがヒットすることでも知られており、そんなスタジオが製作することも大きな話題となっていた。
それほどまでに、今回の一件は、人々の心を捉えてしまったのかもしれない。
事故に巻き込まれた部員のため、奇跡の星を創り上げようとする。最終的に完成することはなかったが、コンテストでは特別賞に輝く。さらにダメ押しとして、受賞したことを知らせに行くと、それまで意識不明だった部員が目を覚ます…。そんな話を聞いているだけでも、感動的な作品が出来そうな気がするのだった。
「それにしても、豪華な俳優ばかりだね…」
わたしは、演出者の紹介を見て、冷や汗をかいてしまう。あまり詳しくないわたしでも知っているような、有名な俳優ばかりが揃っていたからだ。ちなみに、わたしの役には、天才として名高い美少女俳優が充てられていた。それに気づいた健介ちゃんは、必死に笑いを堪えている。
「な、なによ～！　それなら、健介ちゃんはどうなの！」
健介ちゃん役にも、とても人気のある若手俳優が充てられていた。
「ふっふ～ん。オレの魅力が充分にわかっているのさ～♪」
健介ちゃんは、非常に無意味なポーズをとった。どうでもよかったが、神倉先輩役の俳優よりかっこいいのが納得できない。わたしは、ムッとしながら、次のページをめくった。
そして、載っていた写真を見てぶっ飛んでしまう。わたしと健介ちゃん役の俳優たちが、抱きしめ合うように身体を寄せて、お互い

をジッと見つめていたからだ。
「あが…」
わたしは、おもわず奇妙な声を上げてしまう。どうやらこの映画は、主人公の健介ちゃんが、事故によって意識不明となってしまった恋人のため、奇跡の星ブループラネットを創ろうとする物語であるという。その恋人というのが、わたしであるようだ。
「まぁ～、幼馴染みより恋人って設定のほうが、盛り上がるだろうけど…」
健介ちゃんは、照れたように頬を赤くする。だが、問題はそんなことではない。こんな映画が公開されれば、世間は、わたしと健介ちゃんが恋人同士であると誤解するのではないだろうか…。
映画が公開されるのは、来年の夏頃だという。その頃のわたしたちは、いったいどうなっているのだろう。もしかすると、この映画のようになっているかもしれない。わたしは、苦笑しながらそんなことを考えていた。

わたしと健介ちゃんがおしゃべりしているとき、大きなニュースが世界中を駆け巡っていた。
ここは違う別の銀河で、地球によく似た惑星が発見されたというニュースである。水が豊富な青い惑星で、四分の一ほどの大きな月をもっているという。そして、驚くべきことは、惑星が発見された座標であった。その座標は、なんちゃらプラネットがゲーム中に惑星を誕生させたのと、まったく同じ場所であったのだ。
惑星にある大陸の形もよく似ており、まるで、ゲームから飛び出してきたように思えてしまう。そのため、発見された惑星は“マナ”と名付けられることになった。
おそらく、今回発見された惑星は、わたしたちが観察していたプラネット・マナそのものであろう。その考えが正しいかどうかは、優子さんにしかわからない。ただ、わたしたちなんちゃらプラネットは、本物の惑星を創った学生として、さらに有名になってしまう

のだった。

第十話　星を創った学生たち（後書き）

星を創造するという真菜たちのお話し、いかがだったでしょうか？
自分も更新するとき、久しぶりに読み返してみたんですが、面白いと思える反面、他シリーズ（Ｃｒｙｓｔａｌ　Ｌｅｇｅｎｄ）のキャラクターの意味不明さが際だっているように感じました。（反省しております…）
ストーリー的には良かったかもしれませんが、個人的には四話から八話辺りを無かったことにしてしまいたいです。（書き直したい？）
じつは、「なんちゃらプラネット２」というのも書いていたんですが、同じく他シリーズの影響が強くなりすぎて中断していたりします（苦笑）。
ちなみに、タイトルの「なんちゃら」については、書き始めたときに良いタイトルが思いつかず、仮につけていたところ、読者の中でも定着してしまったといった理由があります。
本文中にある「なんちゃら」の部分は、読まれる方が自由に脳内変換してください。
最後に、ここまで読んでいただき、まことにありがとうございました。できれば感想などいただけると、とても嬉しいです。（調子にのりすぎ♪）

２００８／０３／１８　Ｃｒｙｓｔａｌ（クリスタル）

「なんちゃらプラネット」２００４／０６／２９～２００４／１０／２８　連載作品

同一作者小説紹介

★Ｃｒｙｓｔａｌ　Ｌｅｇｅｎｄ　シリーズ★　「Ｃｒｙｓｔａｌ

Ｌｅｇｅｎｄ　７｜２　～トルマリンの胎動～」、「Ｃｒｙｓｔａｌ　Ｌｅｇｅｎｄ　７｜３　～はじまりの時代～」、「Ｃｒｙｓｔａｌ　Ｌｅｇｅｎｄ　７｜４　～もしかして怪談？～」

★超獣神グランゾル　シリーズ★　「超獣神グランゾル」、「鳳凰編」

★なんちゃらプラネット　シリーズ★　「なんちゃらプラネット」

★美咲ちゃん　シリーズ★　「～もしかして怪談？～」

★４コマ劇場　シリーズ★　「桜のひみつ」、「ラズベリル☆ショート劇場」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8535d/

なんちゃらプラネット

2011年6月16日19時11分発行